

山鹿市文化財調査報告書 第3集

な か か い の も と
中 皆 本 遺 跡

中古閑地区県営経営体育成基盤整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

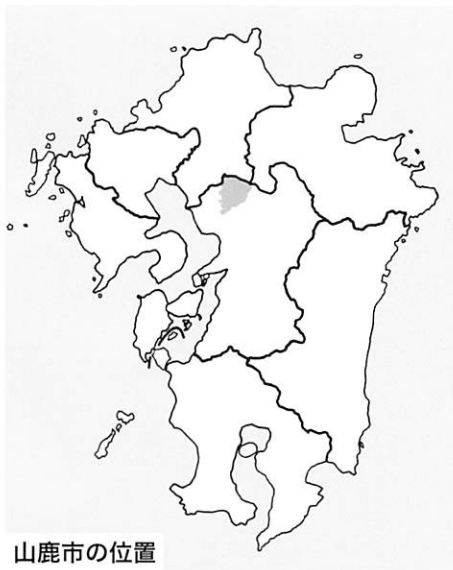


2007

熊本県 山鹿市教育委員会

な か か い の も と
中 皆 本 遺 跡

中古閑地区県営経営体育成基盤整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



2007

熊本県 山鹿市教育委員会



南西上空から見た調査地。右から左(北西方向)に菊池川が流れる。遺跡の所在する台地上は国道を中心に宅地化が進み、氾濫原一帯は水田や畑の利用が卓越する。山地は福岡・大分の県境となる。

1; 1次調査地
2; 2次調査地
A; 中村双子塚古墳
B; 中村廃寺(塔心礎)

南西上空から見た調査地。土地利用は、段丘上の宅地と氾濫原の農地に明確に区分でき、両者の境界付近に調査区が位置している。

1次調査地の北東300mの位置に、平安時代の中村廃寺塔心礎が所在する(市史跡)。段丘傾斜面の中位に立地するが、平坦面が狭小なため、三重程度の塔のみが存在したと想定されている。未調査で住宅地内に位置するため、詳細は不明である。

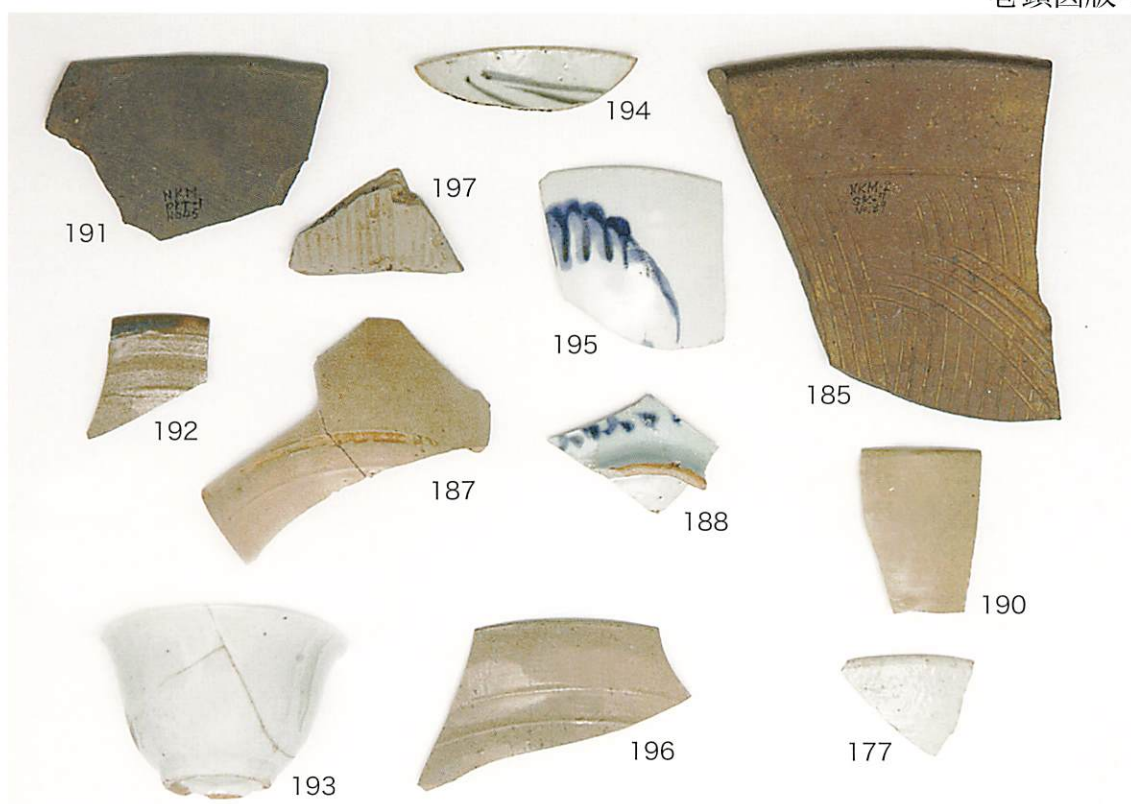
塔心礎からさらに北東300mの位置に、中村双子塚古墳が所在する。平成14年に二重周溝の一部で発掘調査が実施され、多量の埴輪・草石が出土した。埴輪には円筒・朝顔形埴輪があり、人物(力士や巫女)、動物(ウマや水鳥)など多様な形象埴輪が含まれる。6世紀後半の築造で墳丘長60m以上とされ、当該時期における菊池川中流域の最大の方後円墳である。

A ; 中村双子塚古墳
B ; 中村廃寺(塔心礎)





1. 2次調査 A 区全景（東から菊池川を臨む）
2. 2次調査 A 区建物 SB-1（南東から）



1. 2次調査 A 区出土遺物 (柱穴・土坑)

2. 2次調査 A 区出土遺物 (土坑 3)

序 文

山鹿市教育委員会では、熊本県鹿本地域振興局土木部の依頼を受け、中古閑地区県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

今回報告する中皆本遺跡の発掘調査は、平成 16 年度および 17 年度に実施され、中世から近世にかけての遺物が多く出土しました。第 1 次調査で出土した中世の輸入陶磁器や土師質土器は、市内における、もっともまとまった資料です。また、第 2 次調査で出土した近世の集落跡は、九州内でも事例の少ない、貴重な成果となりました。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解を深め、さらには学術研究の進展に少しでも寄与するならば幸甚に存じます。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護に理解を頂き、多大なご協力を賜りました地元および関係諸氏、鹿本地域振興局および熊本県文化課の各位、そしてご指導ご助言を頂きました先生方に、深く感謝申し上げます。

平成 19 年 3 月

山鹿市教育委員会

教育長 田 中 宏

例 言

- 1 本書は、下記についての埋蔵文化財発掘調査報告書である。
 1. 調査地 1次調査 熊本県山鹿市中(なか)字川原 147-1 ほか
2次調査 山鹿市古閑(こが)字前 126-1 ほか
 2. 遺跡名 中皆本(なかかいのもと)遺跡(熊本県遺跡番号 208-203)
 3. 調査原因 中古閑地区県営経営体育成基盤整備事業
 4. 調査期間 1次調査 平成 17 年 1 月～3 月
2次調査 平成 17 年 12 月～平成 18 年 3 月
整理調査 平成 18 年 6 月～平成 19 年 3 月、出土文化財管理センター
- 2 遺構実測の一部と基準点測量を、有限会社遺跡整備計画に委託した。空中写真撮影を、九州航空株式会社に委託した。遺物実測と写真撮影の一部を、有限会社遺跡整備計画に委託した。
- 3 調査に際して、下記の方々よりご教示を賜った。記して感謝します。

石 材 古家 修(山鹿市文化財保護委員)

輸入陶磁器 水野哲郎(熊本県立鹿本農業高等学校)

近世陶磁器 大橋康二(佐賀県立九州陶磁文化館)

阿南 亨(菊池市教育委員会)、大岡由記子(守山市教育委員会)、坂本重義(南関町教育委員会)、辻川智代(滋賀県立琵琶湖博物館)。
- 4 本書の執筆編集は、宮崎が行なった。
- 5 調査で出土した遺物および作成した図面・写真等は、すべて山鹿市出土文化財管理センターで保管している(〒861-0382 熊本県山鹿市方保田 128 番地・電話 0968-46-5512)。

凡 例

- 1 本書で用いた標高は TP(東京湾平均海面高度)である。方位は世界測地系に基づく。
- 2 本書に掲載した地図は「山鹿市都市計画図 1:2,500」平成 14 年、「山鹿市全図 1:25,000」平成 16 年の一部を調整したものである。
- 3 本書に掲載した遺構実測図の縮尺は 1/20・1/40・1/80、遺物実測図の縮尺は 1/3・1/4 を基本とする。各実測図にはスケールをつけた。
- 4 遺構は検出順に番号をつけ、性格を現す記号をつけた。SA; 柵・一本柱列、SB; 掘立柱建物、SD; 溝、SK; 土坑。

本文目次

序文	
例言・凡例	
目次 本文・挿図・表	
巻頭図版・写真・写真図版	
第1章 経過	
1. 調査の契機	1
2. 試掘調査と遺跡の発見、協議	1
3. 調査の進捗と概要	1
4. 調査の組織	4
5. 調査の方法	5
第2章 位置と環境	
1. 地理的環境	7
2. 歴史的環境	7
第3章 1次調査	
1. 調査区の設定	10
2. 1～4トレンチ	10
3. 5～7トレンチ	11
4. 5～7トレンチ出土遺物	13
5. 8トレンチ	18
6. 8-2トレンチ	18
7. 9トレンチ	18
8. 10トレンチ	19
9. 8・8-2・9・10トレンチ出土遺物	19
10. 11トレンチ	20
11. 11トレンチ出土遺物	22
12. 12～17トレンチ	25
13. 16・17トレンチ出土遺物	25
14. 18～21トレンチ	25
第4章 2次調査	
1. 調査区の設定	27
2. A区の層序	28
3. A区の遺構と遺物	30
4. 古代の遺構と遺物	30
(1)遺構	30
(2)遺物	33
5. 近世の遺構と遺物	35
(1)掘立柱建物	35
(2)柵	39
(3)溝	40
(4)土坑	40
(5)柱穴	43
(6)遺物	43
6. B区の層序と遺物	48
第5章 まとめ	
1. 1次調査の成果	52
2. 2次調査の成果	52

挿図目次

第1図 試掘トレンチと調査対象範囲	2
第2図 周辺の遺跡	8
第3図 1次調査のトレンチ	10
第4図 1トレンチ断面	11
第5図 5～7トレンチ溝SD-1平・断面	12
第6図 5～7トレンチ出土遺物①	14
第7図 5～7トレンチ出土遺物②	15
第8図 5～7トレンチ出土遺物③	16
第9図 8・8-2・10トレンチ断面	18
第10図 8～10トレンチ出土遺物	19
第11図 11トレンチ溝SD-4平・断面	20
第12図 11トレンチ出土遺物①	22
第13図 11トレンチ出土遺物②	23
第14図 11トレンチ出土遺物③	24
第15図 13・16・17トレンチ断面	24
第16図 16・17トレンチ出土遺物	25
第17図 18・21トレンチ断面	26
第18図 2次調査の調査区	27
第19図 A区土層断面	28
第20図 A区遺構配置	29
第21図 古代の柱穴と土坑①	31
第22図 古代の柱穴と土坑②	32
第23図 古代の遺物	34
第24図 近世の掘立柱建物①SB-1・2	36
第25図 近世の掘立柱建物②SB-3・4	37
第26図 近世の掘立柱建物③SB-5	38
第27図 近世の柵 SA-1・2・3	39
第28図 近世の溝と土坑	41
第29図 近世の土坑と柱穴	42
第30図 近世の土坑群	43
第31図 近世の柱穴	44
第32図 近世の遺物①遺構出土	45
第33図 近世の遺物②表土出土	47
第34図 B区の土層と遺物	49

表目次

表1 法令にもとづく届け出等	6
表2 周辺の遺跡	8
表3 1次調査のトレンチ	11
表4 2次調査 古代の遺構	50
表5 2次調査 近世の遺構	51

巻 頭 図 版

- 表 紙 調査地遠景(南東から)
巻頭図版1 調査地遠景(南西から)
巻頭図版2 調査地全景(南西から)
巻頭図版3 2次調査A区の遺構
1. 全景(東から)
2. 建物SB-1(南東から)
巻頭図版4 2次調査A区の遺物
1. 柱穴と土坑
2. 土坑3

写 真

- 写真1 1次調査作業風景 1～3トレンチ掘削
写真2 1次調査作業風景 11トレンチ排水
写真3 2次調査現地説明会
写真4 2次調査現地説明会
写真5 中村双子塚古墳の発掘調査
写真6 中村廃寺の塔心礎
写真7 「菊池川全図」調査地周辺
写真8 1・2トレンチ(南東から)
写真9 1トレンチ北壁(南西から)
写真10 5トレンチ北端(南西から)
写真11 6トレンチ全景(北から)
写真12 6トレンチ中央サブトレンチ(南から)
写真13 7トレンチSD-1サブトレンチ(南東から)
写真14 8トレンチ(南から)
写真15 8-2トレンチ(南から)
写真16 10トレンチ南壁(北から)
写真17 11トレンチ溝SD-4(北から)
写真18 11トレンチ溝SD-4(東から)
写真19 15トレンチ(西から)
写真20 16トレンチ落ち込み(北から)
写真21 18トレンチ(東から)
写真22 20トレンチ東壁(北西から)
写真23 A区東壁(南西から)
写真24 「新町絵図」に描かれた町並み

写 真 図 版

- PL1 調査地遠景
1. 調査地遠景(北西から)
2. 調査地遠景(南東から)
PL2 1次調査1～7トレンチ
1. 1トレンチ(南から)
2. 4トレンチ(南東から)
3. 5トレンチ溝SD-1(南から)
4. 7トレンチ溝SD-1(南から)
PL3 1次調査7トレンチ 溝SD-1
1. 7トレンチ溝SD-1(北から)
2. 7トレンチ溝SD-1壁面(南西から)
3. 7トレンチ溝SD-1土器出土(北西から)
4. 7トレンチ溝SD-1土器出土(西から)
PL4 1次調査8～9トレンチ
1. 9トレンチ(北西から)
2. 7トレンチ崩落(北西から)
3. 8トレンチ検出(南西から)
4. 8-2トレンチより1トレンチを臨む(南から)
5. 8-2トレンチより9トレンチを臨む(北から)
PL5 1次調査9トレンチ
1. 9トレンチ(南東から)
2. 9トレンチ検出(南東から)
3. 9トレンチ西側の落ち込み(北東から)
4. 9トレンチ北壁(南東から)
5. 9トレンチ南壁(北西から)
PL6 1次調査10・11トレンチ 溝SD-4
1. 11トレンチ溝SD-4(南西から)
2. 10トレンチ(北東から)
3. 11トレンチ(南西から)
4. 11トレンチ北壁(南西から)
5. 11トレンチ溝SD-4石材(南から)
PL7 1次調査12～18トレンチ
1. 12トレンチ(南西から)
2. 12トレンチ(北から)
3. 13トレンチ落ち込み(北から)
4. 14トレンチ(西から)
5. 16トレンチ落ち込み(東から)
6. 18～21トレンチ(南東から)
7. 18トレンチ検出作業(北西から)
PL8 2次調査地全景
1. 調査地遠景(南西から)
2. A区全景(上が北)
3. A区東側(上が北)

PL9 2次調査A区 全景

1. 東側(南東から)
2. 東側(北西から)
3. 西側(北西から)

PL10 2次調査A区 土層と調査前後

1. サブトレンチ4(南から)
2. 西壁と近世土坑(北東から)
3. 調査地全景(南西から)
4. 施工後(南西から)

PL11 2次調査A区 古代の土坑

1. 土坑SK-106・108(西から)
2. 土坑SK-108土器(南西から)
3. 土坑SK-116・138(南東から)
4. 土坑SK-101・102(南西から)

PL12 2次調査A区 古代の土坑と柱穴

1. 土坑SK-106(南東から)
2. 土坑SK-106(北東から)
3. 土坑SK-106(南から)
4. 土坑SK-118石材(南東から)
5. 土坑SK-134(南西から)
6. 柱穴126(南西から)
7. 柱穴133(北東から)

PL13 2次調査A区 近世の土坑

1. 近世土坑群(南西から)
2. 近世土坑群(南西から)
3. 近世土坑SK-8・11(南から)
4. 近世土坑SK-11(南から)

PL14 2次調査A区 近世の溝

1. 溝SD-2(南から)
2. 溝SD-136(南から)
3. 溝SD-2断面と柱穴36(南東から)
4. 溝SD-136断面(南西から)

PL15 2次調査A区 近世の土坑

1. 土坑SK-3(南西から)
2. 土坑SK-7と建物SB-1の柱穴14(北西から)
3. 土坑SK-3土器(北東から)
4. 土坑SK-7(南西から)

PL16 2次調査A区 近世の土坑と柱穴

1. 土坑SK-3土器(西から)
2. 土坑SK-7鉄器186(南西から)
3. 建物SB-1の柱穴14(東から)
4. 建物SB-1の柱穴20土器194(南西から)
5. 建物SB-1の柱穴20土器195(南東から)
6. 柱穴23石材(南東から)
7. 建物SB-5の柱穴24石材(南東から)

PL17 2次調査A区 近世の柱穴

1. 建物SB-1の柱穴25土器193(南から)
2. 柱穴26石臼198(南東から)
3. 柱穴27石材(南東から)
4. 柱穴30石材(南西から)

PL18 2次調査A区 近世の柱穴

1. 柱穴32石材(南西から)
2. 柱穴33石材(南西から)
3. 柱穴35石材(北東から)
4. 柱穴36石材(北東から)

PL19 2次調査B区

1. 全景(北西から)
2. 全景(南東から)
3. 西端(東から)
4. 柱穴状遺構(南東から)
5. 北壁(南東から)

出土遺物

PL20 1次調査5～9トレンチ

1. 白磁(第6図)
2. 青磁(第6図)
3. 青磁類(第6・10図)

PL21 1次調査5～7トレンチ溝SD-1

1. 土師質土器 小皿(第7図)
2. 土師質土器 杯(第7図)
3. 土器類(第8図)
4. 土器類(第8図)

PL22 1次調査5～17トレンチ

1. 白磁(第6図)
2. 白磁(第6図)
3. 輸入陶磁器(第10・12図)
4. 土器・陶磁器(第10・12図)
5. 近世陶磁器(第12図)
6. 土器類(第15図)
7. 鋳造関連遺物 表(第13・14図)
8. 鋳造関連遺物 裏(第13・14図)

PL23 2次調査A区(古代)

1. 土師器(土坑SK-101～108 第23図)
2. 土師器・須恵器(土坑SK-115～127 第23図)
3. 土師器・須恵器・瓦(表土 第23図)

PL24 2次調査A区(近世)

1. 肥前系陶磁器(表土 第33図)
2. 肥前系陶磁器(表土 第33図)
3. 土器・陶磁器(表土 第33図)

第1章 経 過

1. 調査の契機

調査対象となった山鹿市古閑一帯では、平成15年度より中古閑地区県営経営体育成基盤整備事業(旧名称;圃場整備事業)が実施されている。事業は農林水産省補助事業として採択され、平成15年度から20年度までの事業期間が予定されている。事業目的は以下のとおり。

「地区内の圃場は、大正時代に区画整理がおこなわれているものの地区内道路は狭く、用排水路も分離が進んでいないため、排水不良地域である。よって、本事業により農地の区画の変更を中心に、道路、用水、排水路等の圃場条件を総合的に整備し、担い手の育成に資するための農地の利用集積や土地利用の秩序化を一体的に実施することによって、当該地域の営農形態に適合し、土地及び労働生産性が高く、効率的な営農を行ない得る圃場条件に整備する。自然環境との調和に配慮し生産性の向上、維持管理費の節減を図り、地域の活性化の役割を担いつつ、土地利用型農業の確立を図る(事業計画書による)。」事業の受益面積は合計25haである。

2. 試掘調査と遺跡の発見、協議(第1図)

対象地区は周知の埋蔵文化財包蔵地区外であったが、遺跡が存在する可能性があったため、熊本県文化課が2年間にわたって試掘調査を実施した。平成15年5月27日から29日まで、対象地区の西半にトレンチ36箇所(担当は廣田静学参事、後藤貴美子・鶴崎裕子文化財保護主事)。平成16年3月22日から25日まで、対象地区の東半にトレンチ41箇所(担当は後藤貴美子・馬場正弘・鶴崎裕子文化財保護主事)。

その結果、一部のトレンチで遺構・遺物が検出されたため、新発見の遺跡として遺跡地図に登録された(注1)。遺跡名称は地名による(大字中、^{なか}字^{かいのもと}皆本)。

試掘調査の結果をうけ、県文化課、鹿本地域振興局および山鹿市農林整備課と数回の協議を経て、工事内容が埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲について、市教育委員会が発掘調査を実施することとなった(注2)。

3. 調査の進捗と概要

調査は平成16・17年度の二年に及んだため、調査次数を分けて区分した。

1次調査は平成17年1月14日から3月31日まで実施した。既存水路や畦等で調査区を細かく設定することを余儀なくされ、合計21箇所の狭小なトレンチを設けた。調査面積は約1,225㎡である。段丘縁辺の下位に位置する調査区(5～7トレンチ)で溝の一部を検出し、13世紀代の輸入陶磁器と土師質土器がまとまって出土した。氾濫原に位置する調査区(11トレンチ)では、近現代の用水路の一部を検出した。



第1図 試掘トレンチと調査対象範囲

・1次調査日誌抄

1月14日～ 調査区設定。

2月8日 機材搬入、重機掘削。1～4トレンチの検出、写真撮影。遺構なし。下層を確認するも、やはり遺構なし。

2月14日 5～8トレンチの検出、掘削。全体で遺物が出土するが、遺構の輪郭がつかめない。サブトレンチを掘削し、溝の一部であることが判明する。

2月21日 7トレンチの溝を掘削。土量が多く、作業効率が上がらない。一部の調査区では壁面から浸水、排水しながらの掘削となる。

2月28日 9～11トレンチの検出、掘削、写真撮影。11トレンチで石組みを検出する以外、遺構なし。石組みは近現代のものだが用水路か。7トレンチの溝から中世の土師質土器が多量に出土する。

3月7日 12～18トレンチの検出、掘削、写真撮影。11トレンチ石組み掘削。加工した凝灰岩を四段積み重ねている。12～18トレンチの一部で南への落ち込みを検出する。ごく少量の土器が出土。台地上からの流れこみであろう。7・9トレンチの壁面崩落。

3月14日 19～22トレンチの検出、掘削、写真撮影。遺構なし。試掘調査では縦穴状遺構が検出されているが、遺物も全く出土しない。測量開始。

3月22日 遺構実測開始。航空写真撮影。

3月28日 重機埋め戻し。機材撤収。



写真1 1次調査作業風景 1～3トレンチ掘削



写真2 1次調査作業風景 11トレンチ排水

2次調査は平成17年12月5日から平成18年3月20日まで実施した。対象地は段丘端部の平坦面に位置するが、南北で地形差があり、南側をA区、北側の低い部分をB区とした。調査面積は1,050㎡である。A区では、掘立柱建物5棟・柵3条、土坑、柱穴などからなる近世集落の一部を検出した。これに対してB区では、ほとんど遺構・遺物を検出しなかった。A区の近世集落遺構は県内でも調査事例に乏しく、貴重な成果となったため、平成18年2月25日に一般を対象とした現地説明会を実施した。説明会には新聞等の報道もあり、120名以上の参加があった。

・2次調査日誌抄

12月5日 機材搬入、調査区設定。竹の伐採。チェーンソー3台、ナタ、鋸を駆使。

1月11日 A区の重機掘削。竹の根がからみ、包含層の検出と掘削が困難である。基盤層となる明黄灰粘質土の上面で、柱穴・溝・土坑などの遺構を確認する。

1月23日 A区東半の遺構検出。検出面が礫混じりのため、遺構を明確に捉えにくい。遺構検出を繰り返す。柱穴群の平板測量、掘立柱建物の構成を図上と現地で検討する。三角定規を駆使。A区東半の柱穴を半裁する。建物を構成する柱穴から近世陶磁器片が出土。

2月1日 A区中央の土坑群を掘削する。かなり深く、一部の土坑では湧水がある。近世以降の墓坑か。旧地形を確認するためA区南側の斜面4箇所にサブトレンチを設定し、掘削する。

2月24日 報道に資料提供。現地説明会開催。好天に恵まれ、盛況であった。A区の清掃、航空写真撮影。A区東半の柱穴を完掘する。埋土から石材が出土する柱穴があるが、礎石には小さい。根固めか。断ち割り、写真撮影と断面実測を行なった後、石材を取り上げる。

3月6日 A区西半の遺構検出。東半の遺構埋土とは土質が異なり、古代の遺物が出土する。A区西半の遺構掘削。写真撮影・平面図・断面図の実測。B区の重機掘削。基盤層を確認。包含層から若干の遺物が出土するが、遺構は時期不明の柱穴のみ。検出状況の写真撮影、平面図・断面実測図の作成。

3月20日 埋め戻し。機材整備。撤収。



写真3 2次調査現地説明会



写真4 2次調査現地説明会

4. 調査の組織

調査責任者 田中 宏(教育長)

調査総括 中村幸史郎(文化課審議員兼文化財係長)

調査担当 宮崎 歩(文化財係主任主事)

調査事務局 木村理郎(文化課長)、山口健剛(文化財係主任主事)

現地作業員 井口計介 岩本正美 有働フサ子 王丸ゆかり 大古閑治美 垣田菜美 古閑 蕾
近藤ヨシミ 田上亜紀 築嶋節子 富田スミ子 永田 敬 中原美代子 馬場栄治
濱武美也穂 平尾トシ子 平尾直孝 堀京之助 宮崎喜久男 山本正則 若杉清美
若杉敬子

整理作業員 生島統夫 大森よう子 小原朱実 城 葉子 野満彩子 淵上厚子 森みつよ
山口美智子 渡邊 晃

5. 調査の方法

現地調査は設定した調査区の表土を重機によって掘削することから開始し、調査員が包含層の状態を確認しながら遺構面まで掘り下げた。その後、作業員によって遺構面を清掃し、遺構を検出した。検出状況の写真撮影と平板測量を実施し、柱穴は建物の構成を検討したのち、土層断面観察用の畦を残して埋土を掘削した。遺構番号は検出順に設定し、遺構単位・土層単位で遺物を取り上げた。柱穴で構成される掘立柱建物・柵の遺構番号は、整理段階で設定したものである。

調査の進捗状況に応じて適宜遺構実測・写真撮影を実施した。平・断面の実測は 1/20 縮尺を基本とし、座標測量とともに一部を委託した。写真はカラーリバーサル・モノクロフィルムを使用し、基本的に 35mm フィルムカメラを、補助用としてデジタルカメラ、全体写真用として中型カメラを使用した。各調査の最終段階には調査地周辺の環境を把握できるよう、空中写真撮影業務を委託した(1次調査：セスナ、2次調査：RCヘリによる)。

整理調査は遺物を水洗・乾燥し、取り上げた単位ごとに台帳を作成した。遺物量は1次調査で大小のビニール袋で177袋(155kg)、2次調査で173袋(133.7kg)である。内法57×42×19cmのミカンコンテナに換算して37箱(1次調査20箱、2次調査17箱)になった。ほとんどが表土および検出中に出土した遺物、2次調査地の柱穴から出土した石材で、遺構に伴い時期の判断できる大きさの遺物は、ごくわずかである。

遺物は調査員が選別し、遺構の時期を示すもの、特徴的なものを中心に選別し、注記後接合した。選別に際して、文化財係の協議と外部専門家の意見を頂いた。石材はすべて計測とメモ写真を撮影し、土器類とは別に屋外に保管した。遺物の実測・写真撮影は一部を委託した。

調査は農作業終了後に開始したため、いずれも冬季となった。霧や霜、まれに積雪を除去しながらの調査は困難なものであった。1次調査は既設の用水路に隣接した調査区が多く、降雨によって調査区が水没することがしばしばであった。また、調査区の幅が狭いため遺構の平面確認が十分にできなかった箇所もある。2次調査は丘陵上の調査区であったが密集した竹林となっており、重機が進入できる状態まで伐採する作業に、大変な労力を要した。山仕事に慣れた作業員諸氏の大活躍なくして、調査着手に至らなかったことを明記しておく。このほか担当者の準備不足に起因する不手際も多く、反省する点が多い調査であった。

注

- 1. 平成 16 年 3 月 31 日付け教文第 3696 号「遺跡地図(マイラー原図)について(通知)」。山鹿市内でもっとも新しく発見された遺跡である。
- 2. 県事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を市町村教育委員会が実施するのは、平成 7 年 8 月 7 日付け教文第 675 号「文化財保護の体制整備について(通知)」にもとづく。

内容	16 年度 (1 次調査)	17 年度 (2 次調査)	備 考
実施協定	17.1.14		
委託契約	17.1.14	17.11.15	18 年度整理調査は 18.7.7
発掘の通知	17.1.6 鹿本農整第 696 号	17.11.4 鹿本農整第 653 号	法 57 条 3-1、94 条 1
発掘調査の通知	17.1.6 山博 M8-61 号	17.11.30 山文 M8-87 号	58 条 2-1、99 条・県教委へ
実績報告	17.3.31 山文 M8-54 号	18.3.31 山文 M8-119 号	振興局へ
結果報告	17.3.31 山文 M8-55 号	18.3.31 山文 M8-120 号	県教委・土地所有者へ
発見届・保管証	17.3.31 山文 M8-86 号	18.3.31 山文 M8-121 号	山鹿警察署・県教委へ
文化財認定	17.5.30 教文第 580 号	18.4.20 教文第 138 号	県教委から
譲与申請書	17.10.21 山文 M8-71 号	18.10.24 山文 M8-116 号	県教委へ
譲与通知	17.11.9 教文第 1998 号	18.11.7 教文第 1975 号	県教委から

表1 法令にもとづく届け出等



写真5 中村双子塚古墳 周溝および遺物出土状況

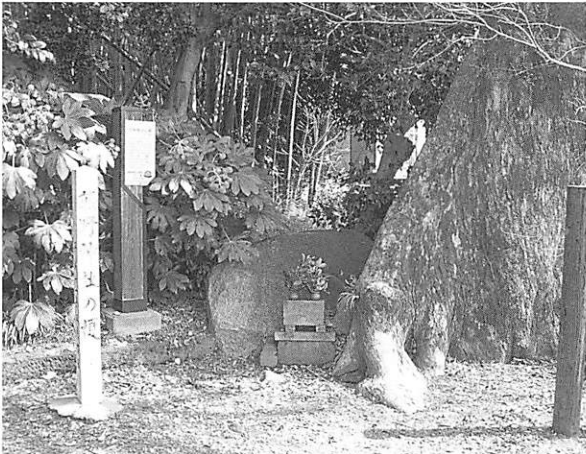


写真6 中村廃寺の塔心礎

第2章 位置と環境

1. 地理的環境（巻頭図版1・2）

山鹿市は熊本県の北部に位置し、北は福岡・大分県と、東は菊池市、南は鹿本郡植木町・玉名郡玉東町、西は玉名郡和^{なごみ}水町と接している。平成17年1月15日、山鹿市・鹿北町・菊鹿町・鹿本町・鹿央町の1市4町が合併し、新たに山鹿市となった。合併後の面積は299.67km²(東西21.5km、南北26.7km)、人口は57,727人(平成17年度国勢調査)。

市域の地形は北部の山地と南部の低地に大別できる。北部の山地は、県境である筑^{ちく}肥^ひ山地からなり、国^{くに}見^み山(1018m)・八^や方^{ほう}ヶ^が岳^{たけ}(1052m)などの山々がそびえる。南部の低地は、市域を東から西へ貫流する菊池川の形成した氾^{さくろく}濫^{らん}原(菊鹿平野)で、水田や畑に利用されている。北部の緑豊かな山林に源を発する岩野川・上内田川は菊池川に注いでいる。市内を南北に縦断する国道3号によって福岡・熊本と連絡し、東西に伸びる国道325・443号と3号が交わる付近が中心市街地である。調査地周辺では国道325号と、県道301号方保田山鹿線(通称旧3号)を中心に、宅地化が進んでいる。

2. 歴史的環境（第2図・表2）

中皆本遺跡は山鹿市南部、菊池川中流右岸の河岸段丘平坦面および段丘下位の氾^{さくろく}濫^{らん}原に立地する。氾^{さくろく}濫^{らん}原一帯は大正四(1915)年に圃場整備が実施され、水田・畑として利用されてきた。周辺には多くの遺跡が分布しているが、調査の及んでいるものは少ない。市域の遺跡概要については既刊の報告書を参照されたい(注1)。ここでは近接した段丘上に位置する中村双子塚古墳、中村廃寺について略述する。

中村双子塚古墳は古墳時代後期の前方後円墳で、墳丘はかなり削平されているものの60m以上の規模になると想定されており、この時期の菊池川中流域の古墳として最大級の大きさである。平成14年に二重周溝の一部が発掘調査され、多量の円筒埴輪・形象埴輪と葺石が出土した(注2)。

中村廃寺塔心礎は移動しているが、市内唯一の心礎である。長径1.76m、短径1.1m、中心に単孔がある。周辺で平安時代後期の瓦類が採集されており、三重塔が想定されている(注3)。

また、周辺では近世の鋳物師に関する伝承や遺物なども残る。中村の銘がある梵鐘が報告されており(注4)、近世以降も生産が継続したというのが、操業の実態は不明な点が多い(注5)。

調査地の北側には、鹿本鉄道の線路跡が残る(注6)。大正4年、植木から山鹿を結ぶための軌道会社が創立され、翌年輕便鉄道として鹿本鉄道株式会社となった。自動車の進出による営業衰微や、水害による線路陥没などの被害によって、昭和40年に廃止された。地元住民によれば、線路敷きの造成はかなり大規模なものだったらしく、調査地一帯の地形(とくに段丘崖のライン)は、この際に大きく改変されたという。

注

1. 山口健剛『梅迫遺跡』『方保田東原遺跡(5)』山鹿市文化財調査報告書第16・17集、山鹿市教育委員会、2004。
2. 山口健剛「六世紀前半の大量の埴輪」『季刊考古学』第84号、雄山閣、2003。
3. 塔心礎は市指定文化財(史跡)。桑原憲彰「中村廃寺について」『熊本史学』18号、1970。『山鹿市史』上巻、1985:348-349頁
4. 『山鹿市史』下巻、1985:619頁。山鹿市山鹿の真覚寺、元禄四(1691)年銘。「治工 山鹿郡中村住人大仁田伊左衛門金次」。合志市野之島の浄蓮寺、享保七(1722)年銘。「作者/山鹿中村住藤原/阿蘇品七郎兵衛吉次」。
5. 『山鹿市史』下巻、1985:299頁。明治初(1868)年、山鹿町と中村の生産量は鉄鍋が山鹿町4万個、中村5万個。鉄釜中村2万個、鋤先1万個。明治の不況により生産が減少したという。
6. 『懐かしの風景展—ふるさとに汽車が走ったころ—』展示図録、山鹿市立博物館、1990。現在、線路跡はサイクリングロードとして、熊本までの全長34kmが整備されている。

下の写真は「菊池川全図」に記されている調査地周辺である。「菊池川全図」は阿蘇山麓の源流から、有明海に注ぐ河口まで、全長70kmにわたる測量図である。幕末の菊池川流域の様相が、詳細に記録されている。作成は安政二(1855)年、菊池川絵図方御用係井上英太右衛門による。幅0.8m、長さ30.6m。紙本着色。縮尺二千分の一。菊池市指定文化財、菊池市教育委員会所蔵。

『菊池市の文化財』第二集、菊池市文化財保護委員会、1974。

「第6章 近世の菊池」『菊池市史』下巻、市史編さん委員会、1986。

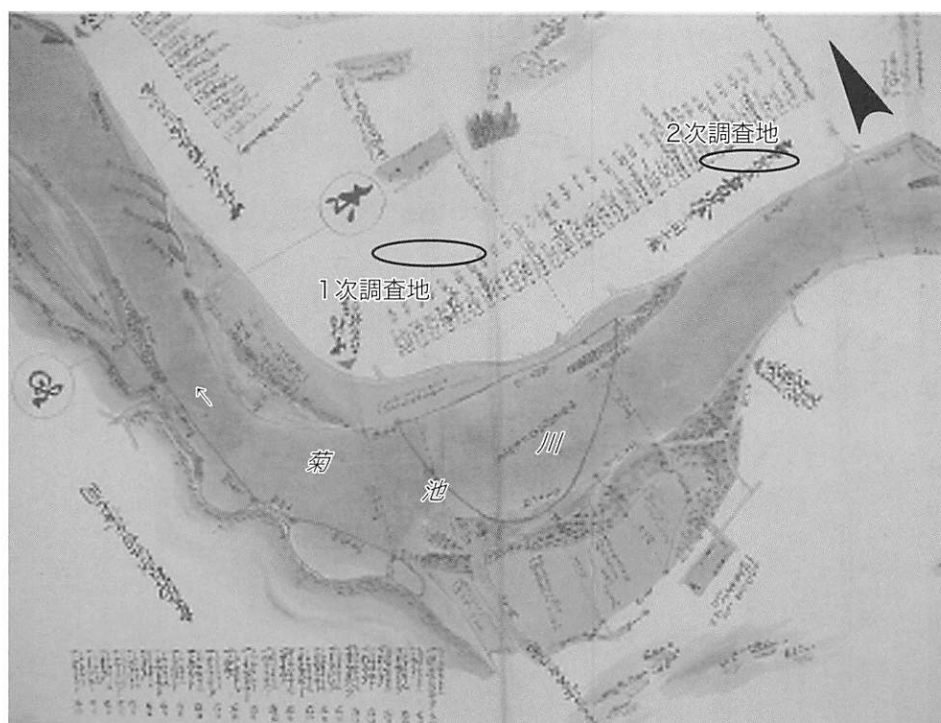


写真7 「菊池川全図」調査地周辺

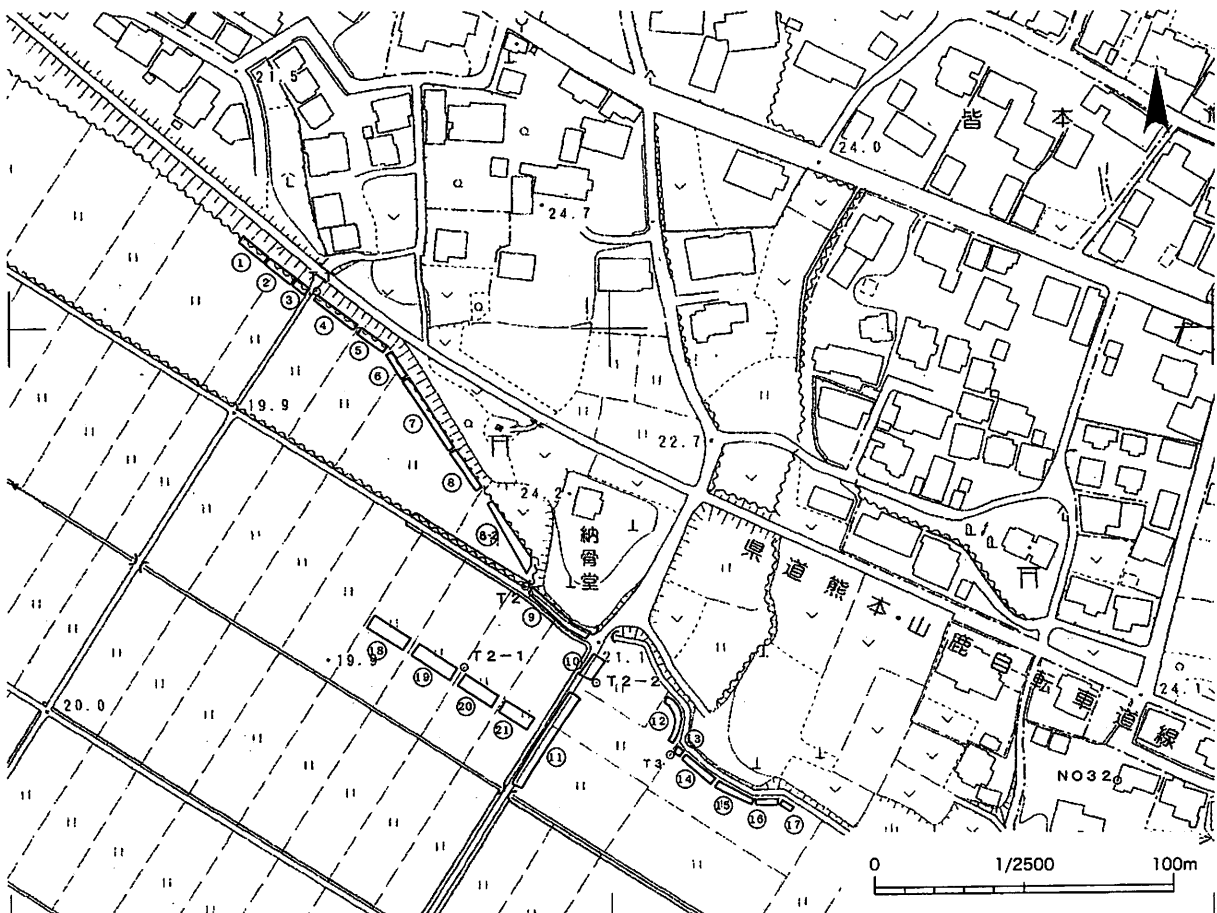
第3章 1次調査

1. 調査区の設定 (第3図、表3、PL1)

1次調査地は対象地の西半にあたる。東西200m、南北240mの範囲で排水路部分(幹線排水路1号・支線1号・支線3号)に1～9・12～21トレンチ、道路部分(支線道路2号)に10・11トレンチを設定した。調査区は幅2～5m程度と狭く、検出した遺構の全体は把握できなかった。

2. 1～4トレンチ (第4図、PL2-1・2-2)

調査地の北西端に位置する調査区。いずれのトレンチでも遺構面を確認しなかった。西から順に1・2・3、里道をはさんで4トレンチとした。1トレンチの現地表面は19.15m付近にあり、0.8～1.3m程度掘削した。表土と床土および以下の堆積とも水平であり、標高16.4m付近で粘質土に変化した。北側の既存水路からしみ出る水を排水しながらの掘削であった。床土に近現代の陶磁器片がごくわずかに含まれていたが、混入したものである。



第3図 1次調査のトレンチ

トレンチ	長さ	幅 (m)	面積 (㎡)	遺構	遺物 (kg)	下層面積 (㎡)	備考
1	10.5	3.0	31.5	-	0.26	15.0	下層確認 L 5.0
2	10.5	2.7	28.4	-	0.08	12.2	下層確認 L 4.5
3	5.0	3.0	15.0	-	0.70		
4	16.0	2.5	40.0	-	2.84		
5	10.5	2.5	26.3	○	60.66	SD - 1	
6	9.5	2.2	20.9	○	4.14	SD - 1	
7	27.5	2.5	68.8	○	56.52	SD - 1	2区壁崩落
8	15.0	2.5	37.5	○	0.92	SD - 2・3	近世
8-2	30.0	5.0	150.0	-	0.12		
9	30.0	2.5	75.0	-	2.99		落ち込み、サブトレ3箇所 壁崩落
10	8.0	4.5	36.0	-	0.74	36.0	下層確認
11	36.0	4.0	144.0	○	19.79	100.0	SD - 4 近世・下層確認 L 25.0
12	17.5	2.0	35.0	-	1.78		
13	2.5	2.0	5.0	-	0.10		落ち込み 近世以降
14	13.0	2.0	26.0	-	0.08		
15	13.0	2.5	32.5	-	0.24		
16	8.0	2.0	16.0	-	1.88		
17	4.5	2.0	9.0	-	0.26		落ち込み 近世以降
18	14.0	5.0	70.0	-	0.32		
19	15.0	5.0	75.0	-	0.30		
20	13.0	5.0	65.0	-	0.24		
21	11.0	5.0	55.0	-	0.16		
小計			1,061.8		155.12	163.2	
合計			1,224.9				下層面積は、確認のため掘り下げた範囲

表3 1次調査のトレンチ

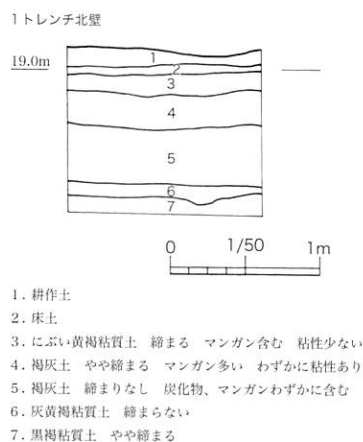


写真8 1・2トレンチ (南東から) 写真9 1トレンチ北壁 (南西から)

第4図 1トレンチ断面

3. 5～7 トレンチ (第5図、PL2-3～PL3)

4 トレンチの東に位置する調査区。中世の溝 SD-1 の一部を、45m にわたって検出した。溝は南北方向に流れ、地形が改変される以前の段丘崖南縁に沿う流路だったようである。幅は兩岸を同時に検出していないため不明だが、少なくとも掘削したトレンチの下端幅よりも広く、2m 以上ある。検出面を誤認し、重機掘削の段階で掘りすぎたが、調査後に図面を検討した結果、検出面を1層分上げている。このため断面図と平面図は整合性がない。溝の本来の検出面は標高 18.9～19.05m 付近で、17.9～18.0m まで掘り込んでおり、深さは 0.8～0.9m 程度。な



写真10 5トレンチ北端（南西から）



写真11 6トレンチ全景（北から）

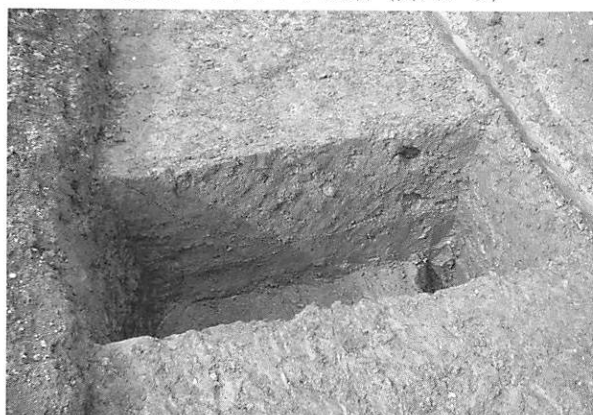


写真12 6トレンチ中央サブトレンチ（南から）



写真13 7トレンチSD-1サブトレンチ（南東から）

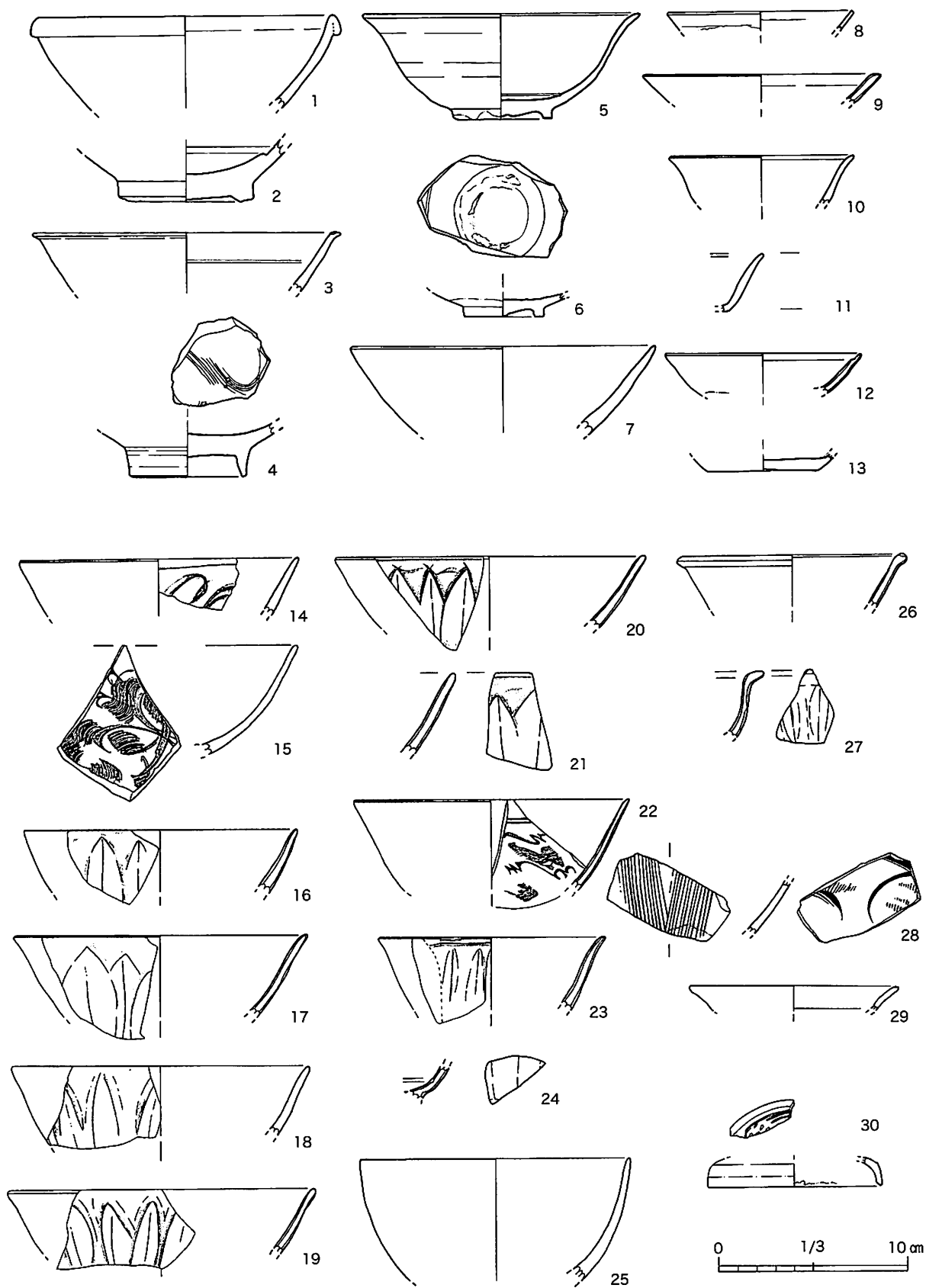
お、トレンチ南部では堆積が北部より細かい単位になっている。別の遺構だった可能性があるが、平面検出で捉えることができなかった。この部分は湧水が激しかったため、完掘できていない。深さは不明だが、検出面から1.2m(標高17.6m) 以下までである。断面を図化できなかった深い箇所から、輸入陶磁器・土師質土器がまとまって出土した。

4. 5～7トレンチ出土遺物（第6～8図、PL20-22）

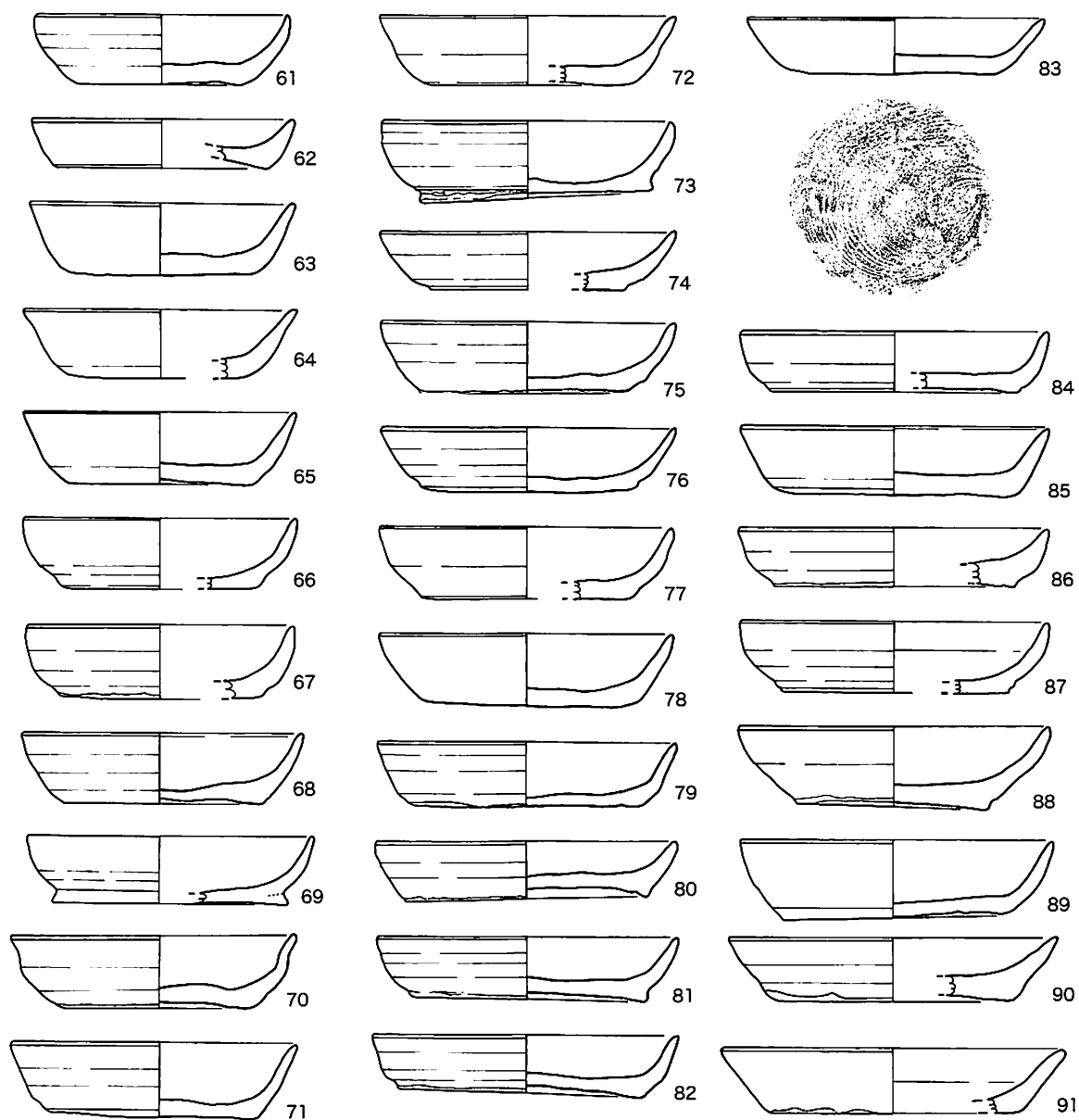
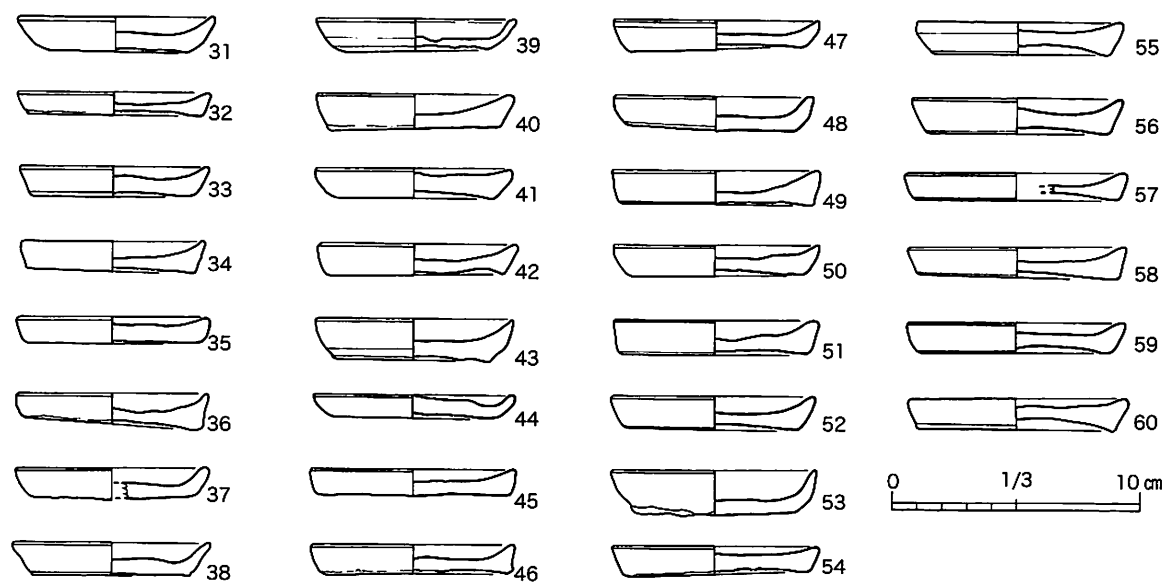
輸入陶磁器、土師質土器、国産土器、瓦器などがある。溝という遺構の性格上、弥生時代から近世までの長期間にわたる多様な遺物を含むが、中心となるのは下層付近から出土した、12～13世紀の輸入陶磁器および土師質土器である。

輸入陶磁器には、白磁(碗・小碗・皿)、青磁(龍泉窯系碗・杯、同安窯系碗・皿)、青白磁(合子蓋) がある。なお、これらの年代観は大宰府編年(注1) に基づくもので、搬入経路や伝世等による時期差が生じるため、当該年代を直接遺構の時期に比定できないことに注意が必要である。

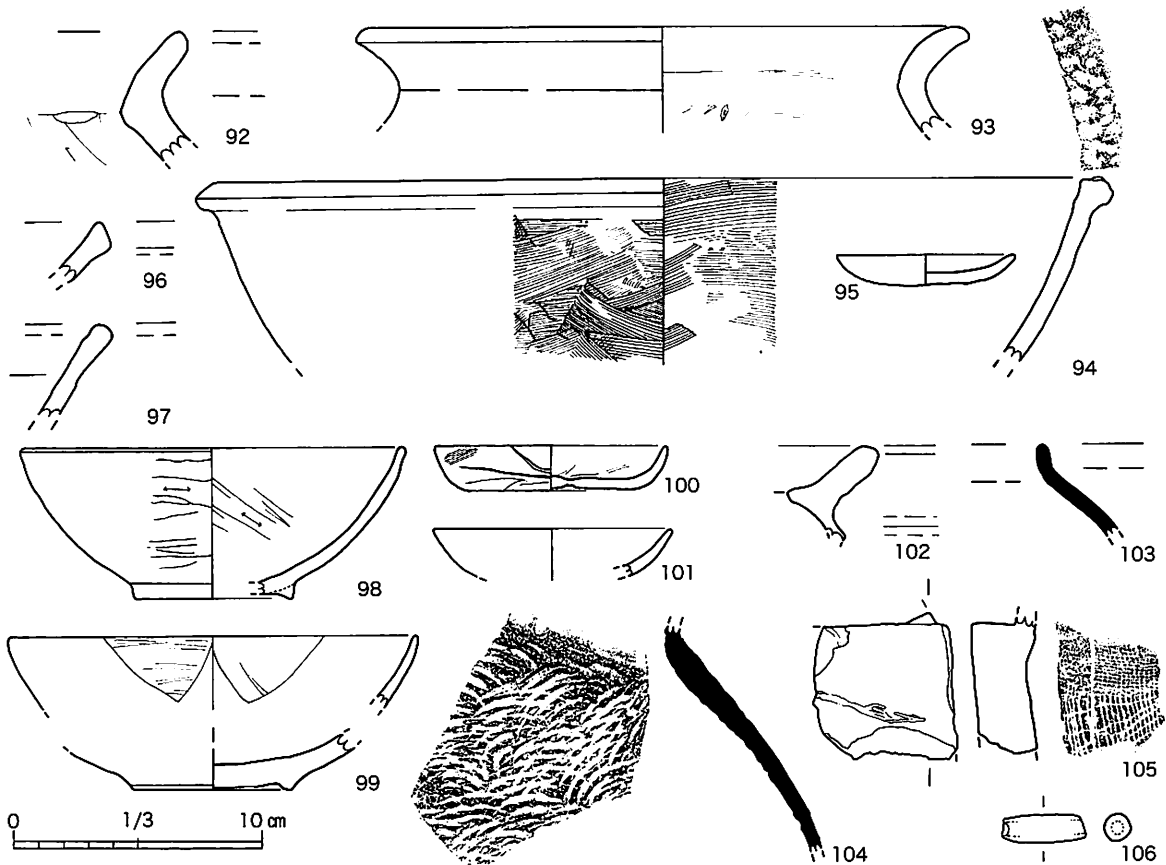
白磁碗1は玉縁口縁から体部にかけての破片、2は底部破片。II類(11世紀後半～12世紀前半)。碗3の口縁は外反する。内面に浅い二条の沈線を施す。底部4は高く直立した高台の破片、内面に櫛目文。V類(12世紀代)。碗5は口縁端部の釉を掻き取り、口禿げとする。内面見込に圈線があり、その直径は高台よりやや広い。高台は施釉しない。IX類(13～14世紀)。碗6は底部の破片、内面の釉を輪状に掻き取る。VIII類(12世紀後半)か。碗7は形式分類不明、口縁が直線的に広がる。小碗8は口縁端部の小片、端部は釉を削り取る。X類(13世紀後半)。



第6図 5～7トレンチ出土遺物①（輸入陶磁器）



第7図 5～7トレンチ出土遺物②（土師質土器）



第8図 5～7トレンチ出土遺物③（土器類）

白磁皿9の口縁は直口で、釉はやや厚い。VIII類(12世紀中～後半)。皿10・11はわずかに外反する口縁の釉を掻き取り、口剥げとする。皿12も口縁内面の釉を掻き取るが外反せず、体部下半に釉をかけない。皿13は平らな底部の破片、全面に施釉する。IX類(13世紀後半～14世紀前半)。

龍泉窯系青磁碗14の口縁は丸く、直線的に開く。内面に片彫蓮花文を有する。I-2類。碗15は内面全体に櫛目文を有する。I-3類(12世紀中～後半)。碗16の口縁はわずかに外反する。外面にくずれた蓮弁がある。碗17の外面蓮弁は幅広く、彫りも浅い。碗18～21も外面の蓮弁は浅く整わない。II類(13～14世紀)。碗22の口縁はわずかに外反する。内面に櫛目文。碗23の口縁も短く外反し、外面に幅の細い蓮弁がある。破碎後、一部に熱を受けた痕跡がある。碗24は体部下半から高台にかけての小破片。外面に蓮弁の一部が残る。III類(13世紀中～14世紀初頭)。碗25は口縁から体部にかけての破片、内外面ともに無文で形式分類不明。

龍泉窯系青磁杯26は口縁付近の破片、体部から直線的に外に開き、端部は短く屈折して凹面をなす。外面は無文。III-1類。杯27は口縁付近の小破片、口縁はやや内湾気味に立ち上がり、短く屈折し上面は凹面をなす。外面に鎬蓮弁文を有する。III-4b類(13世紀中～14世紀初頭)。

同安窯系青磁碗28は体部の破片、内外面に櫛目文がある。同安窯系青磁皿29は口縁部の小破

片、わずかに外反する体部の内面下半には、段状のくぼみが一部に残る。

青白磁 30 は合子蓋。外面上半にのみ施釉する。上面に型押しで草花文を施す。

土師質土器には小皿、杯、甕、鉢がある。ほとんどが小皿と杯で、これ以外の種類はごく少ない。

小皿 31 ～ 60 は中央のやや膨らんだ底部からわずかに口縁を立ち上げ、ヨコナデを施す。立ち上がりが極端に短く、コースター状のものもある。底部外面は静止糸切りのみで未調整。平面形や口縁部の水平はゆがんだものが多い。焼成は良好で、表面に火襷状の斑文が見られる個体もある。いずれも付着物(ススや赤彩)の痕跡なし。計測できた個体の直径 7.2 ～ 8.6cm、平均 7.93cm。器高 0.9 ～ 1.7cm、平均 1.27cm。

杯 61 ～ 91 の調整や胎土・焼成は、小皿と同様である。底部を切り離した際、はみ出した粘土が広がったままの個体が多い。計測できた個体の直径 10.8 ～ 14.7cm、平均 12.64cm。器高 2.1 ～ 3.6cm、平均 2.9cm。

土師質土器の甕 92・93 は口縁部の小破片。甕 92 は口縁がくの字状に屈曲し、内面に稜をなす。甕 93 はゆるやかに外反する。鉢 94 は口縁端部を外につまみ、二列の押圧文を施す。内外面の全体に細かい単位の手調整を施す。小皿 95 は全体に黒色を呈し、内面にヘラ磨きを施す。

国産の土器類にはこね鉢・瓦器がある。東播系こね鉢 96 は口縁端部の小破片、端部に外傾する面をつくる(11 世紀後半～13 世紀初頭)。こね鉢 97 も須恵質で、端部は丸い。

瓦器には碗、小皿がある。碗 98 は底部から丸みを持って立ち上がり、口縁端部は丸く外面がわずかにくぼむ。断面三角形の低い高台を貼り付ける。内外面にヘラミガキを施すが、炭素の吸着はほとんど見られず、口縁端部付近のみが黒化している。碗 99 も炭素吸着がごくわずかである。類似した胎土の底部片があるが、接点がない。小皿 100 は平らな底部から口縁を立ち上げる。内外面に不定方向の手磨きを施す。器表面は、ほとんど黒化していない。小皿 101 は底部から口縁にかけて丸く立ち上がる。内外面はナデのみで磨いた痕跡がなく、内面は黒化していない。

以下は検出中に出土したものと、溝埋土から出土した中世以外の時期の流れ込んだ遺物である。弥生土器の甕 102 は口縁部のみが残る。口縁の外面直下に、三角形の貼り付け突帯のわずかな痕跡がある。黒髪式の甕棺か。須恵器短頸壺 103 は近世陶器様の焼き上がりである。須恵器壺 104 は肩部片、外面に自然釉がかかり調整は判然としない。内面は同心円タタキ。丸瓦 105 は末端部、玉縁付近の小破片。凹面に布目、凸面に植物等の繊維片が残る。上方の中村廃寺からもたらされたものであろう。この他にも数点の瓦の破片が出土している。土師質の土鍾 106 は、ほぼ完形である。河川に近い調査地だが、漁労に関する遺物としては、土鍾数点が出土したのみであった。

5. 8 トレンチ (第9図、PL4-3)

7 トレンチの南に位置する調査区。近代以降の溝 SD-2・3 を検出した。ともにほぼ南北方向。SD-2 は表土直下の標高 19.4m 付近で検出し、深さ 0.5m、底部は平坦である。埋土は灰褐土で、ごくわずかに近世陶磁器の破片が出土した。南側を SD-3 に掘り込まれている。SD-3 は標高 19.5m 付近で検出し、深さ 0.4 ～ 0.45m、底部は平坦である。埋土は灰黄褐土。掘り込み面から見て、これらの溝は新しい時期の所産である。遺構検出中にごく少量の遺物が出土した。

6. 8-2 トレンチ (第9図、PL4-4・4-5)

8 トレンチの南に位置する調査区。遺構は検出しなかった。現地表面は標高 19.6m 付近にあり、19.1m 付近で軽石を多量に含む地山層となる。地元の方によれば、現在畑となっているトレンチ東側の平坦面は、鉄道線路の造成で削平されたとのことである。調査区もこの際に削平されたものか。検出中にごく少量の遺物が出土した。

7. 9 トレンチ (PL4-1・5)

8-2 トレンチの南に位置する調査区。既存の用水路による攪乱が著しく、調査区の半分以上が破壊されていた。また、調査最終段階で用水路から雨が多量に流入して全体が水没してしまい、断面図が作成できていない。南西半で南方向への落ち込みがあった。埋土には碎石が含まれており、新しいものである。ここから若干の遺物が出土した。

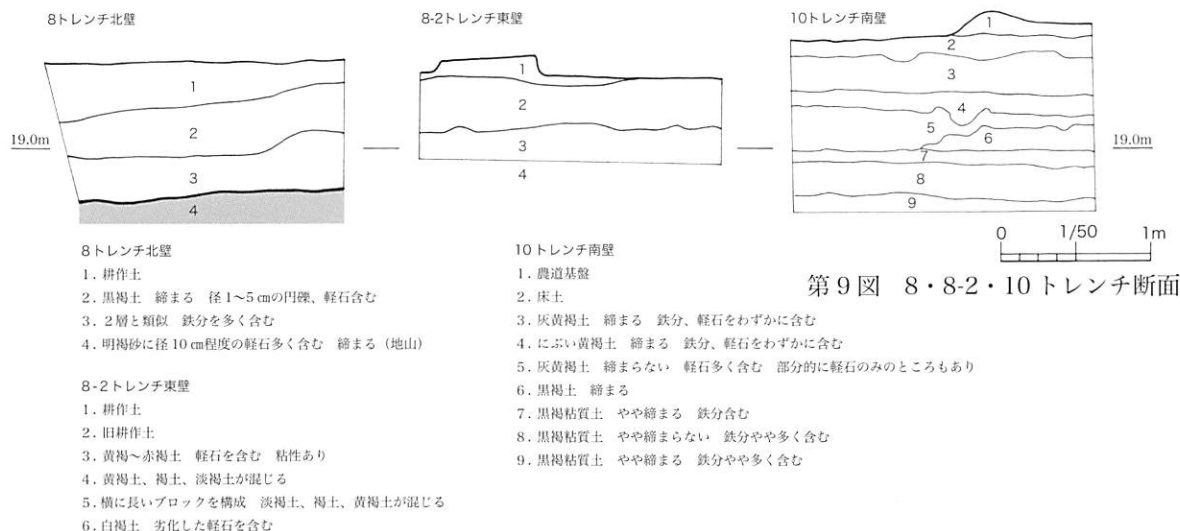


写真14 8 トレンチ (南から)



写真15 8-2 トレンチ (南から)



写真16 10 トレンチ南壁 (北から)

8. 10 トレンチ (第9図、PL6-2)

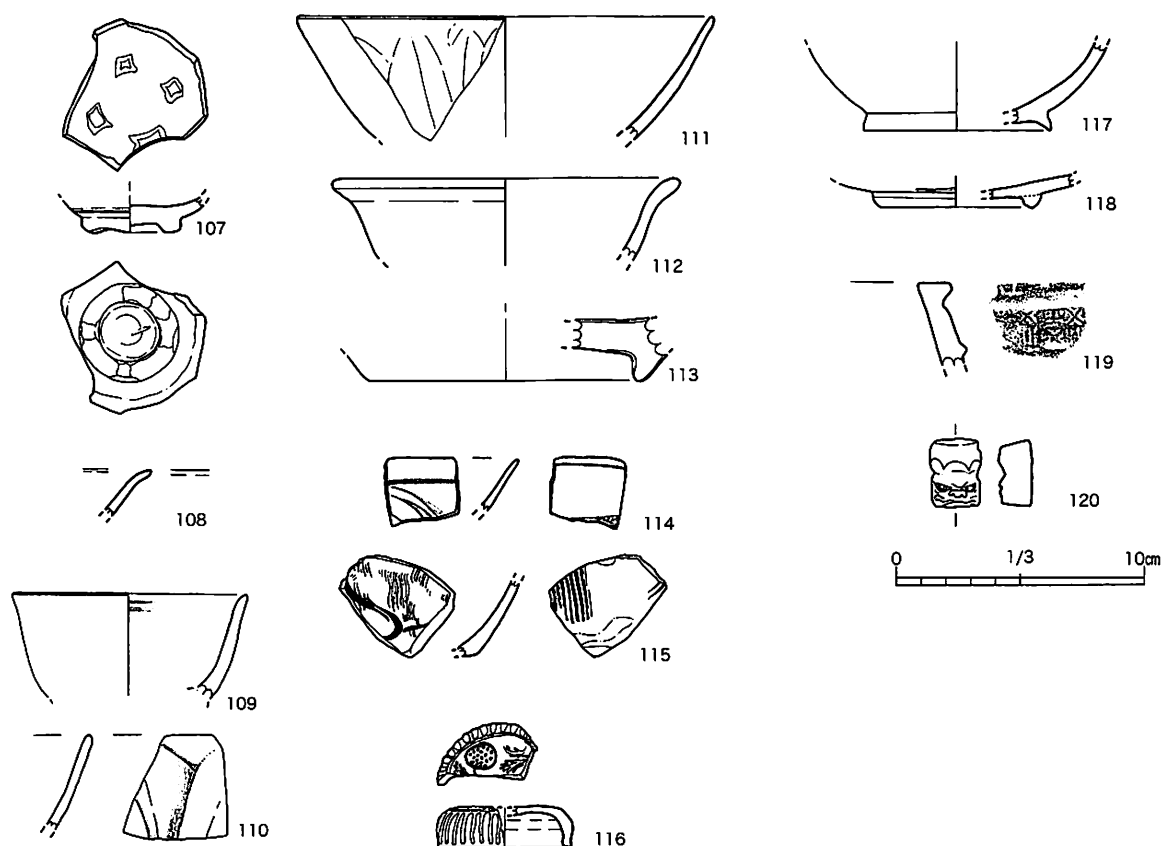
9 トレンチの南に位置する調査区。現地表面は 19.75 ～ 19.8m 付近にあり、18.6 ～ 18.7m 付近で締まった黒褐粘質土となる。遺構は検出しなかった。検出中に若干の遺物が出土した。

9. 8・8-2・9・10 トレンチ出土遺物 (第10図、PL20・22)

すべて包含層から出土した遺物である。白磁(碗・皿)、龍泉窯系青磁(碗・盤)、初期の龍泉窯系・同安窯系青磁(碗)、同安窯系青磁(碗)、青白磁(合子)、土師質土器(碗)、瓦器(碗)、瓦質土器(火舎)、泥面子などがある。

白磁の碗 107 は底部の破片。重ね焼のため高台の 4 箇所を削り、見込にも同様の痕跡が残る。D 類(15 世紀代)。10 トレンチ出土。白磁の皿 108 は口縁が外反し、端部は口禿げ。IX 類(13 ～ 14 世紀前半)。8-2 トレンチ出土。

龍泉窯系青磁の碗 109・110 は、ともに口縁から体部にかけての破片である。I 類(13 ～ 14 世紀)。10 トレンチ出土。碗 111 は外面に浅い蓮弁がある。II 類(13 世紀前半)。碗 112 は口縁が外反し、端部が丸い。IV 類(14 世紀)。9 トレンチ出土。盤 113 は高台付近の破片、高台内面以外の全体に暗オリーブ色の釉をかける。今回の調査で出土した盤はこの 1 点のみである。9 トレンチ出土。



第10図 8～10 トレンチ出土遺物

初期の龍泉窯系・同安窯系青磁の碗 114 は口縁部の小破片。ごく薄い釉がかかり、内面のヘラ彫りが厚い。胎土や釉調は越州窯系の製品に類似する。0 類。優品で、県内では阿蘇郡南阿蘇村祇園遺跡などで例がある(注 2)。9 トレンチ出土。

同安窯系青磁の碗 115 は体部の小破片、内外面に櫛目文を施す。D 期(12 世紀中～後半)。9 トレンチ出土。

青白磁の合子蓋 116 は、型押しで上部に蓮と見られる草花文を施す。端部接地面から内面にかけては露胎である。9 トレンチ出土。

土師質土器の碗 117 は底部付近の破片で、全体に摩滅する。内面は二次的に火を受けている。8 トレンチ出土。瓦器碗 118 は底部の小破片、低い高台を貼り付け、内外面はほとんど黒化していない。8 トレンチ出土。瓦質土器の火舎 119 は口縁部の小破片、外面に突帯を二段設け、間にスタンプを押す。摩滅しているため、文様は判然としない。9 トレンチ出土。泥面子 120 は完形。半裁円筒形で、下半にしかめ顔(鬼面か)を表現する。彩色の痕跡はない。10 トレンチ出土。

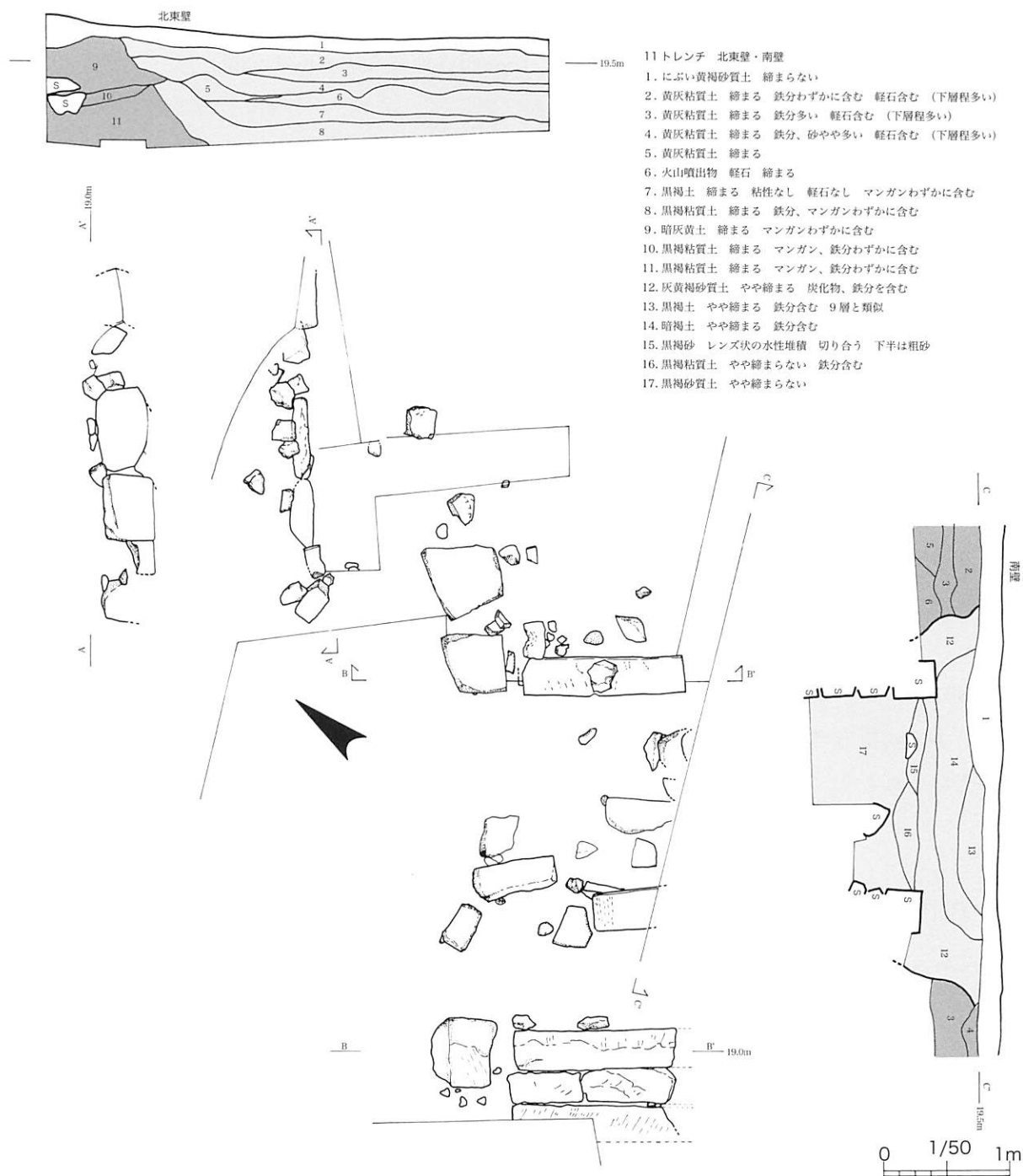
10. 11 トレンチ (第 11 図、PL6-1・6-3～6-5)

10 トレンチの南に位置する調査区。北東端で近世の用水路 SD-4 の一部を検出した。盛土による道路(砂利による簡易舗装)で掘削されないため保存が可能であったので、遺構は完掘していない。現地表面は 19.7～19.9m 付近にあり、西南端では 18.9～19.0m で締まった黄褐土の地山に至る。

SD-4 は表土直下の標高 19.5m 付近から掘り込まれ、南東壁にかかる部分で切り石組み、北西壁付近で列石を検出した。溝は上端幅 3.25m、石組み幅 1.58m。埋土は黒褐粘質土および黒褐砂質土で、底部近くは灰から暗灰色を呈する砂層となり、若干の湧水があった。

南東の石組みは一石が幅 35cm、長さ 130cm の直方体に加工され、確認できた面すべてにハツリを施し、4 段(高さ 1.1m)積み上げる。裏込めは検出していない。北西壁でも列状に構築された石材を検出したが、表面に加工は施されておらず、南東壁の石組みとはつながらない。両者の石組みが、一体的なものであったかは不明である。底部近くの砂層から、流れ込んだ古代の土器、近世から現代にかけての陶磁器・ガラス・銅銭(寛永通宝と一銭銅貨)・金属器・瓦・鑄造関連遺物などが出土した。

一帯には近世の農業用水路である寺島井手が所在したとされ、SD-4 はこれとの関連が考えられる。寺島井手は幕末の文久二(1862)年に完成、菊池川支流の岩野川で取水し、南に下って山鹿から古閑・中村に至る 300 町歩を潤したという(注 3)。大正年間の圃場整備によって埋められたものであろう。



第11図 11 トレンチ溝SD-4平・断面



写真17 11 トレンチ溝SD-4 (北から)



写真18 11 トレンチ溝SD-4 (東から)

11. 11 トレンチ出土遺物 (第12～14図、PL22)

福建省産磁器皿121は口縁端部のごく小片。内外面に染付文様(16世紀後半)。

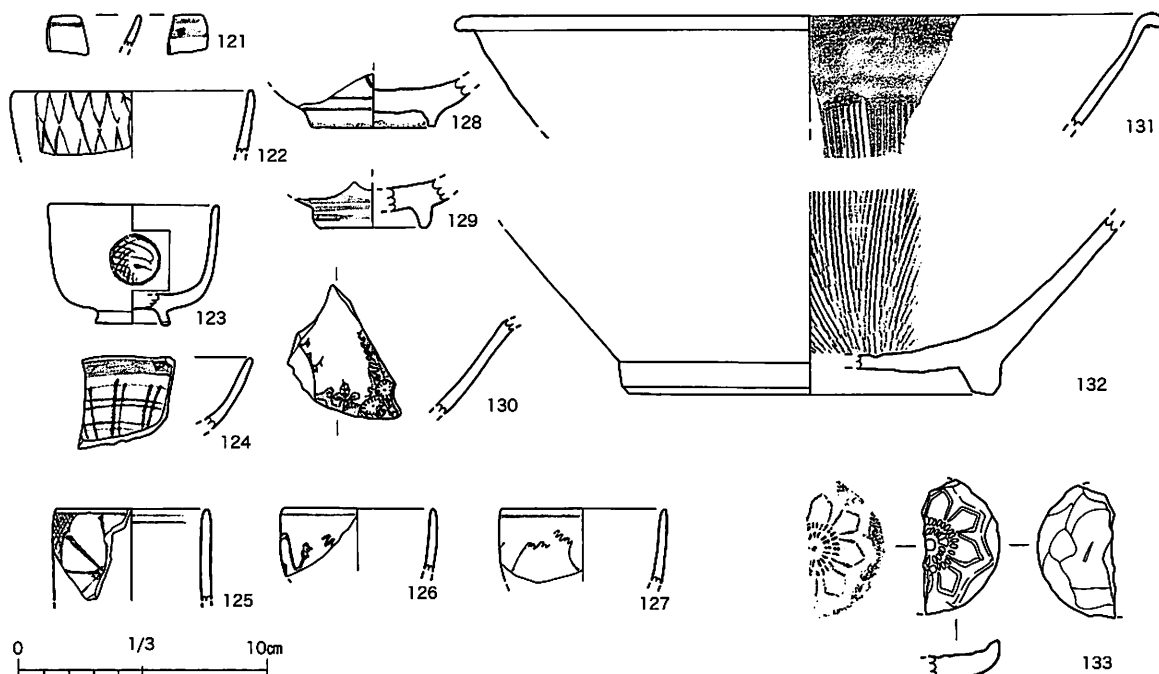
肥前系磁器には碗、鉢がある。碗122は外面に網目文。碗123は外面の二箇所にも円文が残り、本来は四箇所か。碗124は内面に格子文(1820～1860年代)。筒型碗125～127は内外面に染付文を施す(1870～1910年代)。碗128・129は底部の破片。いずれも高台外面に淡い二条の線を巡らせる(18世紀代)。130は鉢の体部か。内面に草花文の染付(17世紀後半～18世紀前半)。

福岡地方産の陶器すり鉢131は口縁付近の破片。端部を外反させ、内面の全体にすり目を施す(18世紀代)。底部の破片132も内面全体にすり目があり、鉄釉をかける。

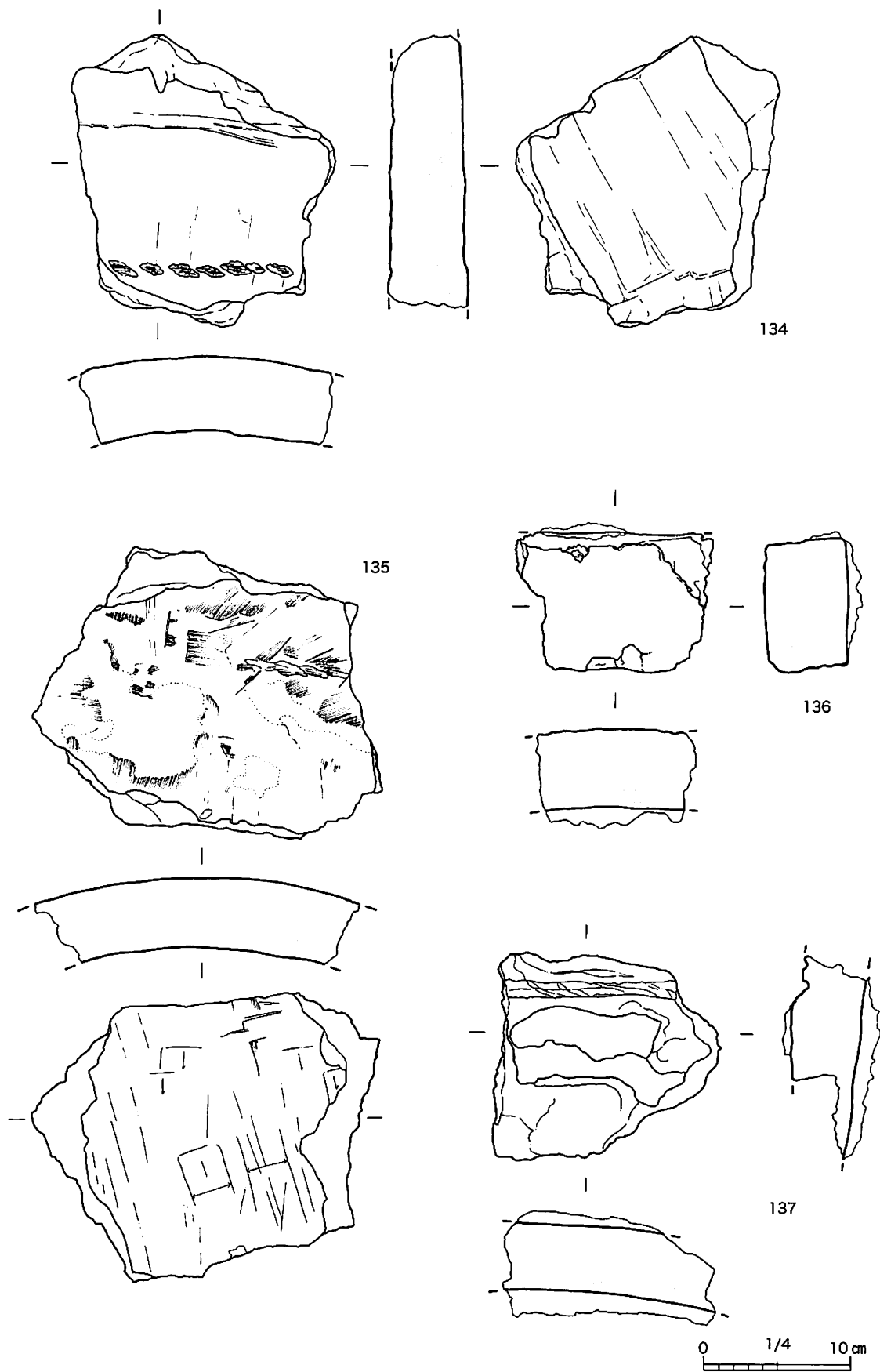
土製品133は、平面が円形とすれば、半分程度が残存していることになる。全体はレンズ状で、花型を押している。反対の面はヘラケズリで仕上げ、よく焼き締まる。何かの型か。

鑄造に関連すると思われる遺物134～140はすべて破片であるが、一部に本来の面を残すものがある。厚さは5センチ程度。全体に熱を受けており、内面に溶解した鉱物が付着しているものもある(136～139)。溶解炉の一部か(注3)。134・135は大型の破片。凸面に縄目状の痕跡があり、凸面はヘラ状工具による調整。溶解した鉱物は付着していない。137・139の凸面にも縄目状痕が見られる。136は破断面が平坦で、レンガ状を呈す。製作時の単位で破断したものか。図示していないが、このほかにスラグ状の鉱滓も若干出土している(写真のみ掲載、PL22-7・8)。

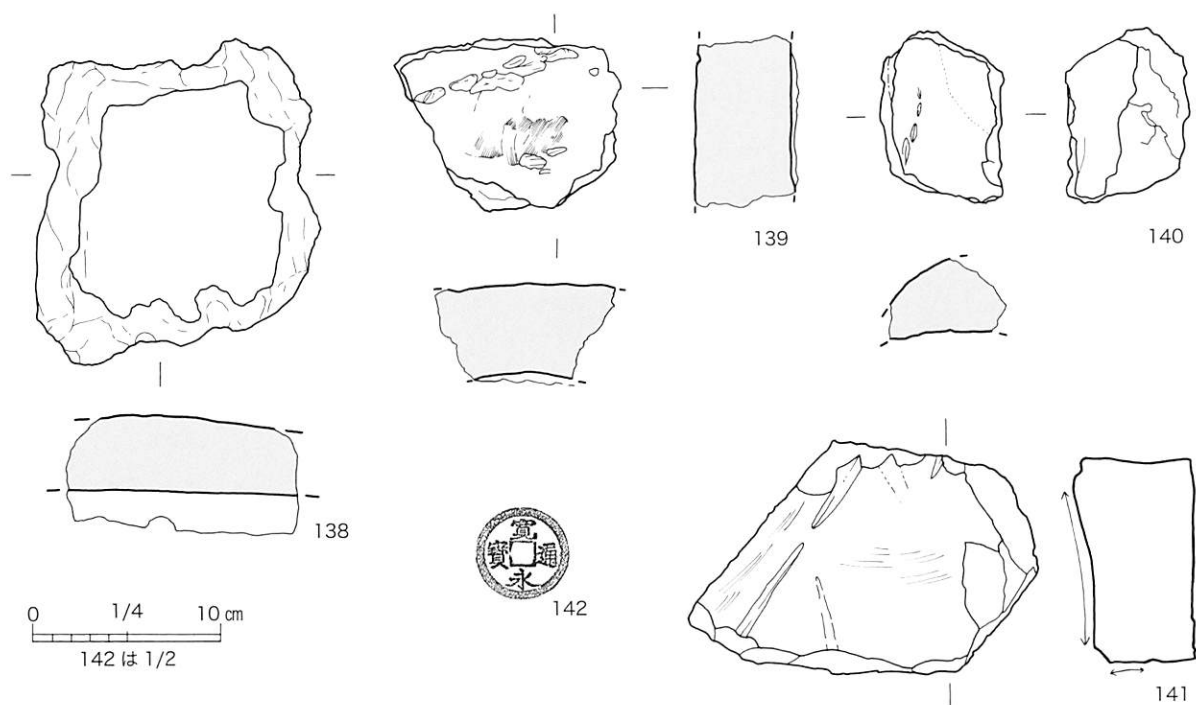
砥石141は直方体の一面にのみ使用痕がある。筋状の使用痕はごく浅い。砂岩。寛永通宝142は鑄上がりもよく、良好な状態で残存している。図示したものほかに、破片が1点ある。



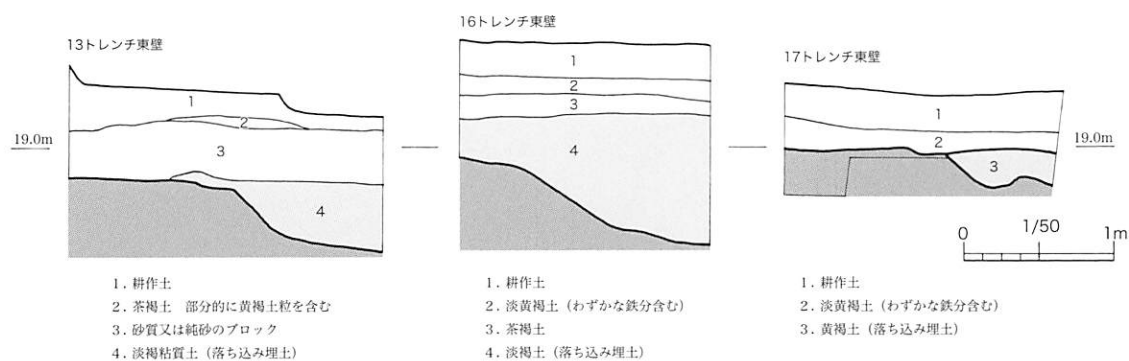
第12図 11 トレンチ出土遺物①(近世の陶磁器類)



第13図 11トレンチ出土遺物②（鑄造関連遺物）



第14図 11トレンチ出土遺物③（铸造関連遺物）



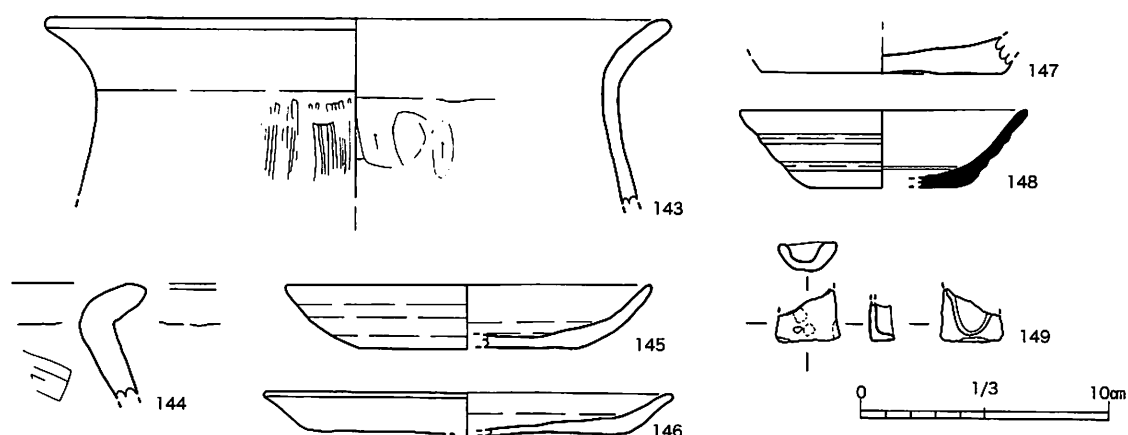
第15図 13・16・17トレンチ断面



写真19 15トレンチ（西から）



写真20 16トレンチ落ち込み（北から）



第16図 16・17トレンチ出土遺物

12. 12～17 トレンチ (第15図、PL7-1～7-5)

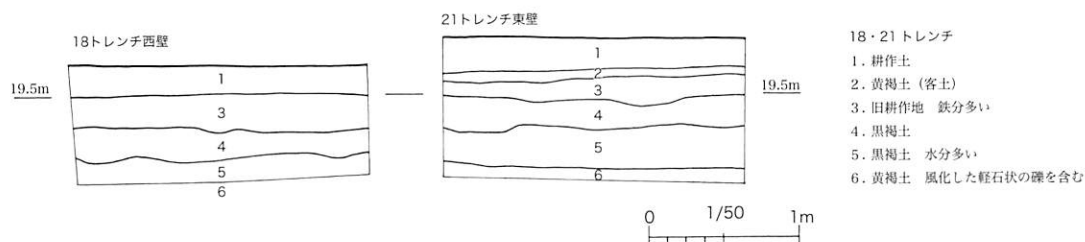
10 トレンチの東方向に位置する調査区で、既存用水路の南西に隣接して設定したため、調査区の幅が2m 前後と狭い。13・16・17 トレンチで南方向への落ち込みの端部を検出した。落ち込み埋土には碎石を含み、9 トレンチと同様に近代の整地によるものであろう。埋土から若干の遺物が出土した。

13. 16・17 トレンチ出土遺物 (第16図、PL22-6)

土師器の甕 143 は口縁部が緩やかに外反する。甕 144 は口縁の小片。端部は「くの字」状に折れ曲がる。16 トレンチ出土。土師器の杯 145 は浅く、外面にヘラ磨きを施す。17 トレンチ出土。土師器の皿 146 は全体に摩滅する。土師質土器の底部 147 は器形不明、時期も不明。底部は回転ナデ調整。16 トレンチ出土。須恵器の杯 148 は軟質の焼成。体部の立ち上がりはゆるやか。16 トレンチ出土。土製品 149 は10 トレンチで出土した泥面子(第10図120)と類似した胎土で、新しい時期のようである。中空であることから泥面子ではなく、近世以降のミニチュアか。16 トレンチ出土。

14. 18～21 トレンチ (第17図、PL7-6・7-7)

11 トレンチの西方向に位置する調査区で、菊池川の氾濫原にあたる。現地表面は標高19.7～19.9m 付近にあり、0.75～1.0m で軽石を含む黄褐土に至る。遺構は検出しなかった。平成15年度の県文化課による試掘調査では、現地表下0.8m で竪穴状遺構が確認されている(G-19)が、トレンチの位置がややずれているためか。遺物は検出中に近世陶磁器が数点出土したにとどまり、いずれも流れ込んだものと思われる。



第17図 18・21 トレンチ断面



写真21 18 トレンチ (東から)



写真22 20 トレンチ東壁 (北西から)

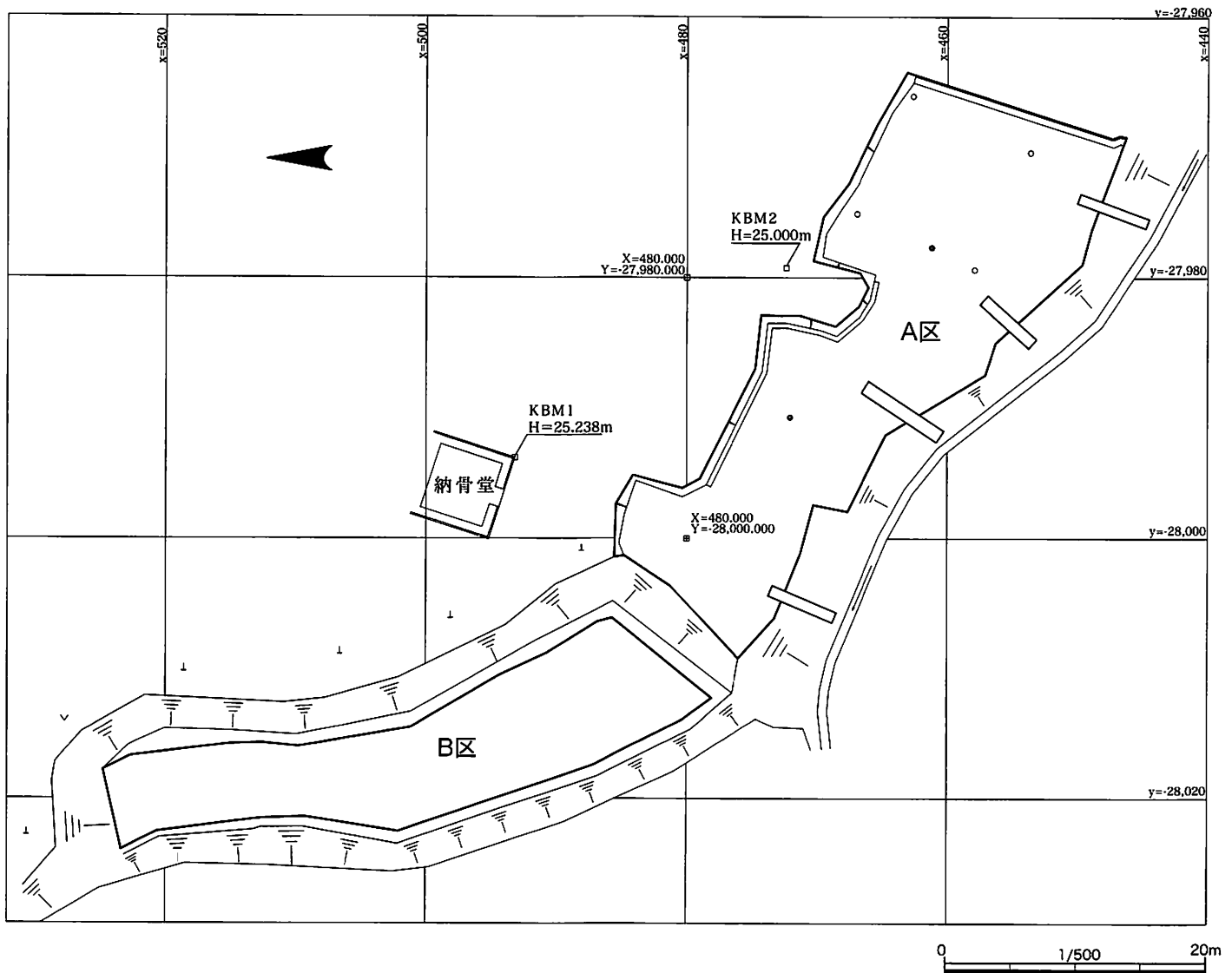
注

1. 『大宰府条坊跡 XV』 陶磁器分類編、太宰府市の文化財第 49 集、太宰府市教育委員会、2000。
2. 『祇園遺跡』 熊本県文化財調査報告第 188 集、熊本県教育委員会、2000。
3. 『小倉城二ノ丸家老屋敷跡 I』 北九州市文化財調査報告書第 110 集、北九州市教育委員会、2006:190 頁。
室町時代中～後期 (15・16 世紀) の鑄造関連遺構が検出され、井戸に転用された溶解炉が出土。中世小倉鑄物師との関連が指摘されている。溶解炉の構造が中世段階で完成し、以降大きく変化していないとすれば、今回出土した遺物も北九州市の事例のような円筒形溶解炉の一部と考えることができる。
4. 『山鹿市史』 下巻、1985:577 頁。

第4章 2次調査

1. 調査区の設定 (第18図、巻頭図版3-1、PL8-1)

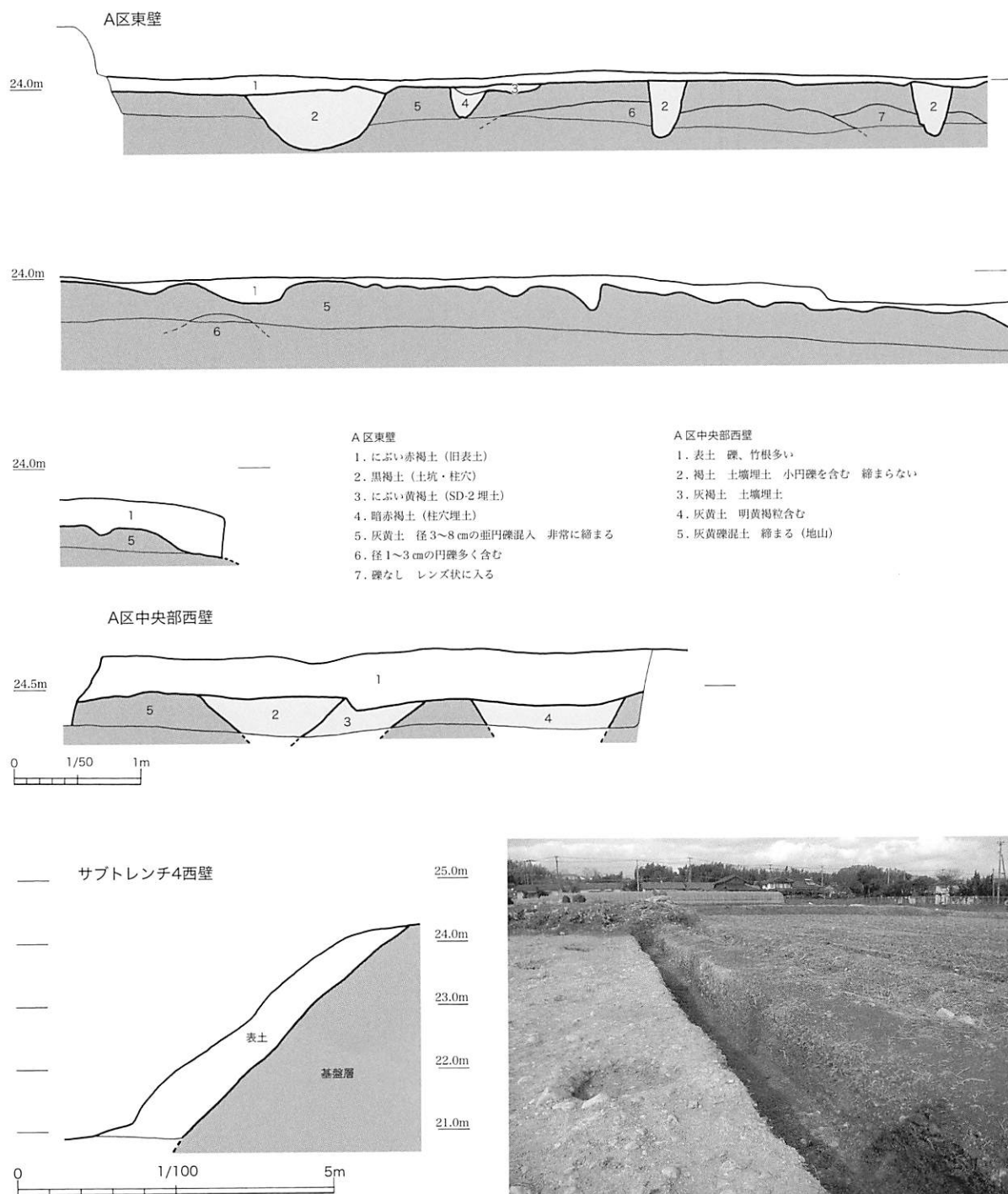
2次調査地は対象地の東端にあたり、遺跡の所在する段丘と菊池川が最も近接した部分にあたる。現在は堤防によって河道が固定されているため、直接水面を見ることはできないが、築堤以前は水がすぐそばまで来たであろうことは想像に難くない。調査は南北450m、東西11mの範囲で切土となる圃場整備部分(圃場整備区11-7:段丘平坦面端部)の南側にA区、北側にB区を設定した。南側の斜面はサブトレンチによって段丘の傾斜角度を確認した。A区中央で倒壊していた近代墓(大正14年築造)は、調査の対象外とした。これは周辺に残る江戸時代後～末期の墓を集めた「寄せ墓」である。地元の方によれば、かつて一帯にはこのような「寄せ墓」が複数あり、集めて調査区北側の納骨堂(昭和41年建築)に収めたという。



第18図 2次調査の調査区

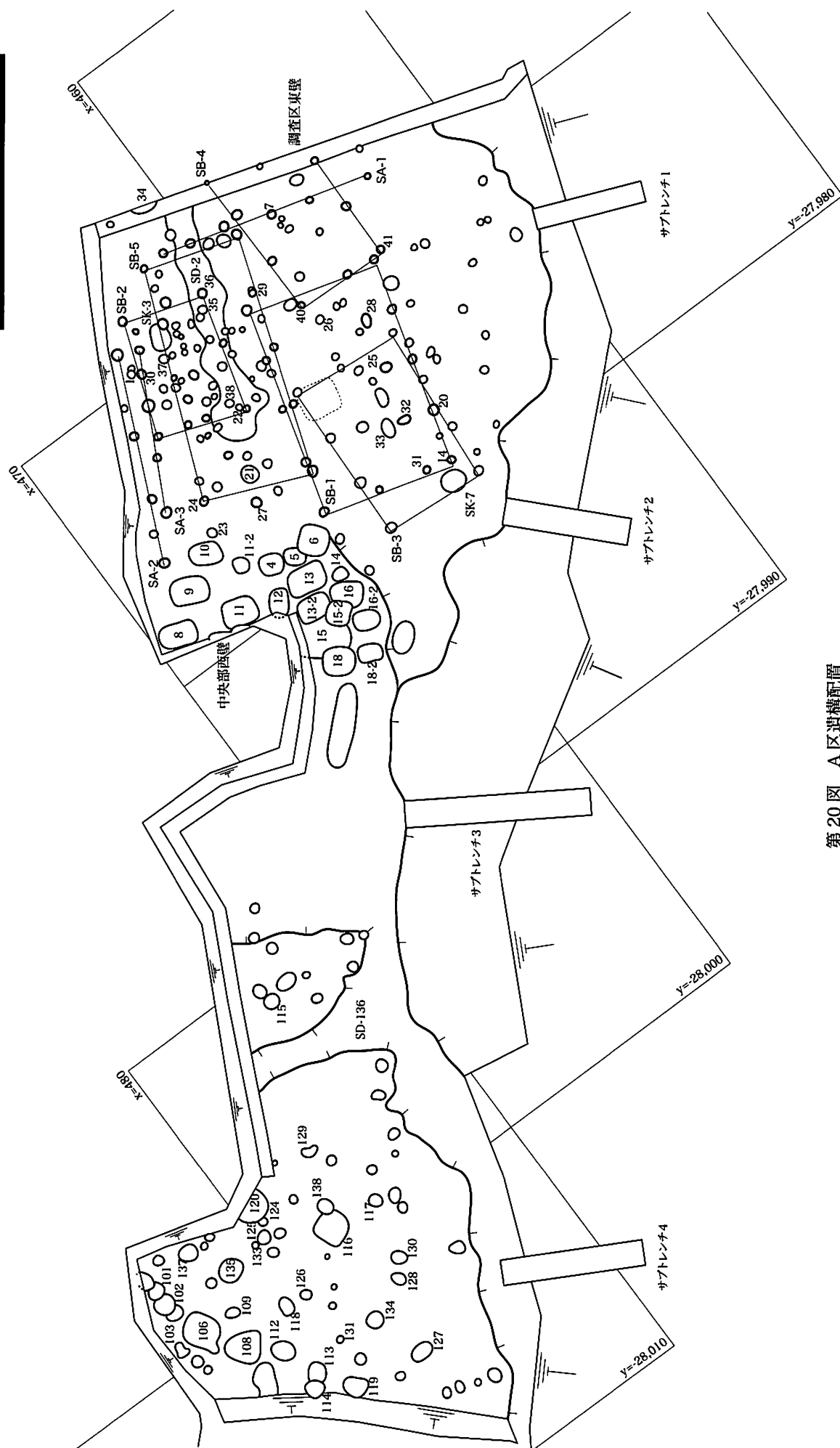
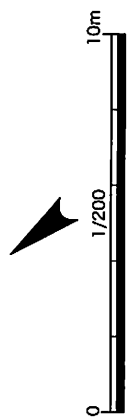
2. A 区の層序 (第 19 図、PL10-1・10-2)

旧耕作面の標高は約 24.5m、段丘下位の水田部分では約 20.5m である。厚さ 0.4～0.6m の表土を除去すると検出面に達した。北半部では厚さ 15cm の包含層(締めりのない淡灰茶粘質土)の下位が検出面である。検出面は明黄灰粘質土を基調とする。南半で部分的に円礫(直径 1～



第 19 図 A 区土層断面

写真 23 A 区東壁 (南西から)



第20図 A区遺構配置

5cm 程度)を多く含む箇所があり、北半の検出面は砂質土であった。検出面の標高は調査区北端で 24.0m 付近、菊池川に近い南端では 23.6m 付近である。

段丘の傾斜角度を確認するため、南側斜面の 4 箇所にサブトレンチを設定した。最も北に位置するサブトレンチ 4 では、標高 21.0m 付近まで地山の基盤層を確認することができた。3.6m の距離で約 3.2m 低くなっており、他のトレンチでも同じ程度の傾斜であった。これらのトレンチで地山とした基盤層中には遺構面を検出せず、旧石器時代の遺物等は出土しなかった。

3. A 区の遺構と遺物 (第 20 図、PL8-2 ～ PL9)

A 区では調査区の東西両端付近で古代の柱穴と土坑、近世の掘立柱建物、柵(一本柱列)、溝、土坑、柱穴などの遺構を検出した。遺構は偏在しており、古代の柱穴や土坑は調査区北西部に、近世の遺構は南東部に集まる。南東部の多数の柱穴は規模や埋土の様相が類似しているため、すべて近世の所産と考えるが、このうち一部を建物・柵として復元するにとどまった。柵 SA-2 など調査区の端部に位置する遺構は、調査区外まで広がる可能性がある。

調査区中央には、調査対象から除外した近代墓を取り巻くようにして、方形の土坑が集中する。一部の土坑は切り合っている。これらの土坑の北側から溝 SD-136・柱穴 155 付近までは遺構がほとんど分布しない。やや低くなっているため、削平されたのであろう。

遺構からは古代の土器(須恵器と土師器)、中世の土器類、近世の陶磁器類などが出土した。

4. 古代の遺構と遺物

(1) 遺構 (第 21・22 図、表 4、PL11・12)

①土坑 SK-101・102

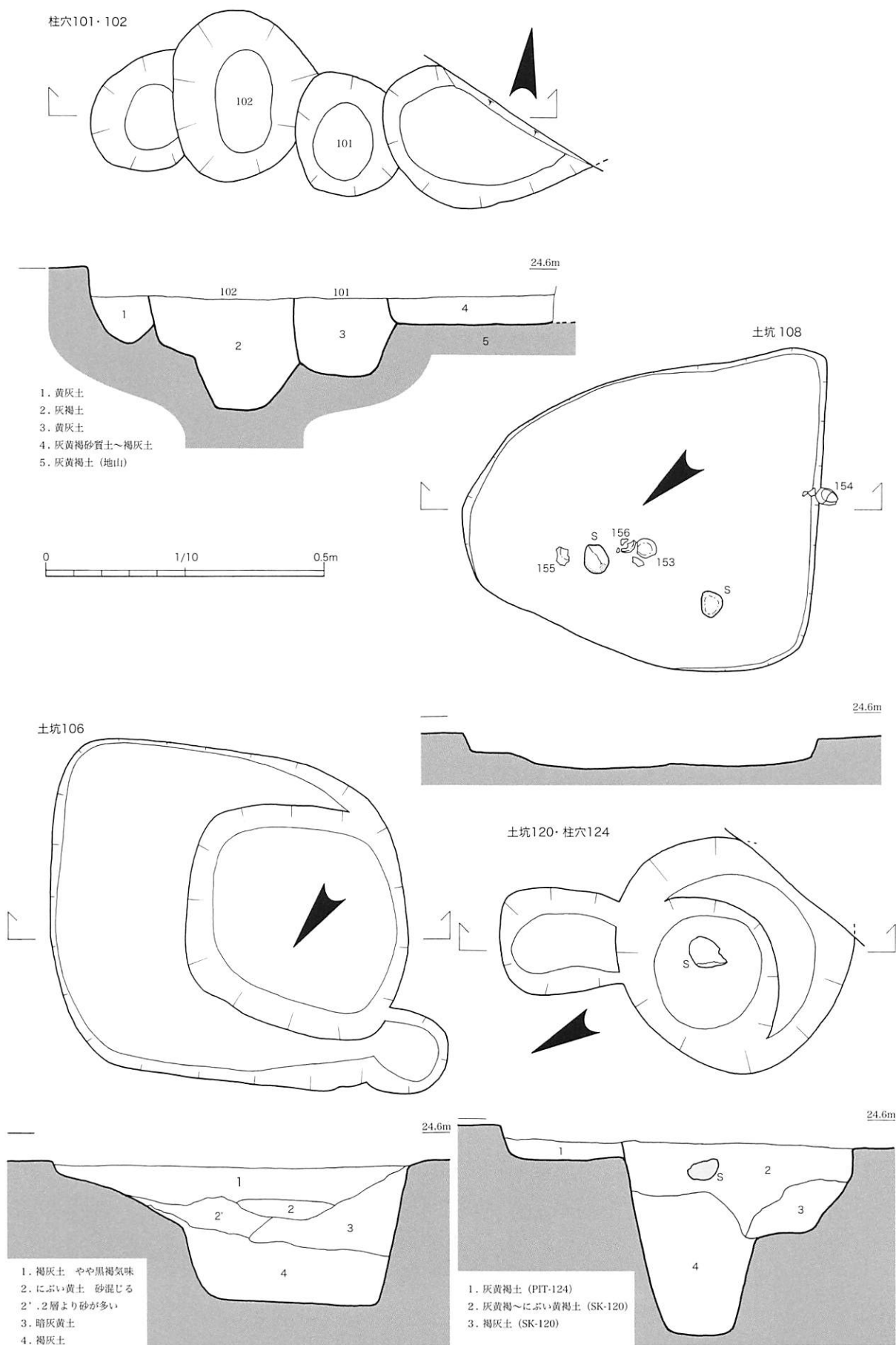
東西に連なって検出した 4 個の土坑の一部。前後関係を平面・断面で検討したが、わずかな切り合いのため、確定的ではない。SK-102 は、西側の SK-101 に掘り込まれるようである。直径は南北 0.42m、深さ 0.28m。SK-102 の直径は南北 0.6m で、SK-101 より大きく、深さ 0.38m。SK-101 から土師器の杯(第 23 図 150・151)が出土した。SK-102 から土師器が出土したが、図示できない小片である。他の土坑から遺物は出土しなかった。

②土坑 SK-106

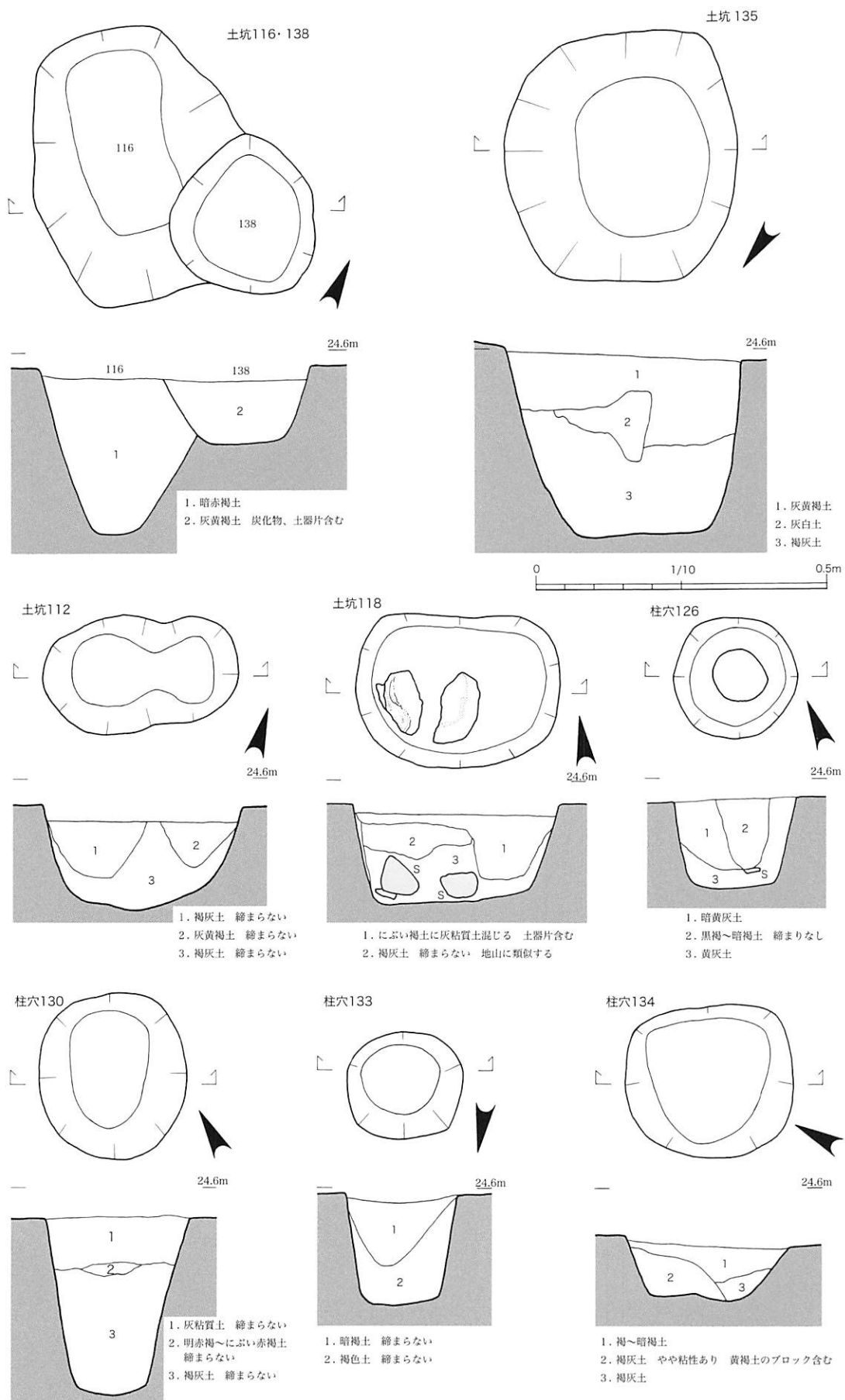
A 区北端近く、土坑 SK-108 の東に位置する土坑。平面形は隅丸の長方形で、直径は東西 1.28m、南北 1.18m。深さ 0.54m。埋土は上下に分けることができ、上層に地山起源のブロックを多く含む。下層は粘質土。下層から土師器の杯(第 29 図 152)などが少量出土した。

③土坑 SK-108

A 区北端近く、土坑 SK-106 の西に位置する土坑。平面はゆがんだ三角形で南北 1.37m、東西 1.23m。深さは 0.12m と浅く、北側ではほとんど残存していない。底面は起伏があり、平坦ではない。散在して土師器片(第 29 図 153～156)、スラグ 1 点、石材 2 点(うち 1 点は火を受ける)が出土した。埋土にはわずかに炭化物が含まれていた。土坑墓か。



第 21 図 古代の柱穴と土坑①



第22図 古代の柱穴と土坑②

④土坑 SK-113・114

A 区北端近く、南北で接する土坑。SK-113 の埋土(茶褐土)から土師器の杯(第 29 図 161)など、摩滅した小片が少量出土した。SK-114 からは近代の染付陶器片が出土した。

⑤土坑 SK-115

溝 SD-136 の東側に位置する土坑。埋土から土師器の杯(第 29 図 157)、甕(第 29 図 158・159)などが少量出土した。

⑥土坑 SK-116・138

A 区北端近くに位置する土坑。SK-116 が東の SK-138 を掘り込む。SK-116 の平面は隅丸の長方形。直径は南北 0.94m、東西 1m。深さは 0.62m と、やや深い。土坑 SK-138 は直径 0.5m、深さ 0.22m。埋土に炭化物と土器小片をごく少量含む。ともに土器は小片のみで、図示できない。

⑦土坑 SK-118

A 区北端近く、SK-108 の南に位置する土坑。平面は隅丸の長方形、直径は東西 0.7m、南北 0.52m。深さ 0.3m。埋土全体から土師器の杯(第 29 図 162)など少量の遺物が出土した。いずれも摩滅している。底部からわずかに浮いた位置で石材が 2 個出土し、東側の石材は若干熱を受けている。

⑧土坑 SK-120

A 区北東端に位置する土坑で、北側の柱穴 124 を掘り込む。南は調査区外へ続く。平面はほぼ円形、直径は南北 0.8m 以上、東西 0.9m。深さ 0.3m で平らになり、柱穴状の掘り込み 0.7m がある。須恵器の杯(第 29 図 163)が出土した。SK-120 に掘り込まれる柱穴 124 は、深さ 0.08m とごく浅い。

⑨土坑 SK-128

A 区北西端に位置する土坑で、埋土から土師器の杯(第 29 図 165)など、少量の遺物が出土した。

⑩柱穴 126

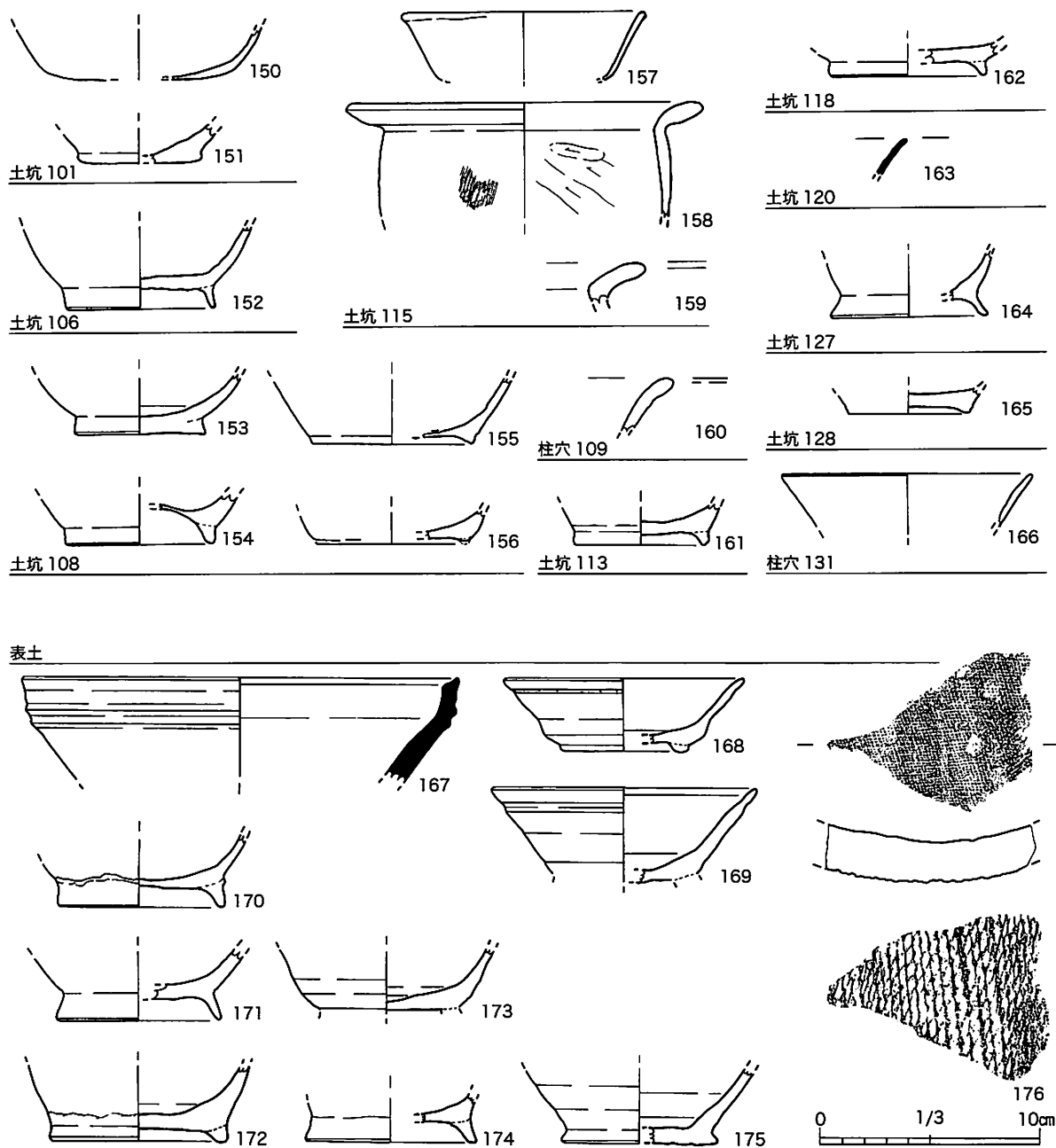
平面はほぼ円形、直径は東西 0.42m、南北 0.4m。深さ 0.3m。直径 0.18m の柱痕がある。柱痕底部(柱穴の底部からわずかに浮いた位置)で石材が出土したが、ごく小さく、礎石ではない。A 区で検出した柱穴のうち、柱痕を確認できたのはこの柱穴のみである。

(2) 遺物 (第 23 図、PL23)

古代の遺物には西半部の土坑・柱穴から出土した土師器(杯・甕)などがある。土師器は全体に軟質な焼成のため摩滅が著しく、調整は判然としない。須恵器はごくわずかである。

杯 150 は底部付近の破片。全体に摩滅する。杯 151 は底部付近の破片。雑な平底で、内外面ともに摩滅する。SK-101 出土。杯 152 は体部下半から底部の破片。貼り付け高台はわずかに外に開く。全体に摩滅する。SK-106 出土。杯 153～156 は体部体部下半から底部の破片。155 の貼り付け高台は断面三角形、摩滅している。153 の底部は円板貼り付けか。以上 SK-108 出土。

杯 157 は口縁から体部にかけての破片。口縁端部はやや厚くなる。全体に摩滅している。甕 158 は口縁から体部上半の破片。口縁端部は外側に開き、やや厚い。甕 159 は口縁部の小破片。



第 23 図 古代の遺物

内外面にわずかに赤彩が残る。以上 SK-115 出土。

土師器甕 160 は口縁部の小片、全体に摩滅する。柱穴 109 出土。杯 161 は貼り付け高台、底部内面が黒変しており、ススの付着か。SK-113 出土。杯 162 は底部付近の破片、貼り付け高台は外側に開く。SK-118 出土。須恵器の杯 163 は口縁端部の破片、ごく薄手。SK-120 出土。

杯 164 は底部付近の破片、貼り付け高台は外側に開く。全体に摩滅している。SK-127 出土。杯 165 は底部の小片。摩滅しているが、高台は貼り付けか。SK-128 出土。碗 166 は口縁付近の

破片、端部は直線的に広がる。全体に摩滅している。柱穴 131 出土。

以下は表土から出土した古代の遺物である。須恵器鉢、土師器杯、平瓦がある。須恵器の鉢 167 は体部がわずかに外反しながら広がり、口縁端部は垂直に立ち上がる。端部内面は内傾する面をつくる。土師器の杯 168 ～ 175 はいずれも破片。体部は直線的に開き、口縁端部は丸い。貼り付け高台 170 ～ 174 と、円盤状底部 175 がある。170 の外面の一部に、赤彩がわずかに残る。平瓦 176 は凹面にやや細かい単位の布目が、凸面に縄目タタキが残る。

5. 近世の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物（第 24 ～ 26 図、巻頭図版 3-1、PL8 ～ 9）

5 棟を復元した。いずれの建物も、柱穴の深さや底面レベル、柱間隔や柱筋はそれほど揃っていない。建物 SB-1 の柱穴から、17 世紀後半の遺物が出土した。

①建物 SB-1

A 区の南東に位置する掘立柱建物。北側 1.2m に建物 SB-2 が、東側 3.0m に柵 SA-1 がある。東西 4 間 (7.8m)、南北 2 間 (4.0m)、南側に 1 間 (1.0m) の庇がつく。桁行方向は N74° W で、南側の建物 SB-2、南側の柵 SA-1 と類似する。

庇の南西隅の柱穴 14 上面から内野山窯と見られる陶器碗 (17 世紀後半～18 世紀前半、第 29 図 187) が、その東隣の柱穴 20 から磁器皿 (17 世紀前半、第 32 図 194) と肥前系磁器碗 (17 世紀後半、第 32 図 195) が出土した。

柱穴 20 は平面楕円形、直径は東西 0.25m、南北 0.34m。深さ 0.48m。上面で磁器皿 194 と石材が 2 個、中位で石材が 1 個と、この下から磁器碗 195 が出土した。

南筋中央の柱穴 25 は平面ほぼ円形、直径は東西 0.3m、南北 0.4m。深さ 0.48m。埋土の中位で石材が 1 個出土した。石材の下から 17 世紀前半の肥前系白磁小杯 (第 32 図 193) が出土した。

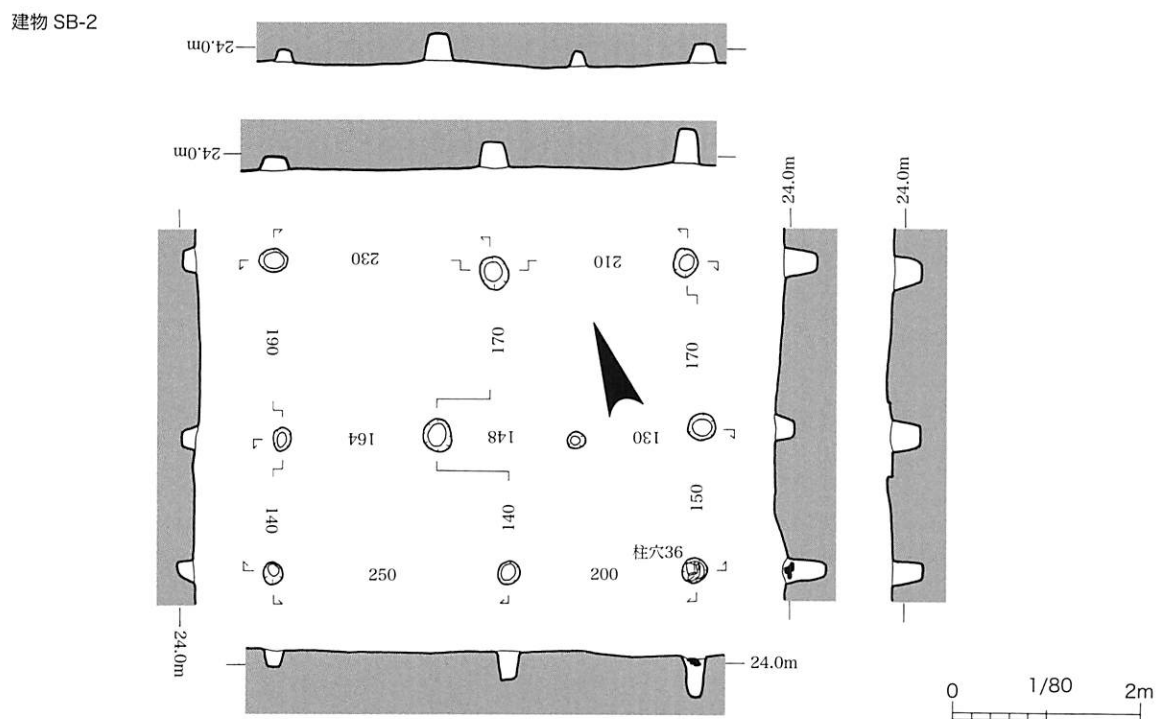
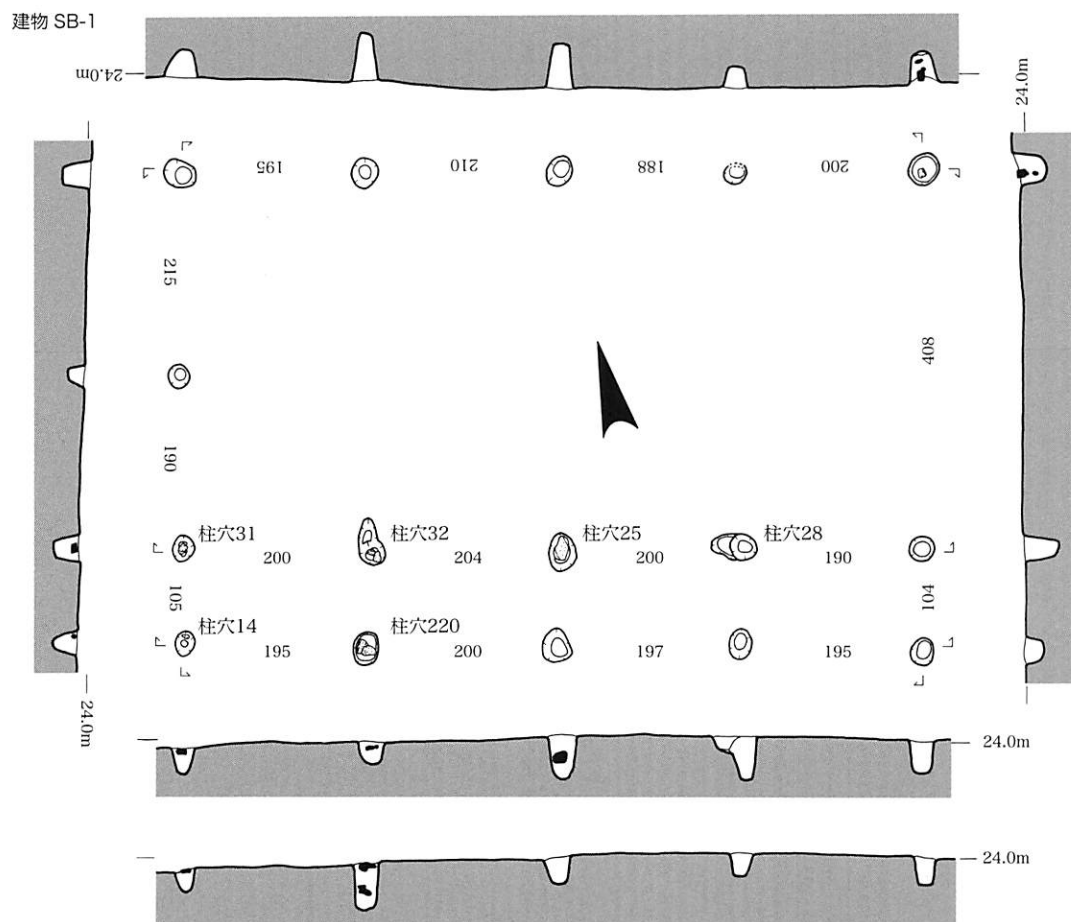
陶器の碗 (第 29 図 187) は柱穴 14 上部から出土。体部外面に重ね焼による他器口縁部の癒着があり、釉がはがれている。内野山窯か (17 世紀後半～18 世紀前半)。実測図は 41 頁に掲載。

②建物 SB-2

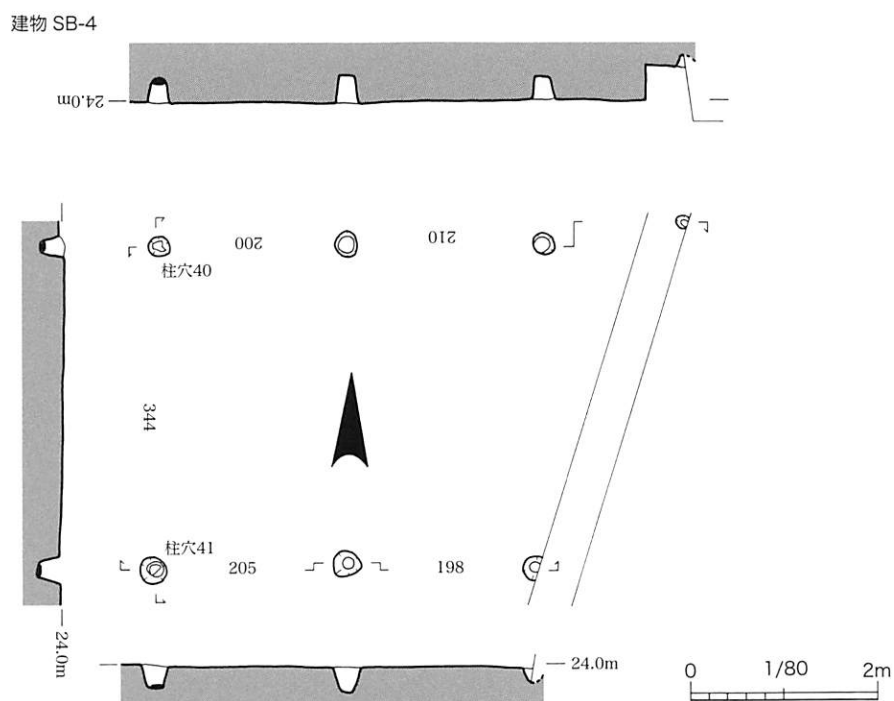
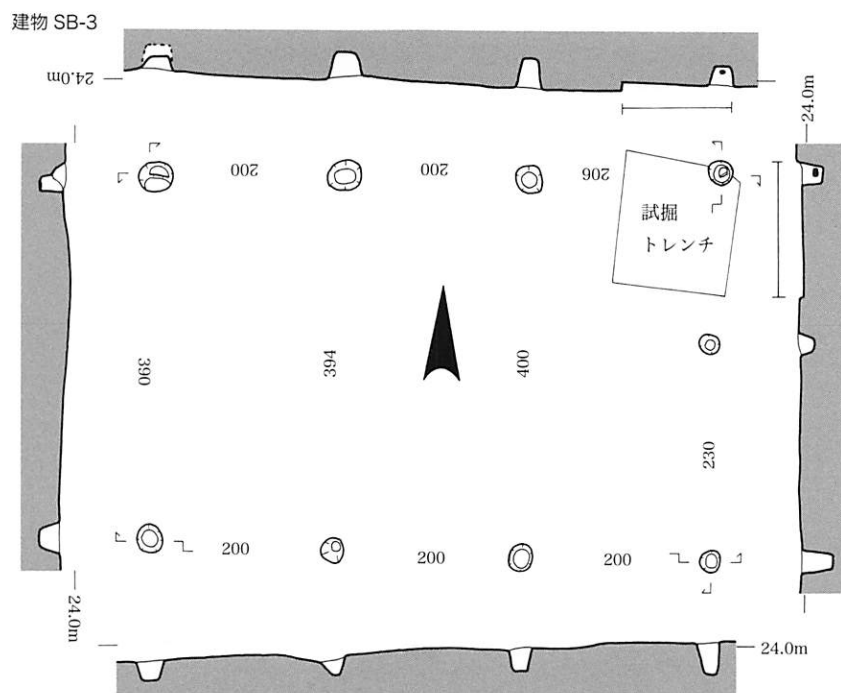
A 区の南東、建物 SB-1 の北に隣接する掘立柱建物。東西 2 間 (4.5m)、南北 2 間 (3.3m)、中央の桁行のみ 3 間ある。今回検出した建物のうち、最も規模が小さい。桁行方向は N70° W、北側の建物 SB-1、南側の柵 SA-1 と類似する。遺物は出土しなかった。

③建物 SB-3

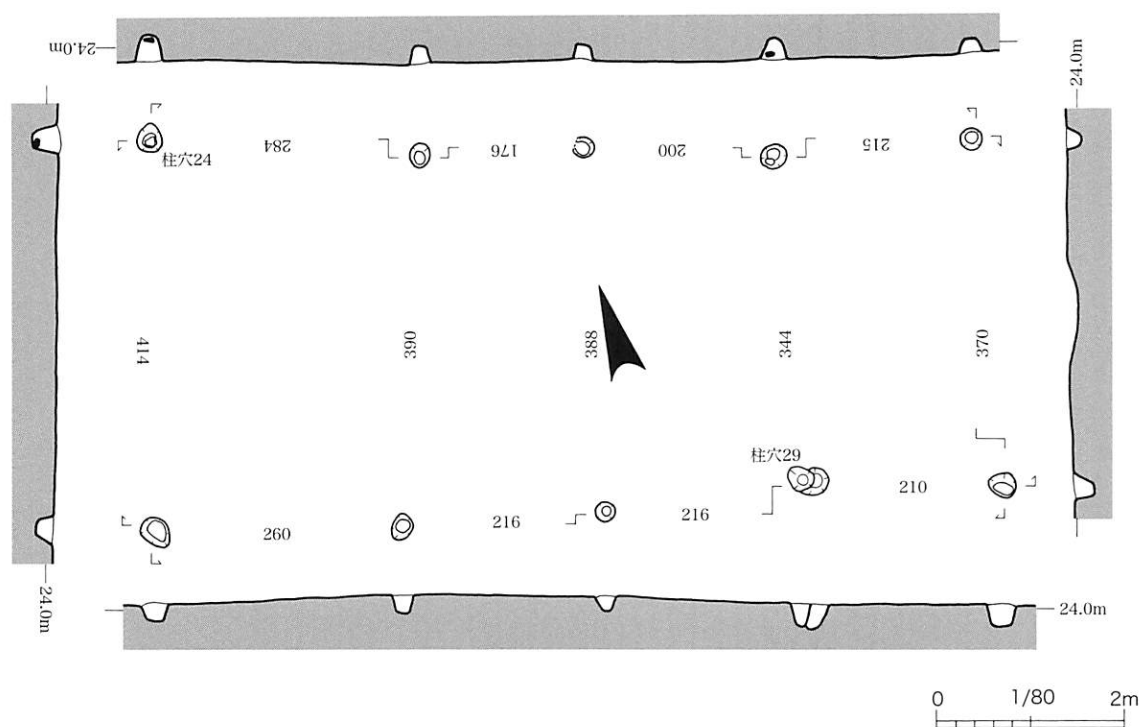
A 区の南東、建物 SB-1 とほぼ重複する位置にある掘立柱建物。東西 3 間 (5.8m)、南北 2 間 (3.9m)。桁行方向は N86° W、建物 SB-4 と類似する。遺物は出土しなかった。



第 24 図 近世の掘立柱建物① SB-1・2 数字は柱間距離 (cm)



第 25 図 近世の掘立柱建物② SB-3・4 数字は柱間距離 (cm)



第 26 図 近世の掘立柱建物③ SB-5 数字は柱間距離 (cm)

④建物 SB-4

A 区の南東端、建物 SB-3 の南 2.7m の位置にある掘立柱建物。東端は調査区外へと続き、全体は検出していない。東西 3 間 (4.0m) 以上、南北 1 間 (3.3m)。北西端の柱穴は調査区のサブトレンチ内にあり、やや深い。あるいは東西 2 間、南北 1 間の建物か。桁行方向は N89° W、建物 SB-3 と類似する。遺物は出土しなかった。

⑤建物 SB-5

A 区の南東、建物 SB-1 と一部が重複する掘立柱建物。梁行の間隔が広く、平行する柵の可能性も検討したが、南北の柱穴位置が対応していることから、建物とした。東西 4 間 (8.8m)、南北 1 間 (3.7m)。桁行方向は N66° W、柵 SA-3 と類似する。遺物は出土しなかった。一部の柱穴が、16～17 世紀の土器が出土した土坑 SK-3 を掘り込んでおり、これより新しい。

(2) 柵 (第27図)

3条を復元した。いずれの柵も、構成する柱穴の間隔や柱筋がやや不ぞろいである。

①柵 SA-1

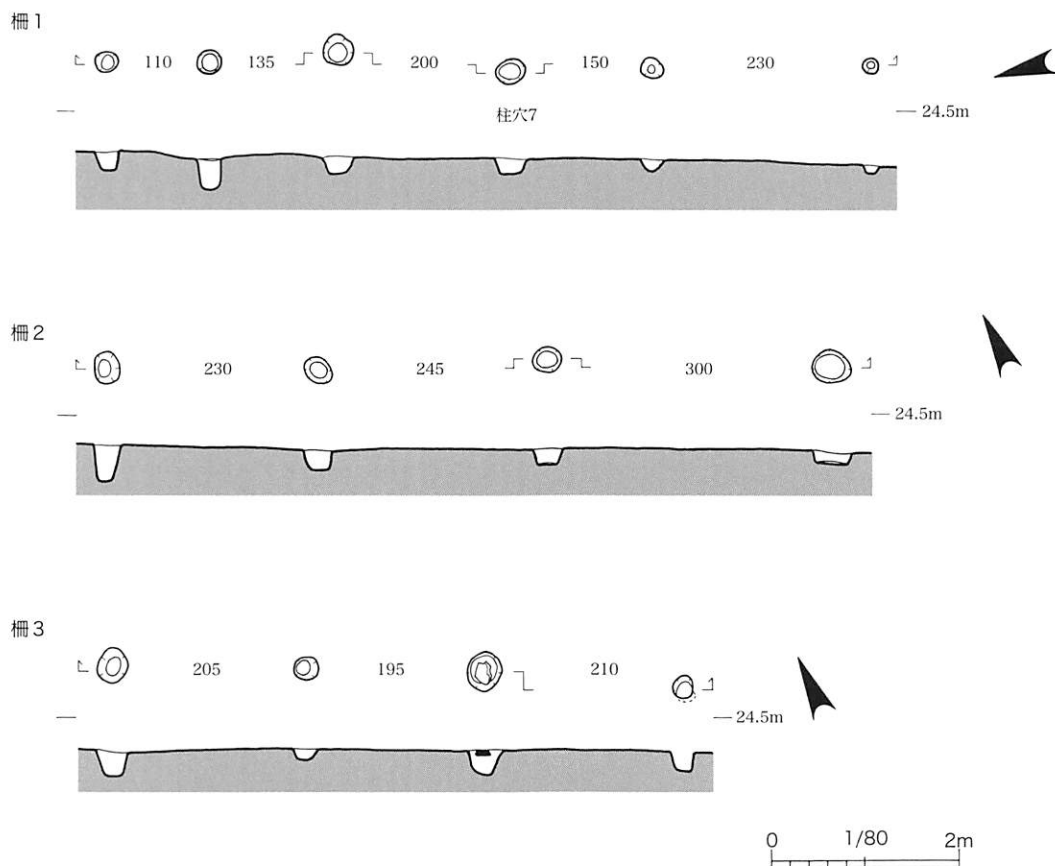
A区の南東、建物SB-1の東に隣接する柵。5間(8.1m)、方向はN15°E、建物SB-1の棟行方向と類似する。中央付近の柱穴7から、肥前の内野山窯産陶器皿(17世紀末～18世紀前半、第32図192)と摩滅した土師質土器(小片のため図化できず)が出土した。

②柵 SA-2

A区の南東、建物SB-5の北側に位置する柵。3間(7.75m)、方向はN65°Wで、建物SB-5・柵SA-3と類似する。遺物は出土しなかった。

③柵 SA-3

A区の南東、建物SB-5の北側に位置する柵。3間(6.1m)、方向はN62°Wで、建物SB-5に近い。遺物は出土しなかった。



第27図 近世の柵 SA-1・2・3 数字は柱間距離 (cm)

(3) 溝 (第 28 図、PL14)

①溝 SD-2

A 区東端に位置する、東西方向の素掘り溝。東側は調査区外へ延び、西端は次第に浅くなって終わる。建物 SB-2 の南東隅の柱穴 36 や南西隅の柱穴などの上に埋土があり、これ以降の堆積である。幅 1.35m、深さ 0.08m、長さ 8.6m を検出した。ごく浅いため、掘削中に出土した磁器 (第 28 図 177) がこの溝に帰属するか、確実ではない。肥前系磁器の碗 177 は口縁部の破片、内外面に透明釉をかける (17 世紀後半～18 世紀前半)。

②溝 SD-136

A 区中央付近に位置する、南北方向の素掘り溝。幅 1.2m、深さ 0.24m、長さ 7.0m を検出した。断面は皿型。北端は調査区外へ、南端は調査区の南斜面へ続く。埋土は締まりのない暗茶褐土で、表土に類似する。遺物は出土しなかったが、埋土の様相から新しいものであろう。

(4) 土坑 (第 28・29 図、巻頭図版 4-2、PL15・16)

①土坑 SK-3

A 区南東に位置する土坑。平面はややゆがんだ楕円形で、南北 0.7m、東西 1.02m、深さ 0.3～0.42m。底部は平坦ではなく、一部が深い。埋土は茶褐粘質土。建物 SB-2 内に位置するが、建物と有機的な関係があるかは不明である。南西端の一部を建物 SB-5 の柱穴に掘り込まれており、これより古い。埋土から 16～17 世紀の陶磁器、土器などが出土した。

景德鎮窯磁器の碗 178 は口縁部の破片、内面は口縁部近くに二条の線を巡らせ、その間に草花文。外面は同様の文様の下位に、魚文の尾部のみが残る (16 世紀後半)。肥前系磁器の碗 179 は底部の破片。高台は畳付の砂目地を研磨し、外面に二条の線を巡らせる。体部下半にも草花文染付の一部が残る (17 世紀後半)。

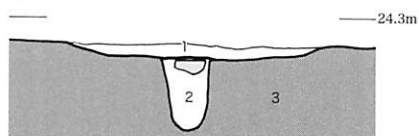
唐津系陶器のすり鉢 180 は体部上半の破片、残存部の内面全体にすり目を刻む (17 世紀後半)。すり目の単位は 11 本以上。常滑の甕 181 は体部上半の破片、断面に輪積み痕が一部観察できる (13～14 世紀代)。肥前系陶器の甕 182 は体部の破片、内外面に格子タタキが残る (17 世紀第 2 四半期以降)。

瓦質土器のすり鉢 183 は口縁部の破片。端部は外傾する面をつくり、内面に三本以上のすり目を刻む。瓦質土器の火舎 184 は口縁付近と底部の破片が多く、相互で接合しなかったが、図上で復元した。平坦な底部に脚はなく、体部は直線的に広がる。全体に摩滅しており、調整は不明。

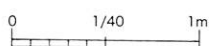
②土坑 SK-7

A 区南東、建物 SB-1 の南西に隣接する。建物 SB-1 南西隅の柱穴 14 との距離は、端部間で 0.3m とかなり近い。平面は楕円形で、南北 0.9m、東西 0.65m。なだらかに掘り込まれ、底面はほぼ平坦で深さ 0.3m。やや締まりのある暗茶粘質土に、円礫と軟質の凝灰岩を積み上げている。埋土に炭化物や焼土は含まれていい。石材に加工痕は見られない。中央付近に樹木があり、根などで一部の石材が割れていた。埋土の上部から、17 世紀の肥前系陶器と鉄器が出土した。

溝 SD-2



溝 SD-136

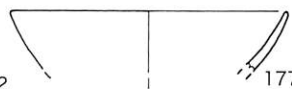


SD-2

1. にぶい黄褐土 径3~5cmの円礫含む 締まらない (SD2埋土)
2. 褐土 やや粘性あり (SD2に切られる柱穴埋土)
3. にぶい黄橙土 径3~10cmの円礫非常に多い やや締まる (地山)

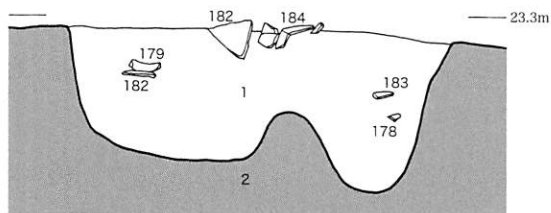
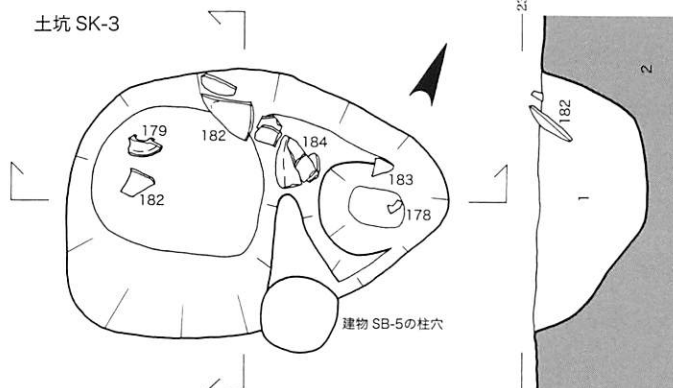
SD-136

1. 暗茶褐土 締まらない



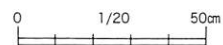
溝 2

土坑 SK-3

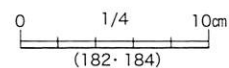
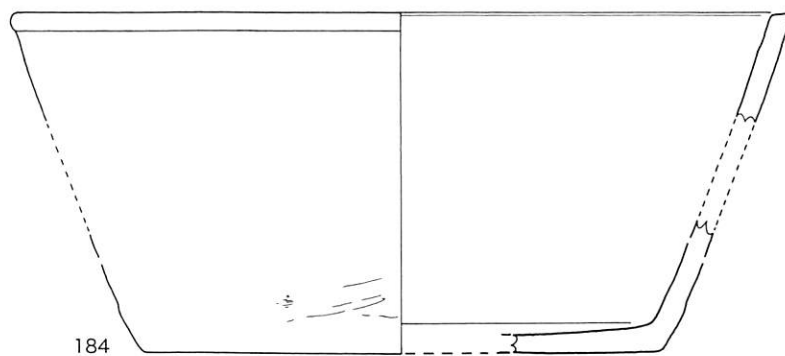
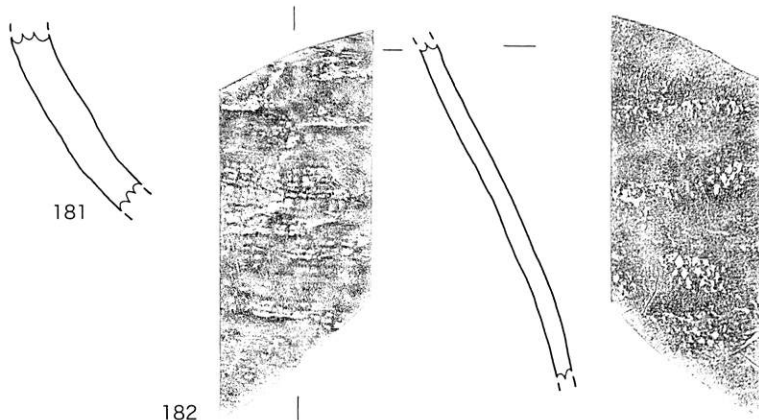
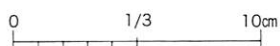
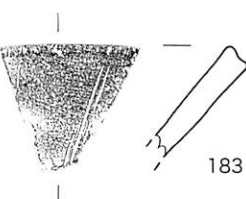
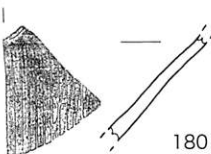
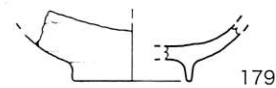
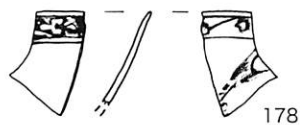


SK-3

1. 茶褐粘質土 径3~5cmの円礫をわずかに含む
2. 地山 明黄褐粘質土 径3~10cmの円礫多く含む 締まる



土坑 SK-3



第28図 近世の溝と土坑

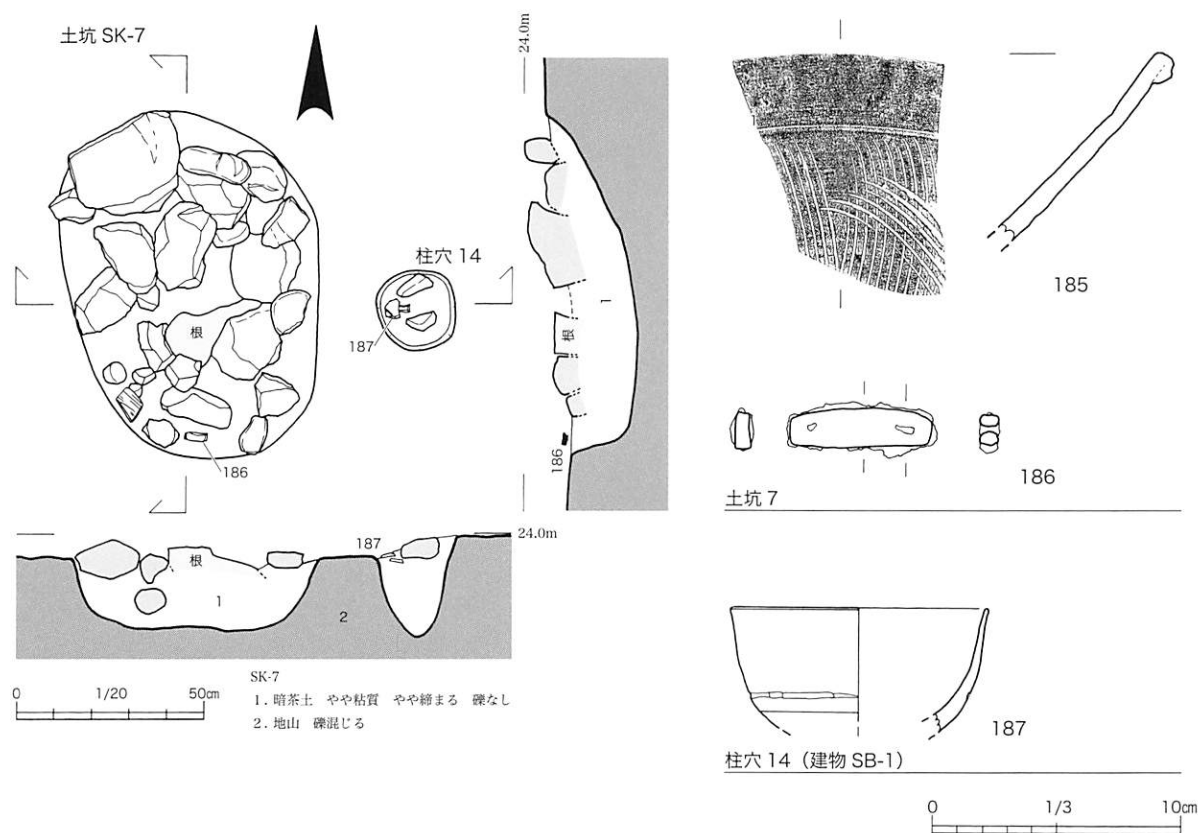
肥前系陶器のすり鉢 **185** は口縁から体部上半の破片。口縁端部は外側に折りまげて成形し、内外面に鉄釉をかける。内面に 11 本以上を単位とするすり目を刻む (17 世紀代)。鉄器 **186** は用途不明、現状は長方形で長さ 5.8cm、幅 1.6cm、厚さ 0.7cm。両端近くに穴がある。

③土坑群 (第 30 図、PL13)

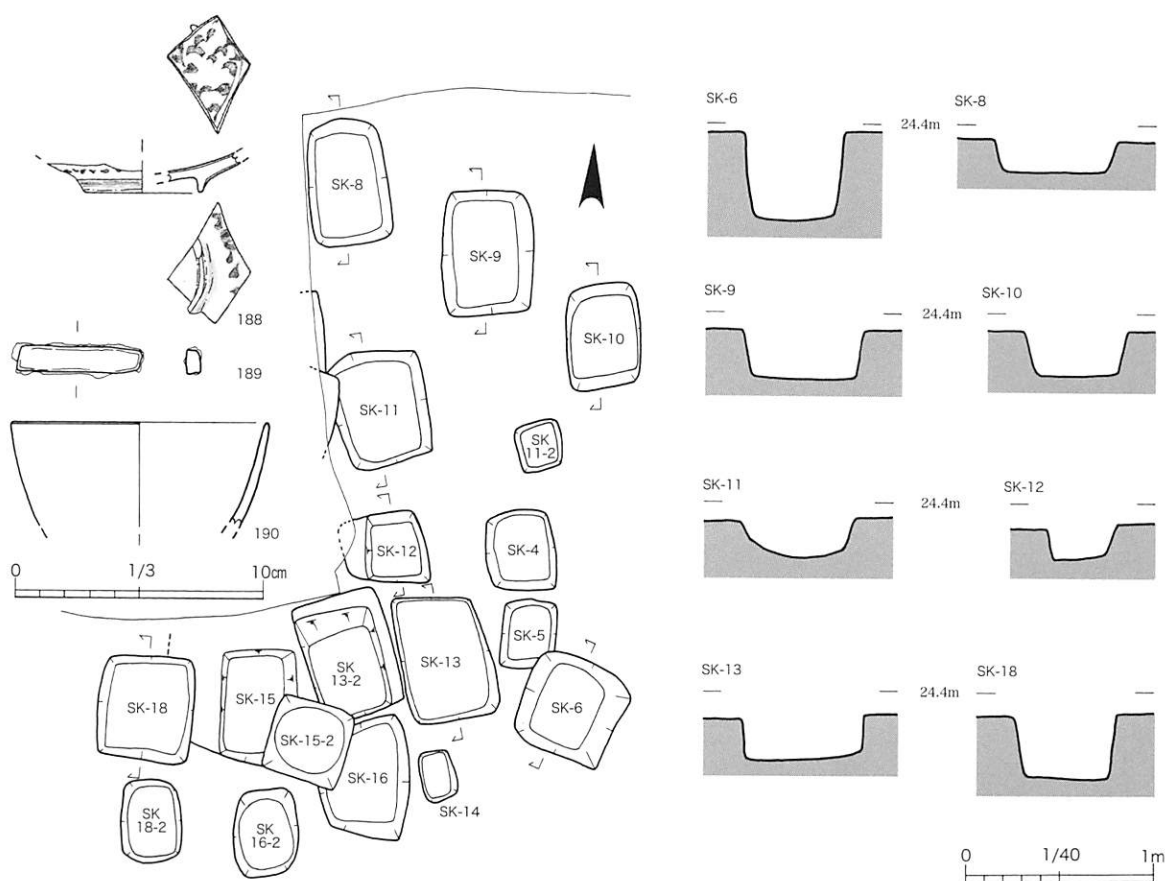
A 区中央部の近代墓周辺の土坑群。18 基以上が集中して分布する。平面は隅丸の長方形から方形を呈し、一辺の長さ 0.53 ～ 1.34m、深さ 0.38 ～ 1.06m。埋土は灰黄から黄褐色を呈する砂質土で、締まりなく、地山から供給された直径 1 ～ 3cm 程度の円礫を多く含む。規模や平面形にさほど統一性はないが、遺構面へ垂直に掘り込むことや、埋土の様相などは類似しており、近接した時期の所産であろう。埋葬施設を伴う土坑墓に見られる空隙への埋土の落ち込みはなく、すべて単一の埋土であった。また、副葬品や棺材・鉄釘等の遺物も出土しなかった。遺物は土坑 13 から 16 世紀前半の景德鎮窯の磁器碗小片 (第 30 図 **188**) と鉄器 (第 30 図 **189**) が、土坑 15 から 17 世紀中ごろの肥前系陶器碗の小片 (第 30 図 **190**) が出土したのみである。

貯蔵穴の可能性も指摘されたが、一部の土坑では完掘後、底部から若干の湧水があって貯蔵には不向きであることから、近世以降の土坑墓としておく。

景德鎮窯の磁器碗 **188** は底部の小片。内外面に染付を施し、高台外面にも線を一条巡らせる (16 世紀前半～中ごろ)。鉄器 **189** は用途不明、現状は長方形で長さ 5.0cm、幅 1.0cm、厚さ 0.6cm。土坑 13 出土。肥前系陶器の碗 **190** は口縁部の破片。全体に薄く透明釉をかける (17 世紀中ごろ)。土坑 15 出土。



第 29 図 近世の土坑と柱穴



第 30 図 近世の土坑群

(5) 柱穴 (第 31 図、PL16～18)

① 柱穴 1

A 区東部、SB-2 東側の柱穴。埋土(礫混じり暗茶土)から須恵器質のこね鉢(第 32 図 191)が出土した。

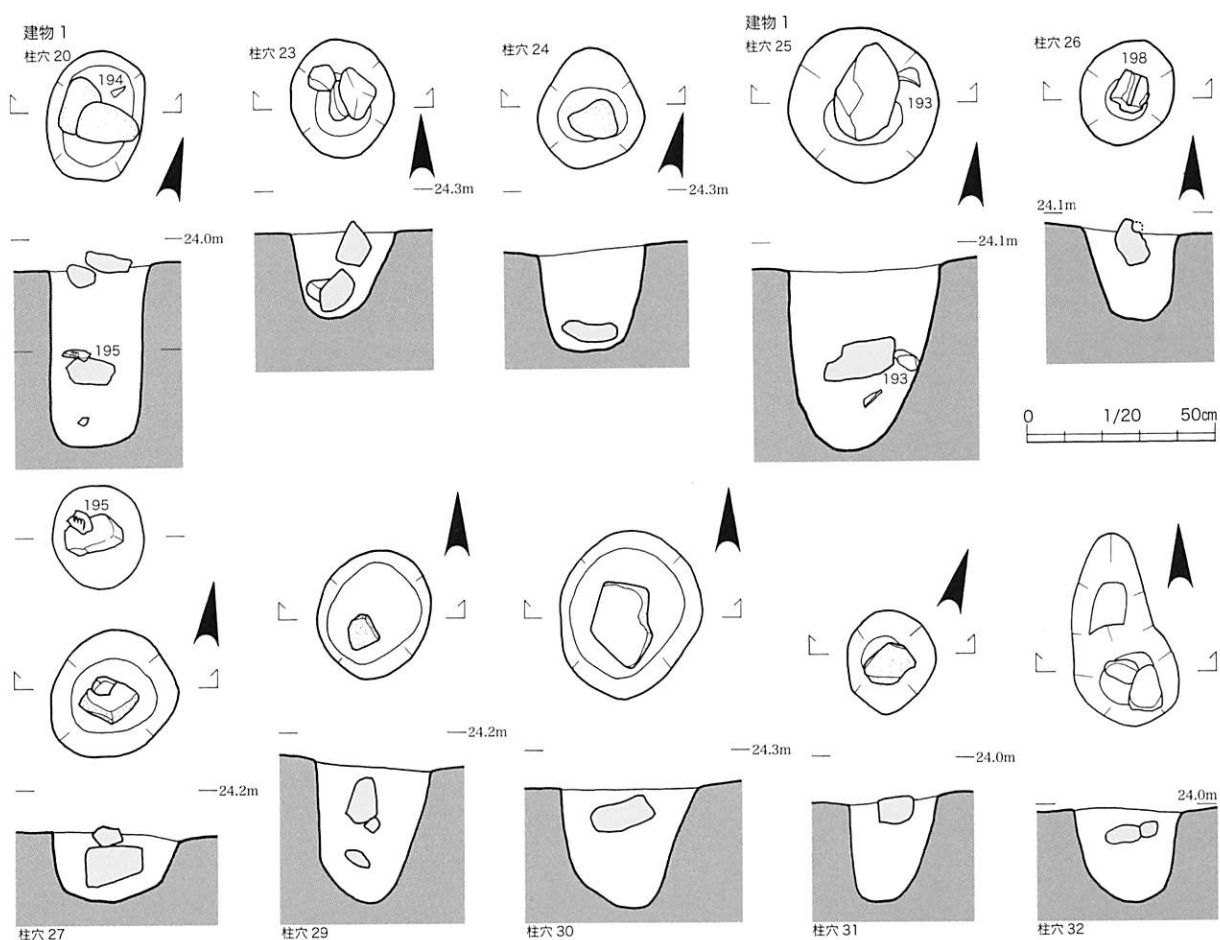
② 柱穴 26

A 区南東部、建物 SB-3・4 の中間に位置する柱穴。平面は円形、直径は東西 0.25m、南北 0.27m、深さ 0.23m。埋土の上位で石臼の破片(第 32 図 198)が 1 点出土した。

(6) 遺物 (第 32・33 図、巻頭図版 4-1、PL24)

須恵質のこね鉢 191 は口縁部の小破片、内面を細かい単位の手で調整する。柱穴 1 出土。肥前内野山窯の銅緑釉皿 192 は口縁付近の破片、柵 SA-1 の柱穴 7 から出土(17 世紀末～18 世紀初頭)。

肥前系白磁の小杯 193 の口縁は短く外反する。高台畳付は、砂目地を一部研磨している(17 世紀後半)。建物 1 の柱穴 25 出土。波佐見系磁器の皿 194 は口縁部の破片、内面に草花文(17 世紀後半～18 世紀前半)。建物 SB-1 の柱穴 20 出土。肥前系磁器の碗 195 は口縁部から体部に



第 31 図 近世の柱穴

かけての破片、外面に草花文もしくは山水文。釉は薄く、均一である (17 世紀後半)。建物 SB-1 の柱穴 20 出土。

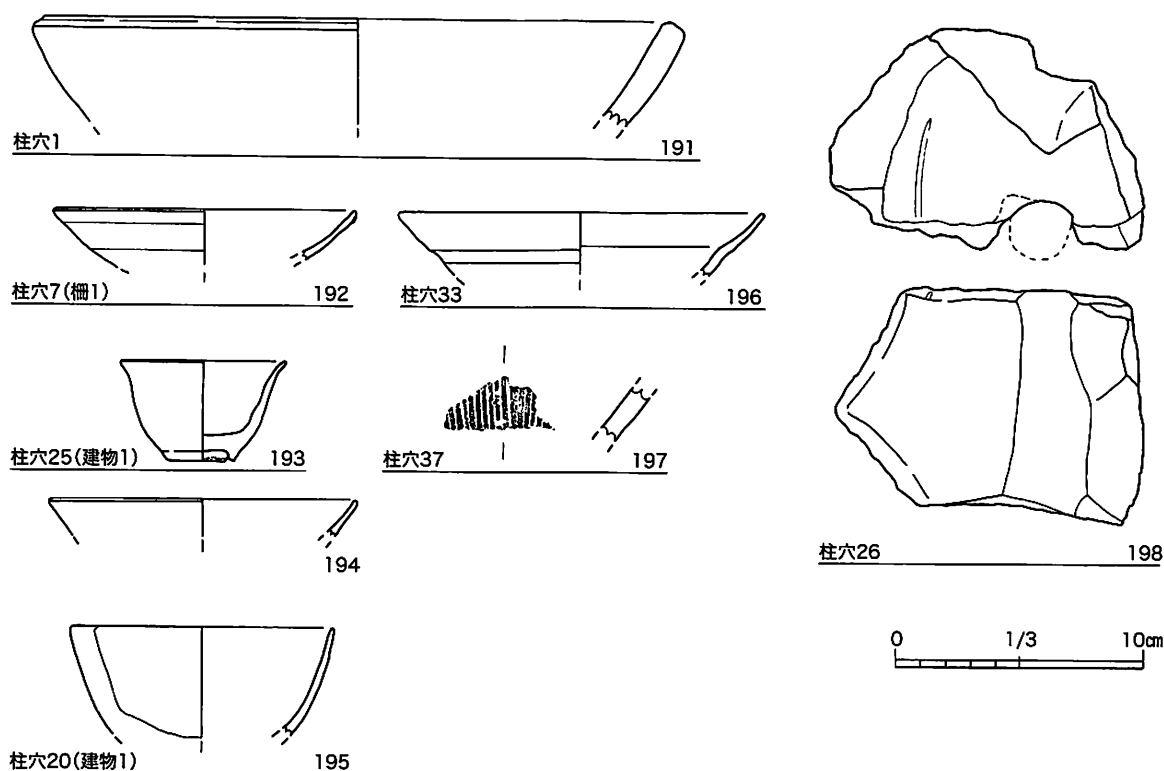
肥前内野山窯の陶器皿 196 は内面の口縁端部付近が灰白色釉、それ以外の部分は透明釉をかける (17 世紀後半～18 世紀前半)。柱穴 33 出土。瓦質土器のすり鉢 197 は体部のごく小片、残存部の内面全体にすり目を刻む。柱穴 37 出土。石臼 198 は破片のため上下不明。穴の一部が残り、もの入れであれば上臼、軸穴であれば下臼である。白面は荒れており、すり目はほとんど残っていない。安山岩。柱穴 26 出土。石臼はこのほかに表土から 3 点出土しており、いずれも破片である。

以下は表土から出土した近世の遺物である。国産の瓦質土器・陶器、中国産の磁器、肥前系の陶磁器、石器がある。

瓦質土器にはすり鉢、火舎がある。すり鉢 199・200 は口縁部の小破片。ともに端部は外傾する面を作り、内面に 2～5 本単位のすり目を施す。火舎 201 は脚部の破片。体部との境に浅い段をめぐる。脚の内側に煤が付着する。

備前のすり鉢 202 は口縁部付近の小片のため、復元径は信頼性がやや低い。片口もごく一部の残存である。口縁端部は外傾する面を作り、わずかに内側につまみ出す (14 世紀後半～15 世紀前半)。

北部九州産の灰釉陶器碗 203 は底部の破片、見込に胎土目が二箇所残る (16 世紀末～17 世紀



第 32 図 近世の遺物① 遺構出土

初頭ごろ)。景德鎮窯の小杯 204 は底部の小片。見込と高台に染付を施す(16 世紀後半)。漳州窯の磁器碗 205 は底部の小片。見込の文様が一部残り、高台外面に線を一条巡らせる(16 世紀末～17 世紀初頭)。

肥前系陶器には碗・小碗・皿・火入・瓶が、磁器には碗・瓶・仏飯器がある。

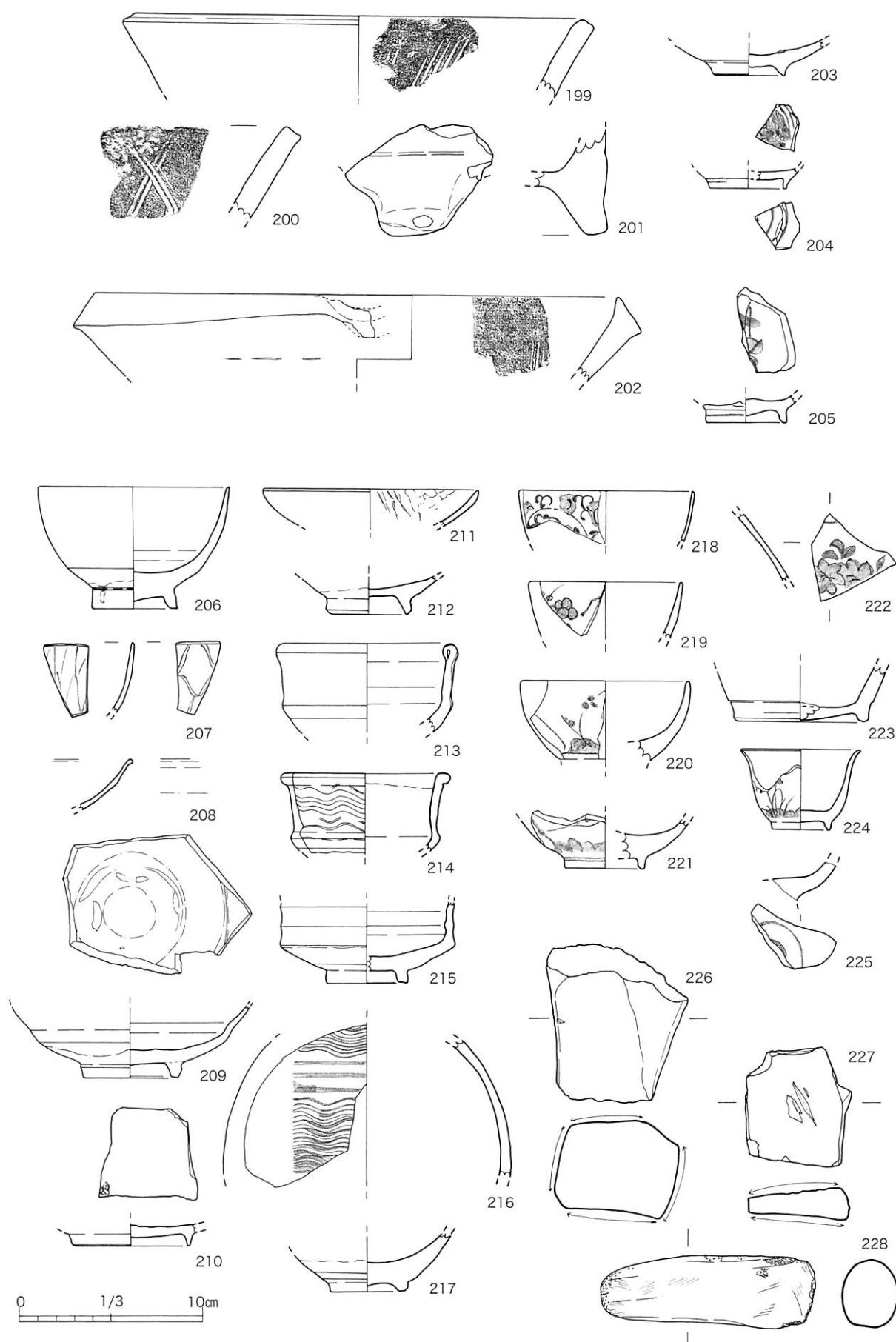
内野山窯の碗 206 は体部が直線的に立ち上がる。内面は透明釉、外面は緑銅釉、体部下半は露胎(17 世紀後半～18 世紀前半)。小碗 207 は口縁部の破片。内外面に網目文を施す(18 世紀前半)。鉄釉皿 208 は口縁部の小破片。全体に薄手で、灰白色釉をかける(17 世紀前半～中ごろ)。皿 209 は体部下半から底部にかけての破片。見込は蛇の目剥ぎ、重ね焼きによる別個体の底部痕が半円状に残る(17 世紀後半)。皿 210 は底部の破片。見込の染付文のごく一部が残る(17 世紀代)。皿 211 は口縁の破片、胎土や釉調は 212 に類似する。皿 212 は底部の破片。高台付近が露胎、体部は刷毛目で透明釉をかける。見込は蛇の目剥ぎ(18 世紀前半)。

火入 213～215 は内面が露胎、外面は体部下半まで暗青緑色の釉をかける。214 は外面に刷毛目を施し、鉄釉をかける。いずれも内野山窯産(17 世紀後半～18 世紀前半)。瓶 216 は体部上半の破片。外面に三条の線を巡らせ、上下に刷毛目を施す。灰釉陶器碗 217 は底部の破片、体部下半は露胎。

波佐見系磁器碗 218～220 は外面に草花文、梅文などの染付を施す(17 世紀後半～18 世紀前

半)。221 の高台疊付は露胎(18 世紀後半)。磁器瓶 222 は肩部付近の破片。内面は露胎、外面に花文を施す。磁器瓶 223 は底部の破片。高台外面に、細線を一条巡らせる。内面は露胎だが、底部中央付近に釉がたまる。磁器小杯 224 は外面に草花文を施す。高台疊付は砂目地の一部を研磨し、削り落としている。仏飯器 225 は体部付近の小片。脚の付け根付近と底面近くに染付で線を巡らせる。

砥石 226 は直方体の周囲四面に使用痕がある。かなり使い込んでおり、研ぎ減っている。火を受けたためか、部分的に色調が赤色や黒色を呈する。緻密な砂岩。砥石 227 は薄い直方体の両面に使用痕がある。空隙が目立つ砂岩。弥生時代の磨製石斧 228 はほぼ完形。敲打で整形し、研磨で仕上げる。刃部は使用によって部分的に欠損する。



第 33 図 近世の遺物② 表土出土

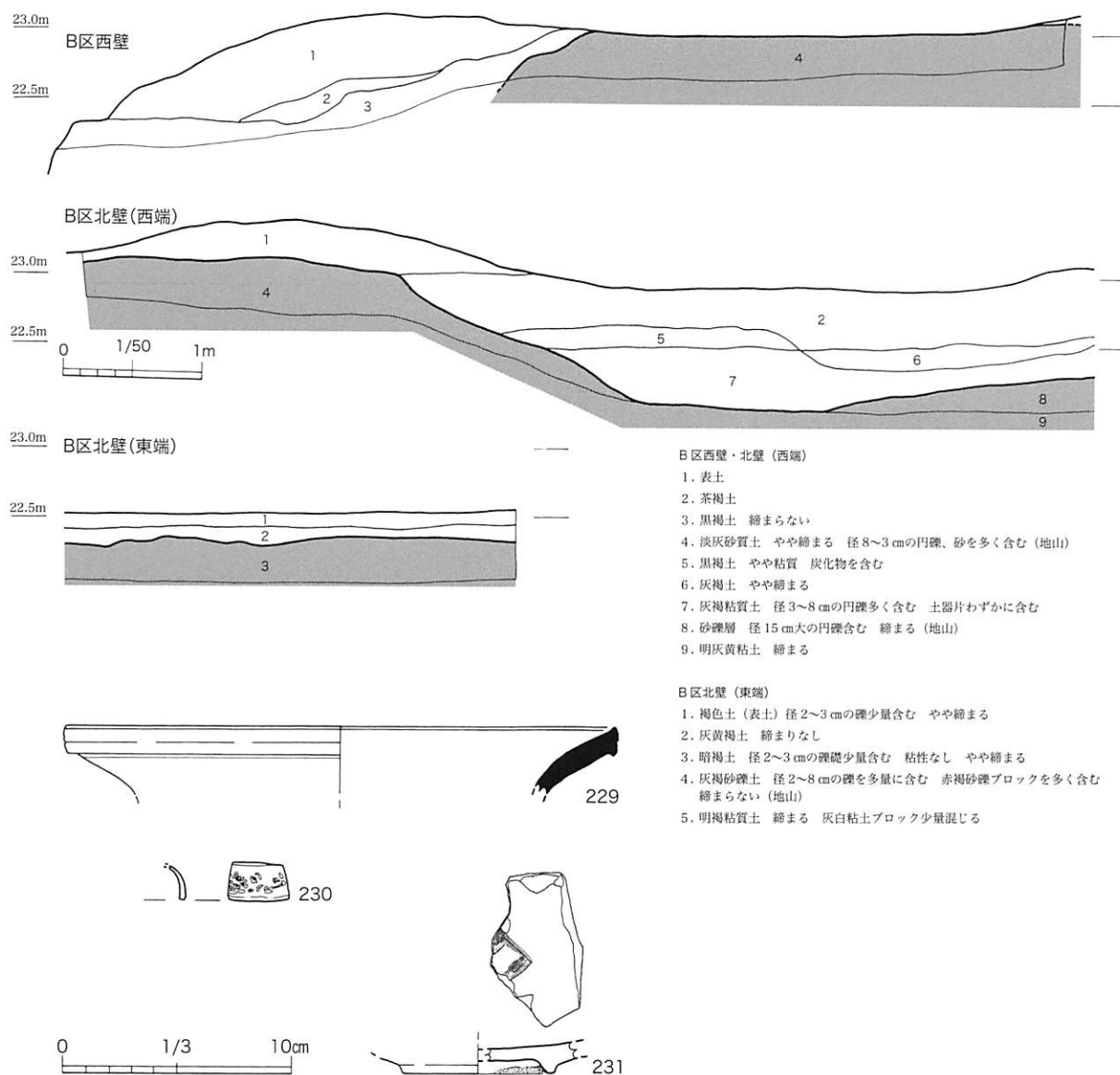
6. B 区の層序と遺物（第 34 図、PL19）

B 区は A 区の北西に位置する調査区である。A 区より約 1.5 ～ 1.7m 低い。地表面の標高は 22.8m、北端部ではやや高く 23.5m。調査区の東側は高くなり畑として、西側は低くなり水田として利用されている。

南半では地表から約 0.4m の掘削（標高 22.4m 付近）で灰褐色砂礫土層（地山面）に達した。明確な遺構を検出しなかった。地山には直径 2 ～ 10cm 大の円礫および赤褐色砂礫を多く含み、締まらない。南東部に柱穴状の遺構を検出した。3 個が近接した位置で不規則に分布する。いずれも平面円形で直径 0.25 ～ 0.4m、深さ 0.16 ～ 0.27m。埋土は赤褐色砂で礫を多く含み、地山に類似する。ここから遺物は出土しなかった。

北端部の地山面は、南半より 0.7m 高い標高 23.1m 付近で検出した。西側への傾斜を確認するためにサブトレンチを設定し、掘削したところ、地山面は急激に落ち込み、直上は現代のゴミを含む黒褐土で覆われていた。B 区全体が大規模な土取りで削平されたものか。

遺物は表土および検出作業中に出土したのみで、遺構に伴うものはない。須恵器の壺 229 は口縁部の破片、口縁は外側に開き、端部をわずかに上下につまむ。外面は焼成時の降灰により黒変している。青白磁の合子蓋 230 は外面に草花文のレリーフを施す。口縁端部から内面の頂部付近までは露胎（12 ～ 13 世紀代）。肥前系磁器の皿 231 は底部の破片、見込中央に染付。高台畳付は砂目地を研磨している（1630 ～ 40 年代）。



第34図 B区の土層と遺物

種類	番号	長さ	幅	深さ(m)	遺物	備考
◎ 古代の遺構						
土坑SK -	101	0.42	0.32	0.28	土師器 杯 (第23図150・151)	
土坑SK -	102	0.60	0.52	0.38	土師器 小片	図化できず
土坑SK -	106	1.29	1.18	0.54	土師器 杯 (第23図152)	
土坑SK -	108	1.28	1.06	0.12	土師器 杯 (第23図153-156)、スラグ	土坑墓か
土坑SK -	113	0.36	0.31	0.40	土師器 杯 (第23図161)、小片多い	
土坑SK -	115	0.54	0.46	0.38	土師器 甕、杯 (第23図157-159)	
土坑SK -	116	0.98	0.74	0.54	土師器 小片 図化できず	SK-134を切る
土坑SK -	117	0.47	0.44	0.43	土師器 小片	図化できず
土坑SK -	118	0.70	0.52	0.30	土師器 杯 (第23図162)	石材2点、3.64 kg
土坑SK -	119	0.84	0.68	0.45	土師器 小片	図化できず
土坑SK -	120	0.80	0.90	1.00	須恵器 杯 (第23図163)	柱穴124を掘り込む
土坑SK -	127	0.72	0.54	0.36	土師器・須恵器 甕体部 小片	図化できず
土坑SK -	128	0.57	0.40	0.42	土師器 杯 (第23図165)	
土坑SK -	129	0.52	0.28	0.20	土師器 小片、黒曜石剥片	図化できず
土坑SK -	134	0.58	0.52	0.45	なし	
土坑SK -	135	0.80	0.84	0.60	土師器 小片	図化できず
土坑SK -	137	0.66	0.62	0.33	土師器 小片	図化できず
柱穴 Pit-	103	0.77	0.51	0.46	土師器 小片	図化できず
柱穴 Pit-	107	0.30	0.28	0.25	土師器 小片	図化できず
柱穴 Pit-	109	0.52	0.38	0.37	土師器 甕 (第23図160)	
柱穴 Pit-	117	0.47	0.44	0.43	土師器 小片	図化できず
柱穴 Pit-	124	0.50	0.39	0.80	土師器 小片	図化できず
柱穴 Pit-	125	0.56	0.44	0.38	土師器 小片	図化できず
柱穴 Pit-	126	0.42	0.40	0.30	土師器 小片	柱痕直径0.18 m
柱穴 Pit-	130	0.50	0.58	0.62	土師器 小片	埋土締まらない
柱穴 Pit-	131	0.40	0.38	0.26	土師器 碗 (第23図166)	
柱穴 Pit-	132	0.74	0.44	0.12	土師器 小片	図化できず
柱穴 Pit-	133	0.40	0.36	0.34	土師器 小片	図化できず
柱穴 Pit-	138	0.51	0.48	0.22	土師器 小片	図化できず

表4 2次調査 古代の遺構

種類	番号	長さ	幅	深さ(m)	遺物	備考
◎ 近世の遺構						
土坑群	S K- 4	0.87	0.75	0.27		
土坑群	S K- 5	1.34	0.97	0.32		
土坑群	S K- 6	1.08	1.06	0.96		
土坑群	S K- 8	1.33	0.87	0.35		
土坑群	S K- 9	1.30	0.98	0.53		
土坑群	S K- 10	1.10	0.80	0.49		
土坑群	S K- 11	1.24	1.00	0.41		
土坑群	S K- 11-2	0.55	0.50	0.29		
土坑群	S K- 12	0.90	0.75	0.34		
土坑群	S K- 13	1.33	1.00	0.47	景德鎮窯磁器碗(第30図188)16世紀前半～中頃、鉄器(第30図182)	
土坑群	S K- 13-2	1.33	0.95	0.76		
土坑群	S K- 14	0.53	0.38	0.22		
土坑群	S K- 15	1.25	0.85	0.70	肥前系陶器碗(第30図183)17世紀中頃	
土坑群	S K- 15-2	0.85	0.85	0.47		
土坑群	S K- 16	1.25	1.00	0.61		
土坑群	S K- 16-2	0.92	0.70	0.25		
土坑群	S K- 18	1.10	1.02	0.69		
土坑群	S K- 18-2	0.90	0.64	0.28		
土坑	S K- 3	1.02	0.70	0.42	土器(第28図178-184)	石材多数
土坑	S K- 7	1.82	1.31	0.93	肥前陶器 皿(第29図185)、鉄器(第29図186)	石材多数、30.28kg
土坑	S K- 114	0.64	0.58	0.41	染付陶器	近代以降
柱穴Pit-	1	0.30	0.26	0.29	須恵質こね鉢(第32図191)	中世か
柱穴Pit-	7	0.34	0.2	-	肥前陶器 皿(第32図192)	柵 S A- 1
柱穴Pit-	14	0.28	0.20	0.28	肥前陶器 碗(第29図187)	建物 S B- 1
柱穴Pit-	20	0.25	0.34	0.48	肥前系白磁(第32図193・194)、石材3(凝灰岩1、垂円礫2)	建物 S B- 1
柱穴Pit-	21	0.64	0.64	0.24	石材1(垂円礫)、1.78kg	
柱穴Pit-	23	0.27	0.32	0.22	石材2(凝灰岩14.0×10.0×8.0cm、垂円礫10.7×9.6×5.7cm)、2.64kg	
柱穴Pit-	24	0.28	0.33	0.26	石材1(円礫12.8×12.0×4.3cm)、0.82kg	
柱穴Pit-	25	0.30	0.40	0.48	肥前系磁器 碗(第32図195)、石材1(凝灰岩)、3.6kg	建物 S B- 1
柱穴Pit-	26	0.25	0.27	0.23	石臼1(第32図198)、0.94kg	
柱穴Pit-	27	0.34	0.34	0.18	石材2(垂角礫10.5×7.3×2.3cm 小型)、0.26kg	
柱穴Pit-	29	0.30	0.34	0.36	石材1(凝灰岩10.0×9.7×8.5cm)、0.68kg	
柱穴Pit-	30	0.38	0.44	0.32	石材1(円礫24.5×16.0×11.7cm)、5.0kg	
柱穴Pit-	31	0.24	0.28	0.28	石材1(垂円礫13.5×9.8×8.7cm、受熱による割れ?)、1.4kg	
柱穴Pit-	32	0.52	0.24	0.16	石材1(凝灰岩14.0×7.0×3.8cm)、0.28kg	
柱穴Pit-	33	0.66	0.40	0.18	肥前陶器 皿(第36図196)、石材2(垂円礫、凝灰岩)、3.58kg	
柱穴Pit-	35	0.30	0.29	0.22	石材1(凝灰岩18.5×14.5×5.0cm)、0.84kg	
柱穴Pit-	36	0.25	0.25	0.37	石材7(凝灰岩5、垂円礫1、垂円礫1)、8.72kg	建物 S B- 5
柱穴Pit-	37	0.29	0.24	-	瓦質土器 すり鉢(第32図197)、石材1(円礫)、2.96kg	
柱穴Pit-	38	0.28	0.25	0.17	石材1(垂円礫18.5×14.5×5.0cm)、0.36kg	
柱穴Pit-	40	0.24	0.23	0.25	石材2(垂角礫17.5×13.0×4.4cm 10.4×3.8×3.5cm)、1.26kg	
柱穴Pit-	41	0.30	0.29	0.23	石材1(垂円礫13.0×12.0×6.6cm)、1.32kg	

表5 2次調査 近世の遺構

第5章 ま と め

1. 1 次調査の成果

1 次調査では、段丘南縁辺部をめぐる調査区 (5-7 トレンチ) において溝の一部を検出し、ここから輸入陶磁器・土師質土器がまとまって出土した。輸入陶磁器は、大宰府編年によれば 12 世紀代を中心として前後の時期を含む。前述したが、搬入に要する時間や伝世、開口の長い溝から出土したことなどの条件により、この年代観をそのまま遺構年代に比定することはできない。また、これらの遺物は調査上の制約から、厳密に層位的な取り上げを行うことができなかった。しかし、出土状況はある程度集中する傾向があったため、近接する地区からもたらされたものであると推測できる。低地である氾濫原に位置するトレンチでは遺構を検出しなかったことから、遺物の供給地は段丘上である。

輸入陶磁器類には、当該時期の集落遺跡から一般的に出土する器種のほか、微量ながら初期の龍泉窯系・同安窯系青磁 0 類や龍泉窯系青磁 III 類などの優品も出土している。このことから、ある程度上級の使用階層を想定でき、段丘上の北東 300m に位置する中村廃寺の造営主体と関連が深い。廃寺についての詳細は、未だ不明であるが、塔心礎周辺の平坦面が狭小であることから、三重程度の塔のみが立地していたとされている (注 1)。その他の寺院関連施設や居住域は隣接する地区に求められるが、今回の調査地近辺にも想定しうることを指摘しておく。出土した遺物に関しては、土師質土器類とあわせて破片数などの定量的な分析を行うことで正確な位置付けを得ることができると考えるが、果たせなかった。今後の課題である。

また、11 トレンチで検出した近世 - 近代にかけての石組み溝 SD-4 と、ここから出土した鑄造関連遺物についても、溶鋳炉の一部である可能性を指摘するにとどまった。これについては、鑄物生産の操業が近代まで続くことから、民俗学的な調査も含めた検討が必要であろう。

2. 2 次調査の成果

2 次調査では、A 区において古代および近世の遺構を検出し、東半部において近世の掘立柱建物 5 棟、柵 3 条を復元した。遺構構成の検討に際しては、検出した柱穴すべてが近世の所産と仮定した。仮定の根拠は、柱穴の様相 (形状・規模・埋土など) が類似していること、柱穴の埋土から出土した遺物のうち、時期が判断できるもの全てが近世に属することである。

復元した遺構のうち遺物が出土したのは、最も規模の大きい建物 SB-1 のみであり、3 個の柱穴より肥前系陶磁器 4 点が出土している。柱穴 14 の陶器碗 187、柱穴 20 の肥前系磁器皿 194 と磁器碗 195、柱穴 25 の肥前系白磁杯 193 がいずれも 17 世紀代の所産であることから、これを建物 1 の時期とする。これ以外の建物の時期は不明であるが、遺構を構成する柱穴は最大でも直径 40cm 程度の規模であり、これから考えられる柱材の太さから推し量っても、到底数世代以上の耐久年数を見積もることはできない。よって他の建物も、建物 1 に前後する、それほ

ど遠くない時期の所産であろう。

建物の桁行方向はおおむね東西方向にあり、柵とともに、類似する方位によって、二つのグループにまとめることができる。

- ・ 北から 20-25 度振る遺構…建物 1・建物 2・建物 5・柵 1・柵 2
- ・ ほぼ正方位の遺構…建物 3・建物 4

これらの建物と柵は、近接した位置にあることから、それぞれ有機的な関係を保ちつつ数回の建て替えを経ているのであろうが、切りあい関係のある柱穴はなく、出土遺物からも前後関係を推定することはできない。南庇のある建物 1 と、その北側に隣接する建物 2 は同方位で規模の差があり、主屋とこれに付随する小屋を想定できる。これ以外の建物に、大きな規模差は見受けられず、同程度の使用階層を想定するにとどまる。

今回の調査区における遺構分布は、調査区外の東や南方向へと広がる様相を示していることから、調査地が遺跡のごく一部、しかも末端付近のやや条件の悪い地点に位置することは明らかである(注 2)。しかし、調査地の立地条件が検出した建物遺構の規模や性格を規制していたかどうかは、今回の調査成果のみでは判断できない。

周辺では山鹿市鹿央町の城尾屋敷遺跡において、17 世紀末~18 世紀前半の肥前系陶磁器類が出土している(注 3)。調査では溝と土坑 3 基が確認されたが、建物遺構は検出されていない。熊本市古町遺跡では、近世の土器・陶磁器類が大量に出土し、定量的な分析が行われている(注 4)。これは熊本城下町における様相であり、農村集落とは性格が異なる。

このほか、熊本県内はもとより九州内でも、近世集落遺跡の調査事例は少ないようである(注 5)。その要因として、城下町など生活面を地上げによる造成によって認識できる遺跡を除けば、前代の遺構と重複している場合、遺物が出土しない遺構を近世の所産として認識できていないこと。中世前期以降の集落は移動せず、現集落の位置にあるため、面的な調査が実施できないことなどがあげられよう。近世農村集落の様相は、考古学的には判然としない状況にある。

よって、一般的な近世集落の在り方を知るためには、現存する民家遺構が文献史料を参照する必要が生じてくる。しかし、現在まで残されている民家は、18 世紀以降の庄屋など富裕層の大規模な家屋であったことが多く、一般階層の生活と断絶したものであることが指摘されている(注 6)。これを補う近隣地区の文献史料として、以下のものがある。

17 世紀前半の農村集落の建物構成を記録した史料として、寛永 10(1633) 年の「肥後藩人蓄改帳」がある。熊本市周辺の 101 村、9197 棟について建築の種類と建物群構成、規模と内容が記録されたものである。230 棟ある本屋(主屋)のうち、間口 2 間のものが 8 割近くあり、平均面積は 8.5 坪(2×4 間)になるという(注 7)。

また、時代はやや下るが、宝暦 13(1763) 年の「宝暦新町絵図」も参考になる(写真 24)。新町は現在の山鹿市鹿本町来民にあたり、遺跡から東へ 3.5km の距離に位置する。この絵図は通有のものと異なり、街村をなす町場の民家が斜め上空から見下ろして立体的に描写され、間口・屋根の形・棟・庇・屋根材料・正立面・正面の土台や地覆の有無、所有者や居住者など、豊富な

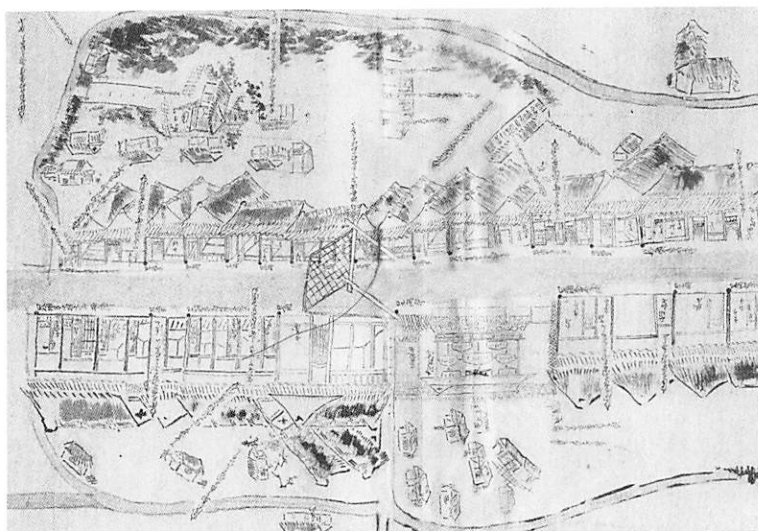


写真 24 「新町絵図」に描かれた町並み

史料からも、今回の調査で出土した建物遺構が、一般的な階層の居住用建物に近い規模であることを確認することができた。ただ、「肥後藩人蓄改帳」には、大小さまざまな性格の建物群が集まって世帯を構成していたことが記されている。周辺の集落域における調査によって、この地域の生活史がさらに明確になると考える。残存している遺構面は現地表から浅く、開発に伴う埋蔵文化財の保護には十分な配慮が必要である。

情報を読み取ることができる(注 8)。先学の詳細な検討によると、記されている 157 戸(134 棟)の建物のうちもっとも多いのは妻入り寄棟単棟型で、梁間 2 間半と 3 間で 80% に達する。建物は草葺がほとんどで、竹庇のある建物が 46 棟ある(注 9)。この絵図でも、描かれた建物の規模と、調査で出土した遺構との規模が近い。

このように、17-18 世紀の文献

注

1. 中村廃寺については第 2 章注 3 文献を参照。
2. 2 次調査地は南に開けており日当たりは良いものの、冬季の季節風が強く吹き付ける。居住地としては良好な環境ではないというのが、調査での印象であった。
3. 『城尾屋敷遺跡(広城推定地)』広域営農団地農道整備事業鹿本地区農道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告、鹿央町教育委員会、1998。
4. 原田範昭・美濃口雅朗『古町遺跡第 1 次調査区発掘調査報告書』熊本市教育委員会、2004。美濃口雅朗「熊本市古町遺跡出土の陶磁器組成について」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 九州編』九州近世陶磁学会、2006:140-155 頁。
5. 佐藤浩司「肥前陶磁の流通...福岡・大分・熊本」『国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる』第二分冊 九州近世陶磁学会、2002:879-998 頁。
6. 『埋もれた中近世のすまい』同成社、2001:viii 頁。
7. 吉田 靖『日本における近世民家(農家)の系統的発展』奈良国立文化財研究所学報第 43 冊、1985。「肥後藩人蓄改帳」は初代藩主細川忠利の命により作成された。
8. 『鹿本町史』1967。「新町絵図」は六代藩主細川重賢の命により作成された。東西 300 間におよぶ街道の様相を、幅 74cm、長さ 580cm にわたって描写している。紙本着色、個人蔵、山鹿市指定文化財。
9. 前掲注 7:35-43 頁。

写真図版

1



2



1. 調査地遠景 (北西から)
2. 調査地遠景 (南東から)

PL2 1次調査1~7トレンチ

1



2



3



4



1. 1トレンチ (南から)
2. 4トレンチ (南東から)
3. 5トレンチ溝 SD-1(南から)
4. 7トレンチ溝 SD-1(南から)

1



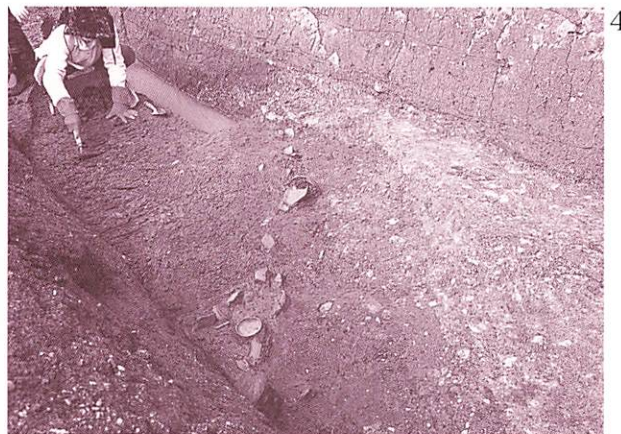
2



3



4



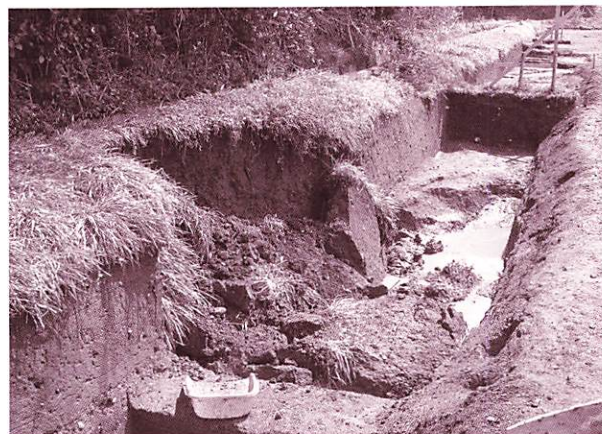
1. 7トレンチ溝SD-1(北から)
2. 7トレンチ溝SD-1 壁面(南西から)
3. 7トレンチ溝SD-1 土器出土(北西から)
4. 7トレンチ溝SD-1 土器出土(西から)

PL4 1次調査 8~9 トレンチ

1



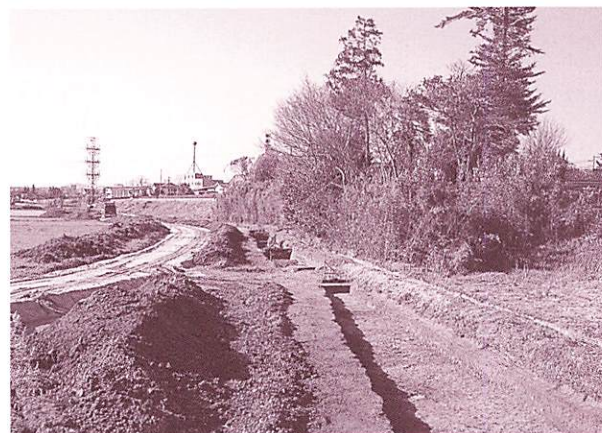
2



3



4



5



1. 9 トレンチ (北西から)
2. 7 トレンチ崩落 (北西から)
3. 8 トレンチ検出 (南西から)
4. 8-2 トレンチより 1 トレンチを臨む (南から)
5. 8-2 トレンチより 9 トレンチを臨む (北から)



1

2



3



4



5



1. 9トレンチ (南東から)
2. 9トレンチ検出 (南東から)
3. 9トレンチ西側の落ち込み (北東から)
4. 9トレンチ北壁 (南東から)
5. 9トレンチ南壁 (北西から)

1



2



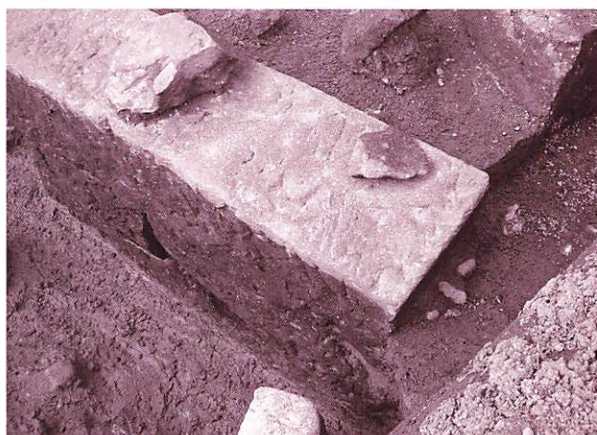
3



4



5



1. 11 トレンチ溝 SD-4(南西から)
2. 10 トレンチ (北東から)
3. 11 トレンチ (南西から)
4. 11 トレンチ北壁 (南西から)
5. 11 トレンチ溝 SD-4 石材 (南から)

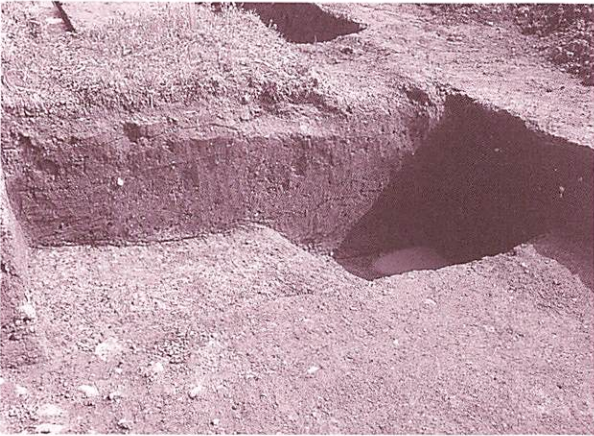
1



2



3



4



5



6

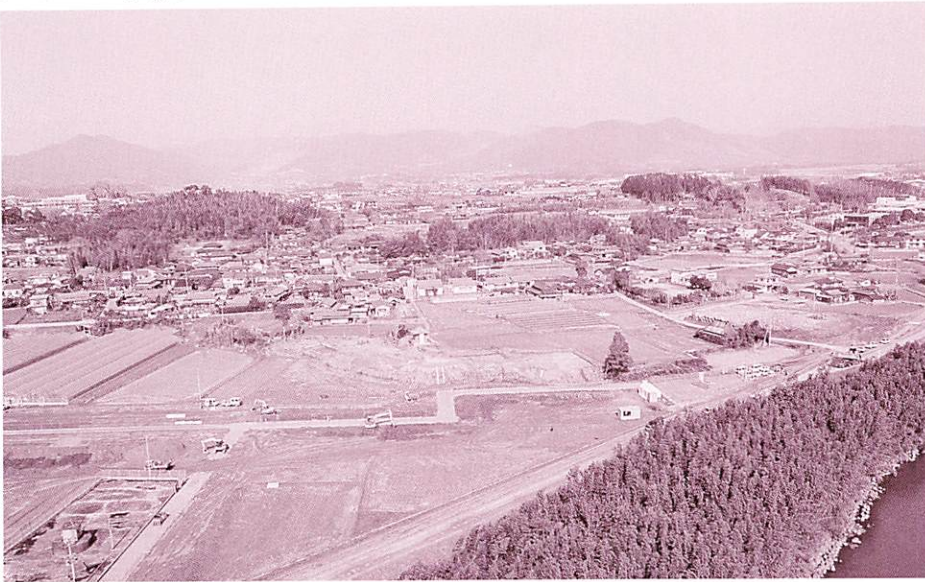


7



1. 12トレンチ (南西から)
2. 12トレンチ (北から)
3. 13トレンチ落ち込み (北から)
4. 14トレンチ (西から)
5. 16トレンチ落ち込み (東から)
6. 18～21トレンチ (南東から)
7. 18トレンチ検出作業 (北西から)

1



2



3



1. 調査地遠景 (南西から)

2. A区全景 (上が北)

3. A区東側 (上が北)



1



2

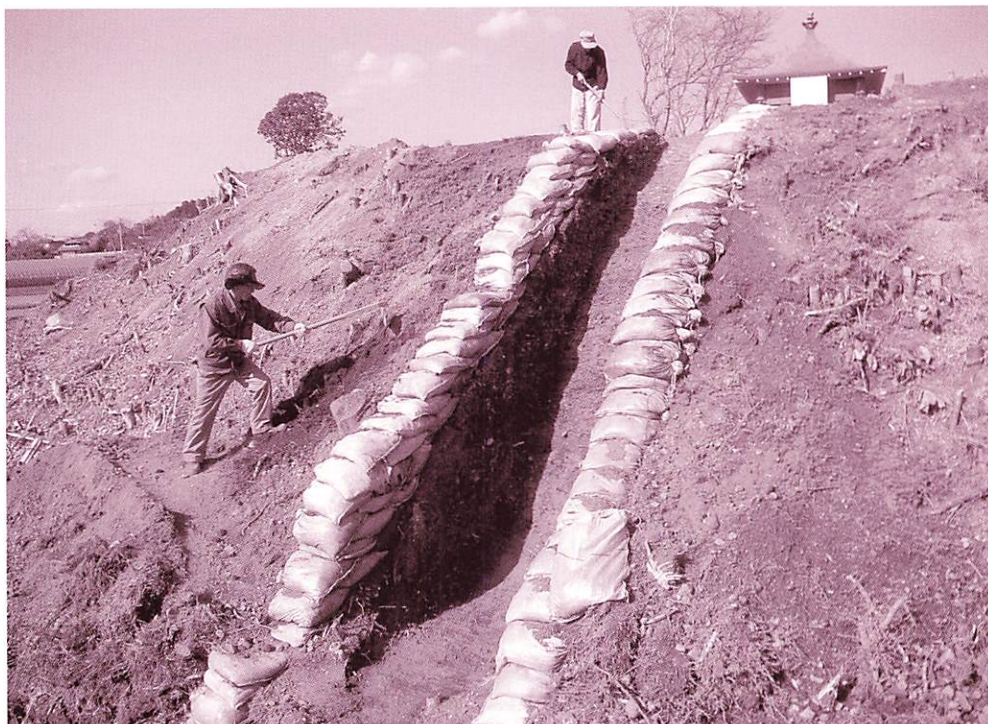


3

1. 東側 (南東から)
2. 東側 (北西から)
3. 西側 (北西から)

PL10 2次調査A区 土層と調査前後

1



2



3



4



1. サブトレンチ 4(南から)
2. 西壁と近世土坑(北東から)
3. 調査地全景(南西から)
4. 施工後(南西から)



1



2



3



4

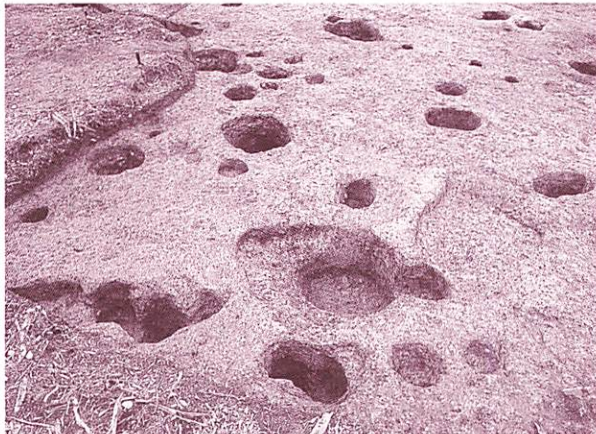
1. 土坑 SK-106・108(西から)

2. 土坑 SK-108 土器 (南西から)

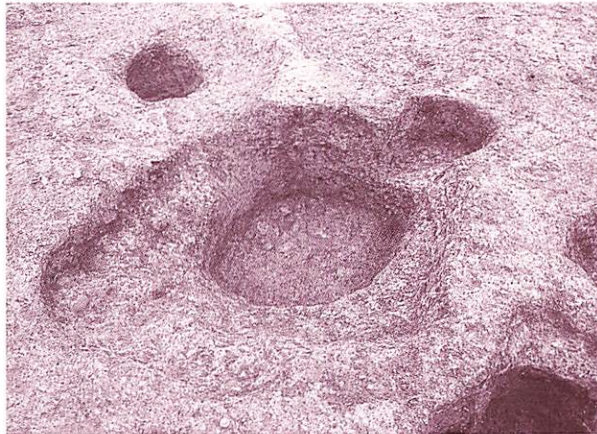
3. 土坑 SK-116・138(南東から)

4. 土坑 SK-101・102(南西から)

1



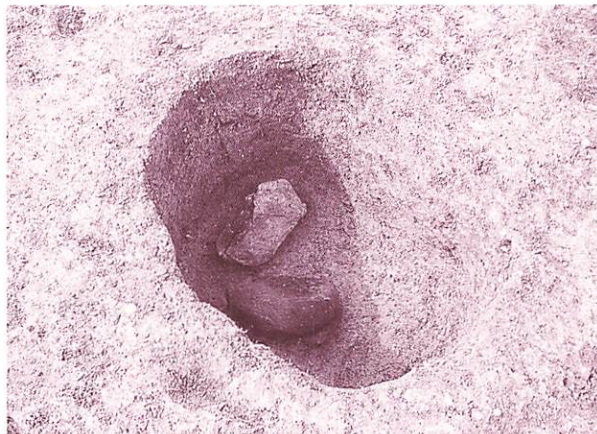
2



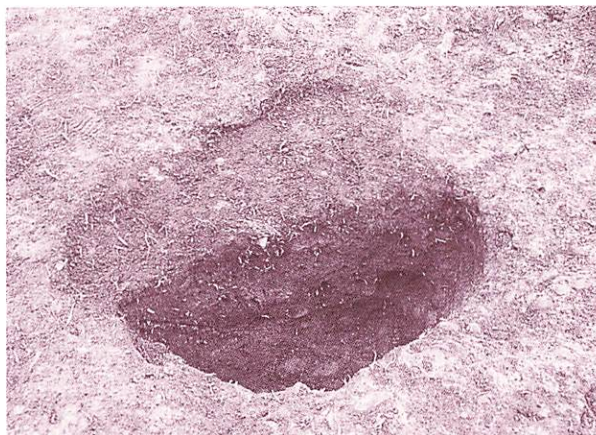
3



4



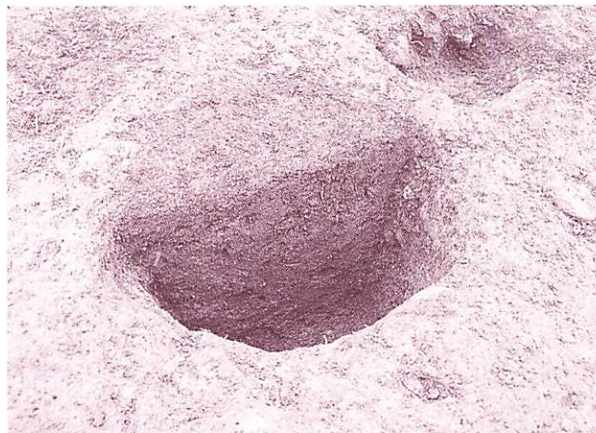
5



6



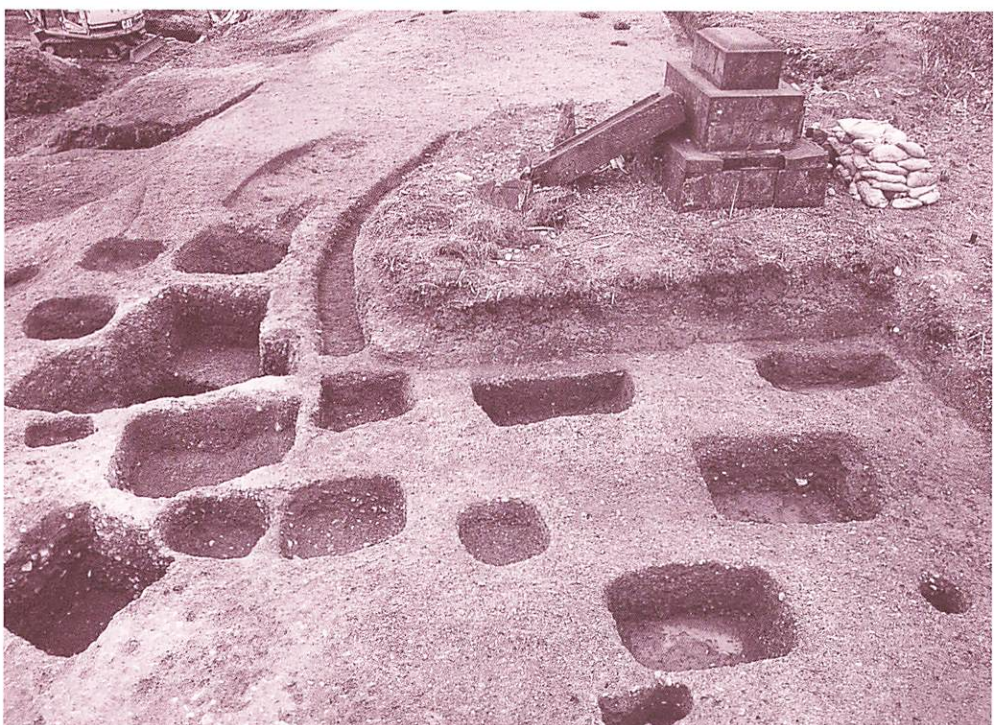
7



1. 土坑 SK-106(南東から)
2. 土坑 SK-106(北東から)
3. 土坑 SK-106(南から)
4. 土坑 SK-118 石材 (南東から)
5. 土坑 SK-134(南西から)
6. 柱穴 126(南西から)
7. 柱穴 133(北東から)



1



2



3



4

1. 近世土坑群 (南西から)
2. 近世土坑群 (南西から)
3. 近世土坑 SK-8・11(南から)
4. 近世土坑 SK-11(南から)

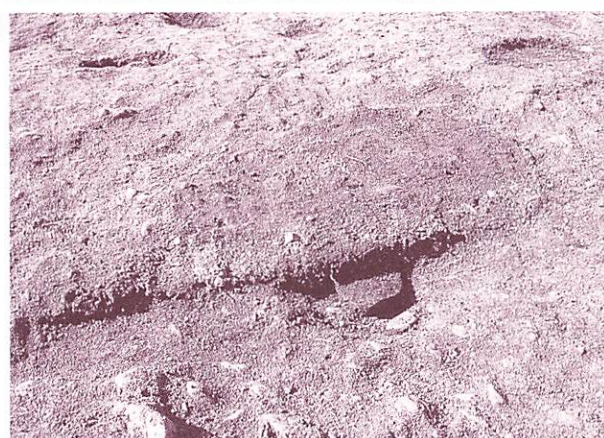
1



2



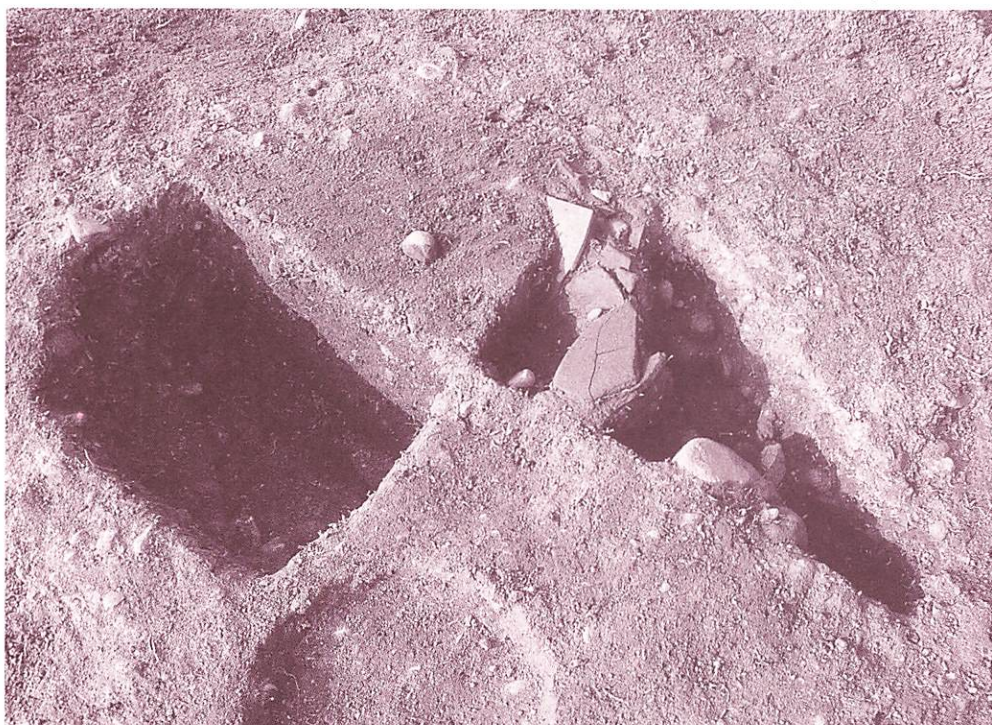
3



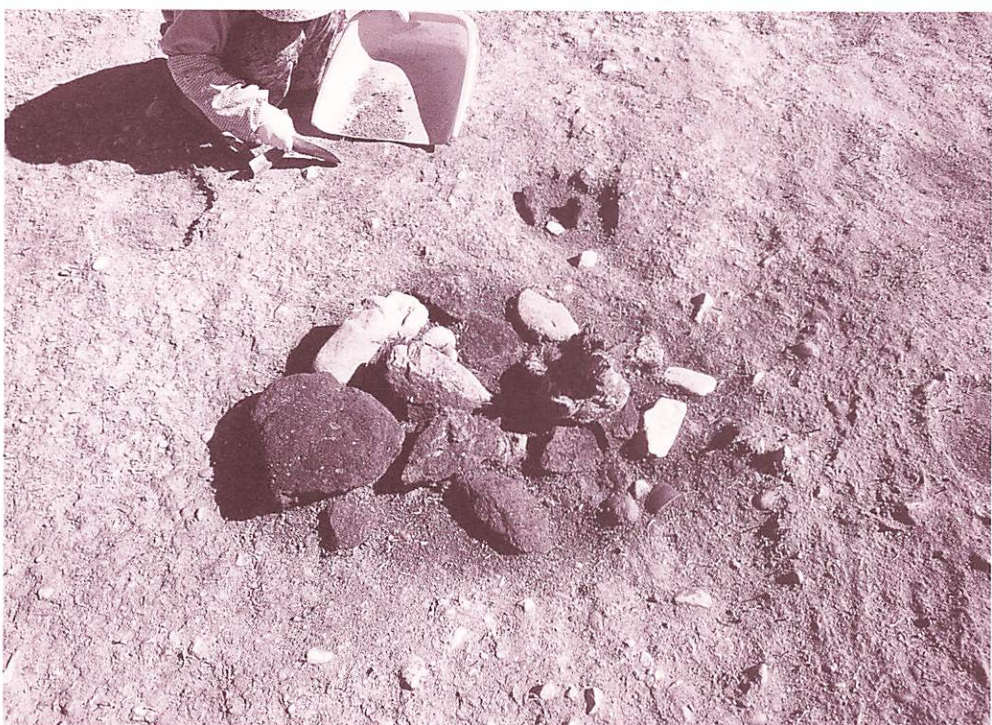
4



1. 溝 SD-2(南から)
2. 溝 SD-136(南から)
3. 溝 SD-2 断面と柱穴 36(南東から)
4. 溝 SD-136 断面 (南西から)



1



2



3



4

1. 土坑 SK-3(南西から)
2. 土坑 SK-7 と建物 SB-1 の柱穴 14(北西から)
3. 土坑 SK-3 土器 (北東から)
4. 土坑 SK-7(南西から)

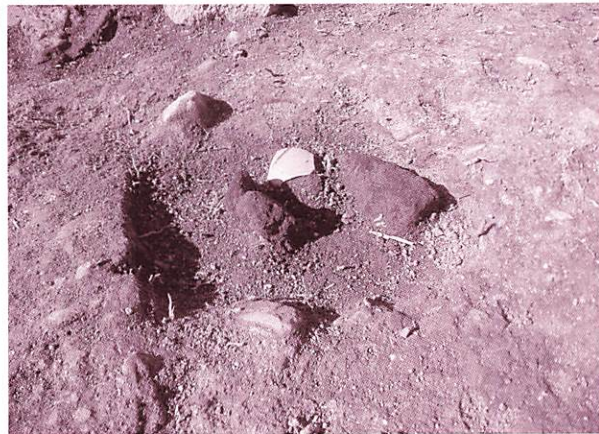
1



2



3



1. 土坑 SK-3 土器 (西から)
2. 土坑 SK-7 鉄器 186(南西から)
3. 建物 SB-1 の柱穴 14(東から)
4. 建物 SB-1 の柱穴 20 土器 194(南西から)
5. 建物 SB-1 の柱穴 20 土器 195(南東から)
6. 柱穴 23 石材 (南東から)
7. 建物 SB-5 の柱穴 24 石材 (南東から)

4



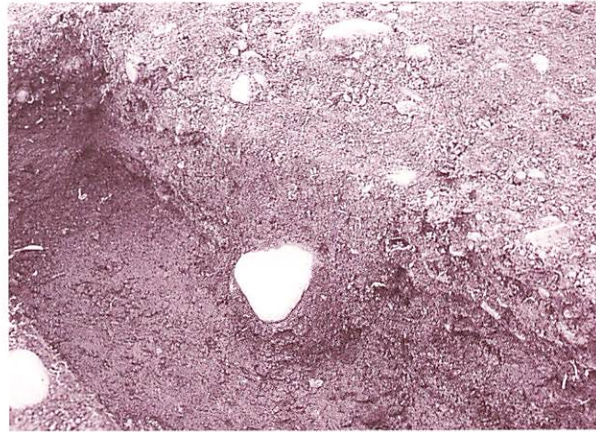
5

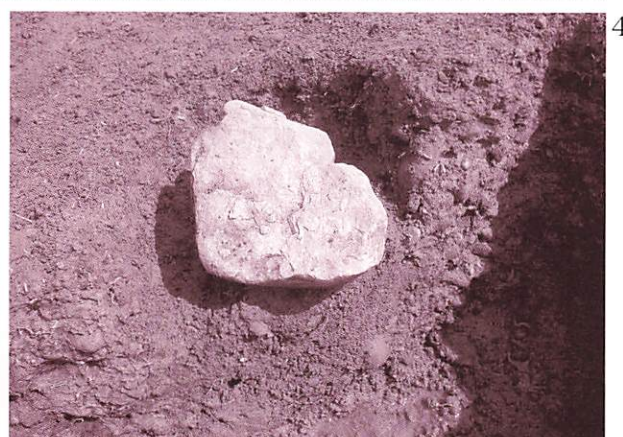
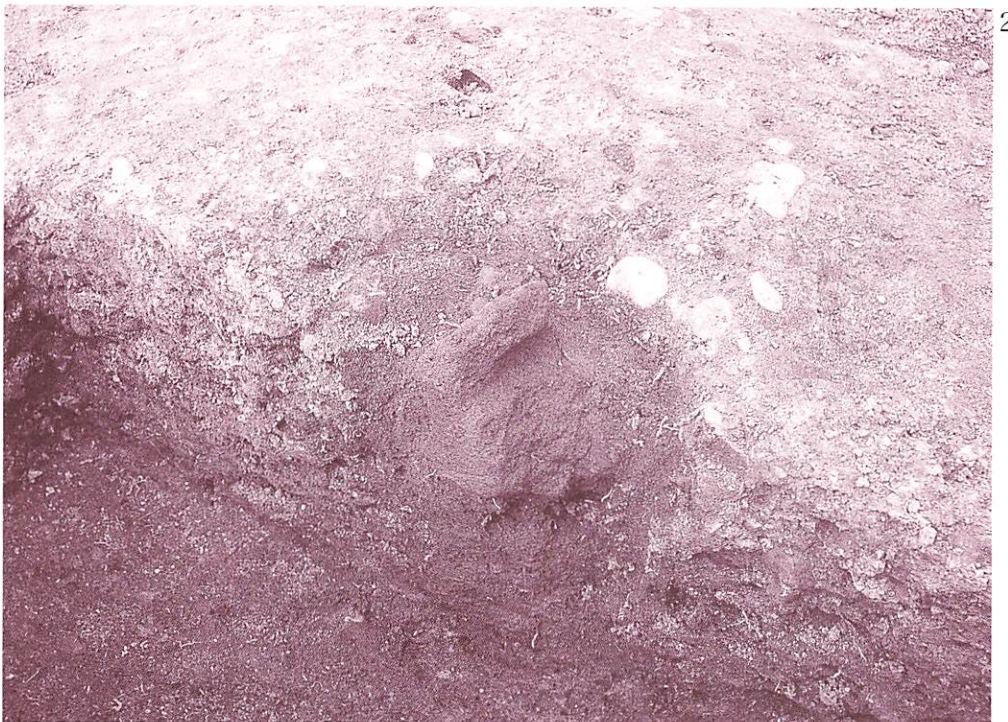


6



7





1. 建物SB-1の柱穴25土器193(南から)
2. 柱穴26石臼198(南東から)
3. 柱穴27石材(南東から)
4. 柱穴30石材(南西から)

1



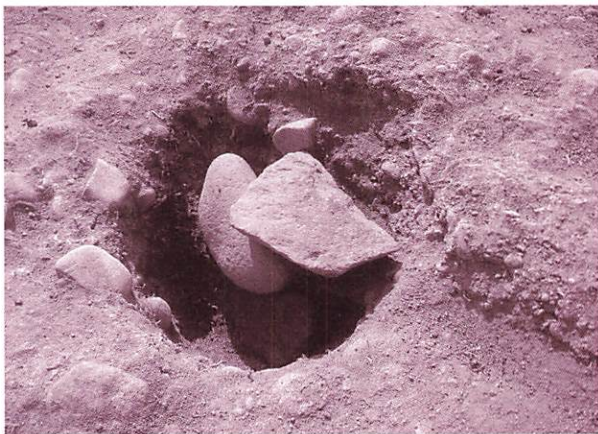
2



3



4



1. 柱穴 32 石材 (南西から)
2. 柱穴 33 石材 (南西から)
3. 柱穴 35 石材 (北東から)
4. 柱穴 36 石材 (北東から)



2



3



4

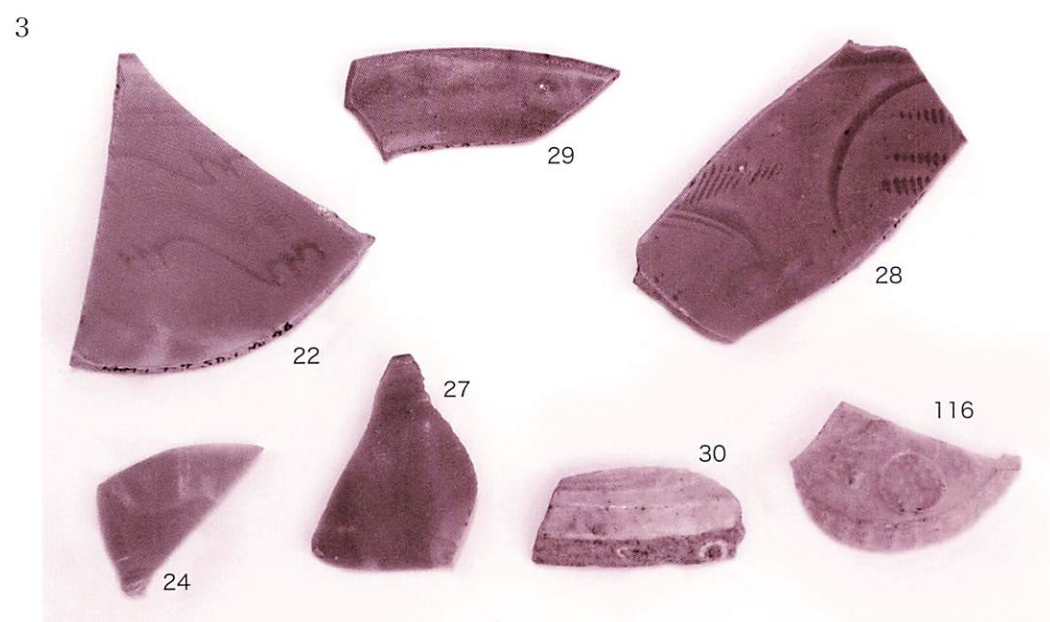
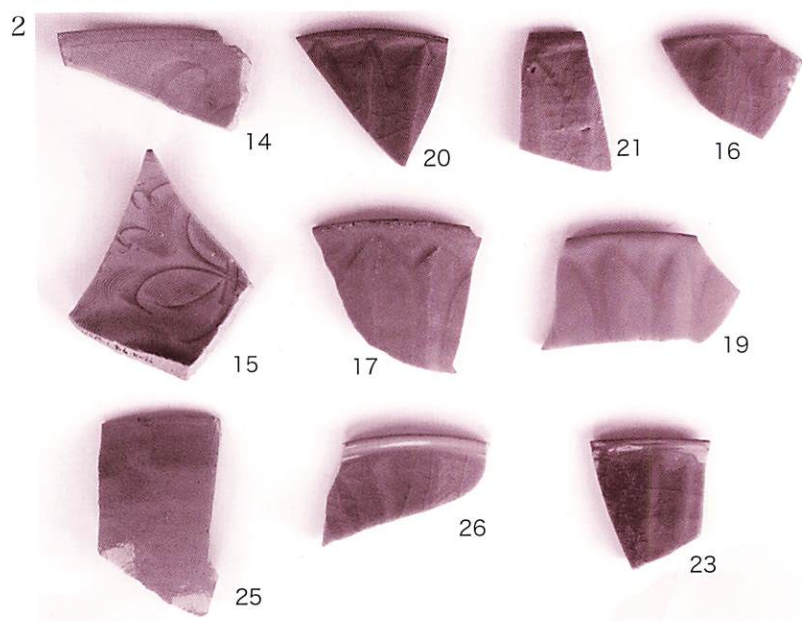
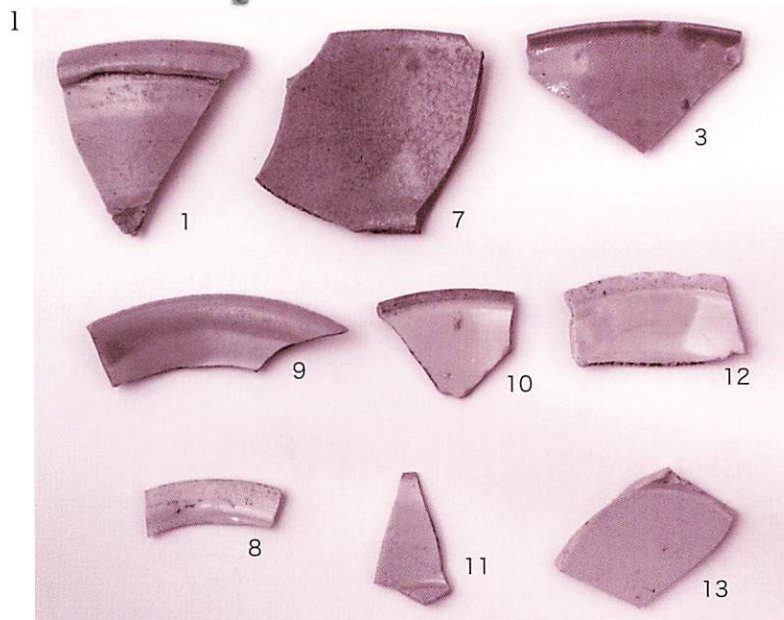


5



1. 全景 (北西から)
2. 全景 (南東から)
3. 西端 (東から)
4. 柱穴状遺構 (南東から)
5. 北壁 (南東から)

PL20 1次調査5～9トレンチ出土遺物

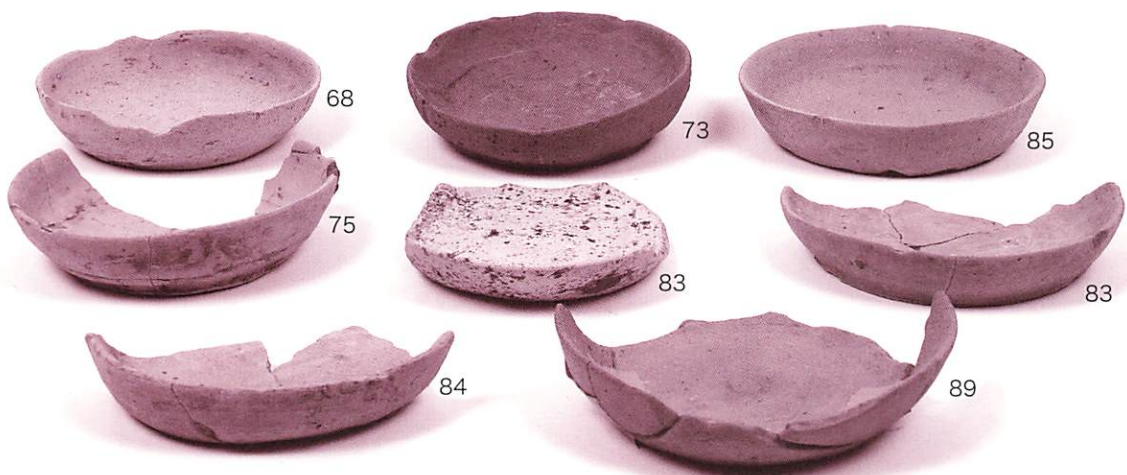


1. 白磁 (第6図 溝SD-1 出土)
2. 青磁 (第6図 溝SD-1 出土)
3. 青磁類 (第6・10図 溝SD-1 出土)

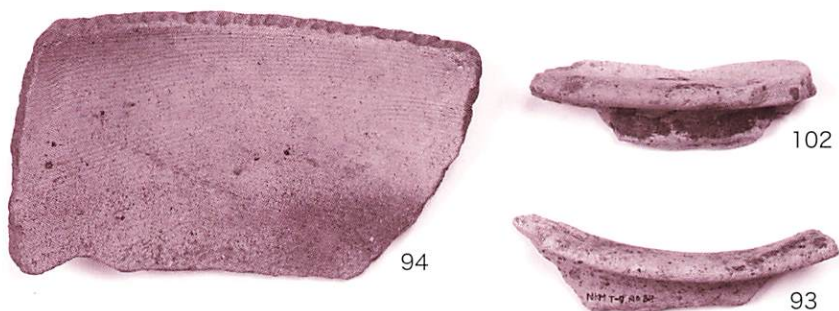
1



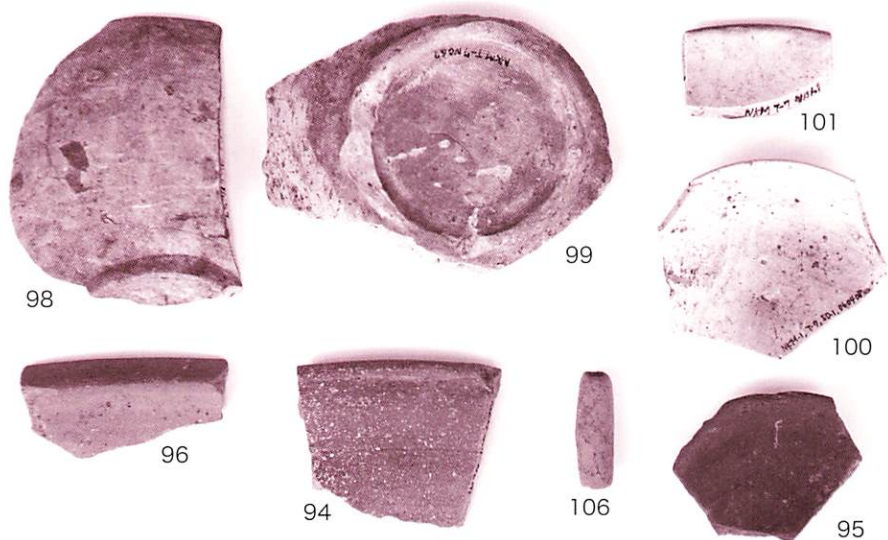
2



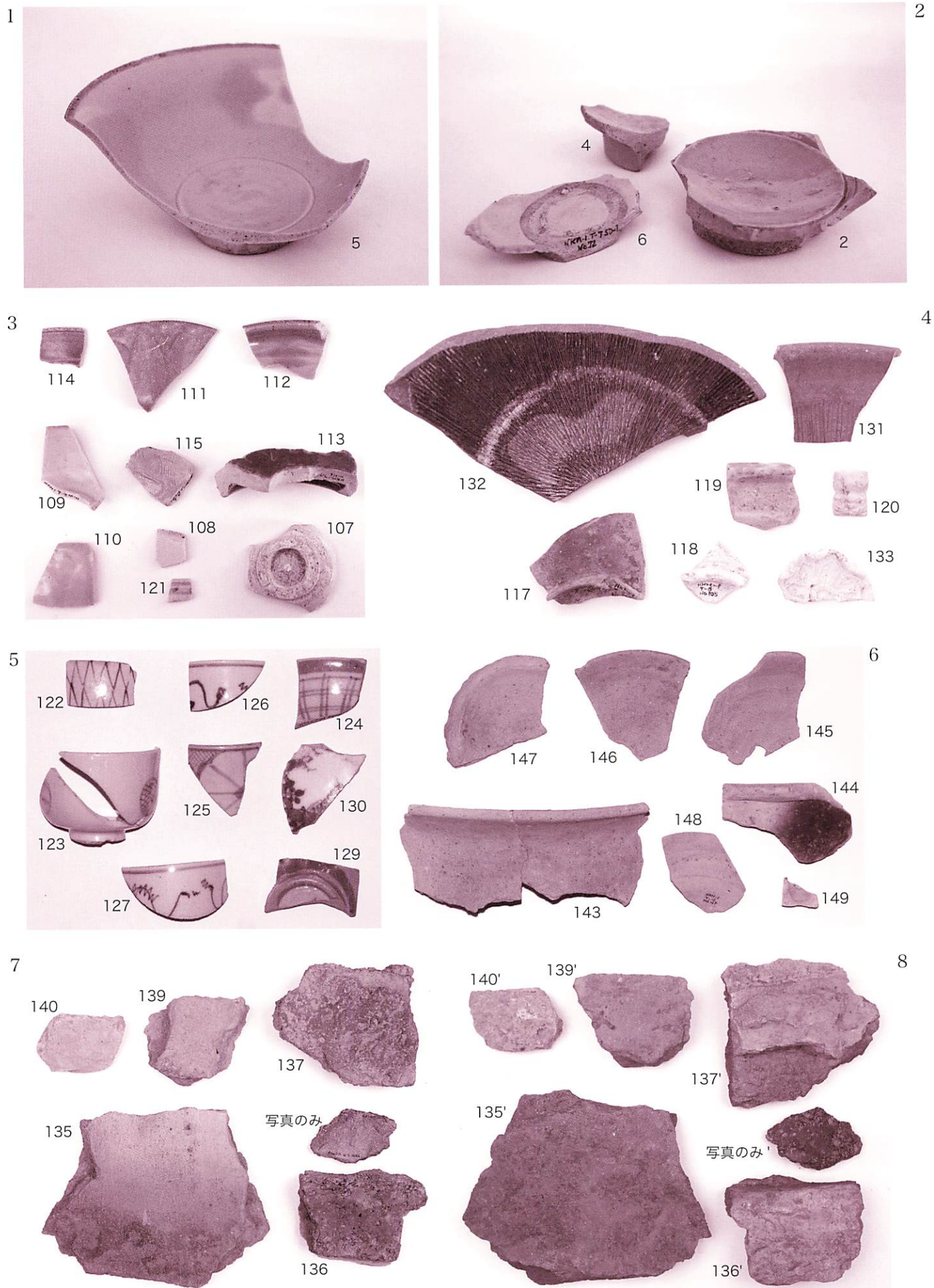
3



4



1. 土師質土器 小皿 (溝SD-1 第7図)
2. 土師質土器 杯 (溝SD-1 第7図)
3. 土器類 (溝SD-1 第8図)
4. 土器類 (溝SD-1 第8図)



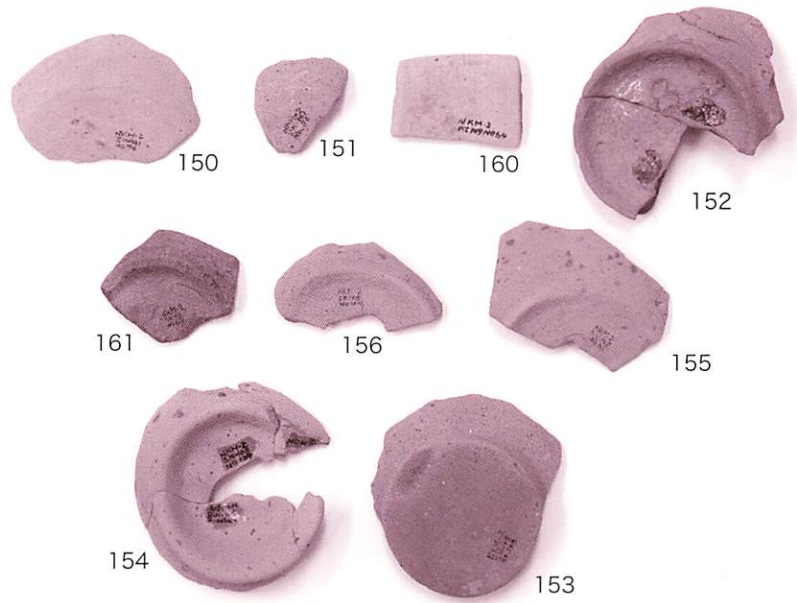
1・2. 白磁(7トレンチ溝SD-1第6図)

3. 輸入陶磁器(8-2～11トレンチ第10・12図) 4. 土器・陶磁器(8～11トレンチ第10・12図)

5. 近世陶磁器(11トレンチ溝SD-4第12図) 6. 土器類(16・17トレンチ第15図)

7・8. 鋳造関連遺物の表裏(11トレンチ溝SD-4第13・14図)

1



2



3

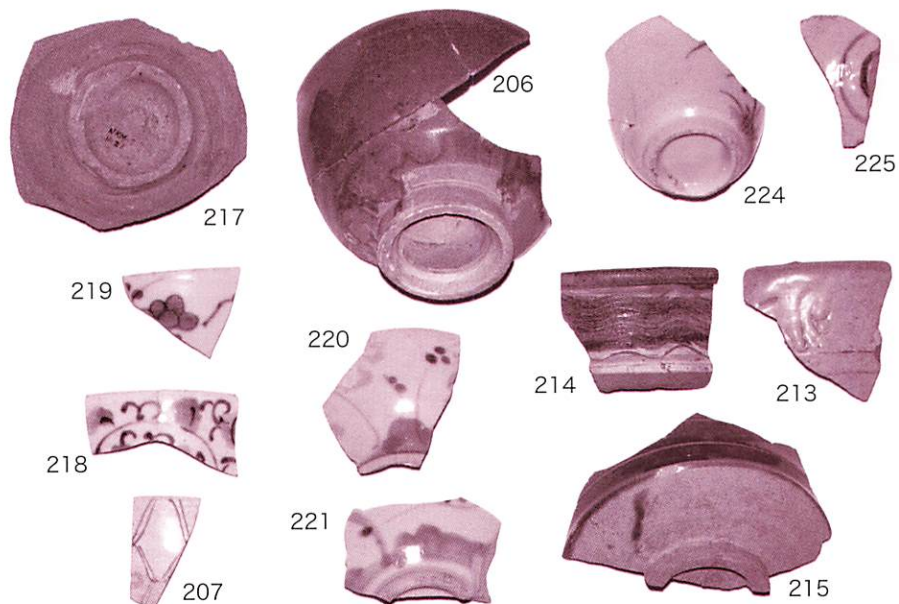


1. 土師器(土坑 SK-101 ~ 108 第 23 図)

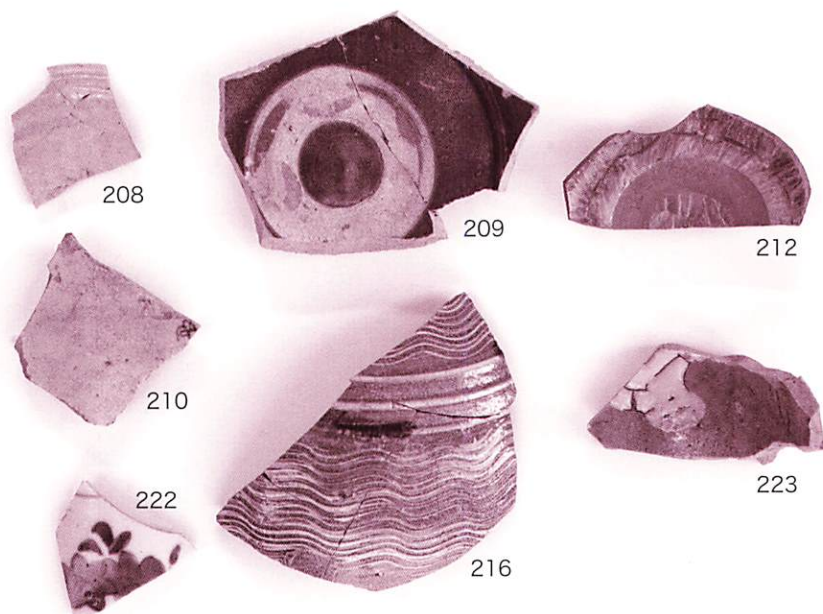
2. 土師器・須恵器(土坑 SK-115 ~ 127 第 23 図)

3. 土師器・須恵器・瓦(表土 第 23 図)

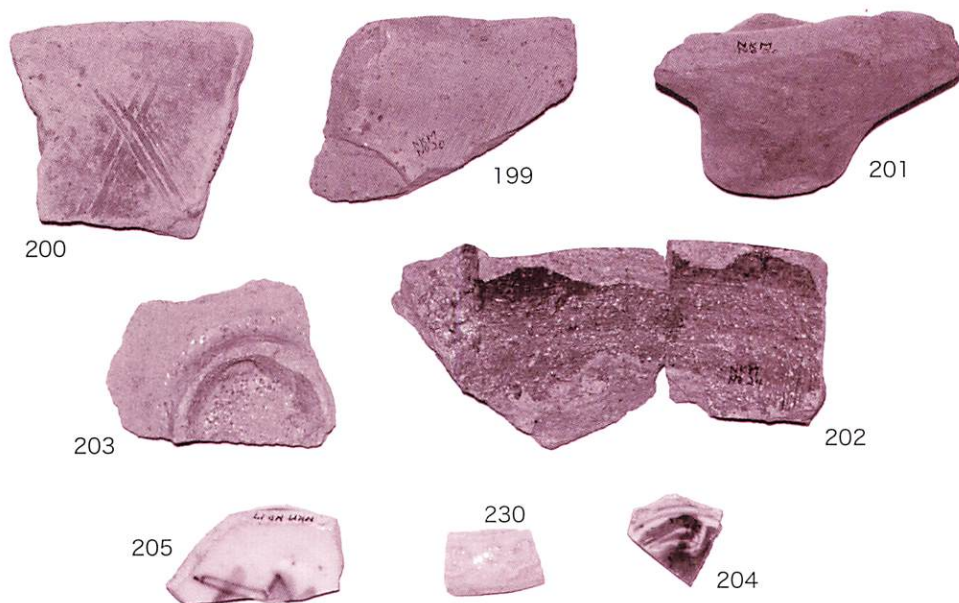
1



2



3



1・2. 肥前系陶磁器(表土 第33図)

3. 土器・陶磁器(表土 第33図 230のみB区出土 第34図)

報告書抄録

ふりがな	なかかいのもと いせき							
書 名	中皆本遺跡							
副書名	中古閑地区経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	山鹿市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	宮崎 歩							
編集機関	山鹿市教育委員会 文化課							
所在地	〒 861-0382 熊本県山鹿市方保田 128 (山鹿市出土文化財管理センター) 電話 0968-46-5512							
発行年月日	西暦 2007 (和暦平成 19) 年 3 月 29 日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかかいのもと いせき 中皆本遺跡	くまもとけんやまがし 熊本県山鹿市 なか・こが 中・古閑	43-208	203	33° 0′ 24″	130° 41′ 45″	2005.1.14 ～ 2005.3.31	1225	県営経営体育成 基盤整備事業
						2005.12.5 ～ 2006.3.31	1050	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中皆本遺跡	集落	中世 (1次調査)		溝		輸入陶磁器 (白磁、青磁、青白磁) 土師質土器 (小皿、杯)		各種の輸入陶磁器。微量だが、初期の龍泉・同安窯系Ⅰ類や青磁Ⅲ類が出土。
		近世 (2次調査)		掘立柱建物 柵 土坑・土坑墓 柱穴		中国製陶磁器 肥前系陶磁器 国産土器類		17世紀の集落の一部。柱穴から肥前系陶磁器。
		近代 (1次調査)		用水路		鋳造関連遺物		用水路は石組み。井手の一部か。鋳造関連遺物は溶解炉の破片か。

山鹿市文化財調査報告書 第3集

中 皆 本 遺 跡

中古閑地区県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行 山鹿市教育委員会

〒861-0501 熊本県山鹿市山鹿 1026-2

平成 19 年 3 月 29 日

編 集 山鹿市教育委員会 教育部 文化課 文化財係

(山鹿市出土文化財管理センター内)

〒861-0382 熊本県山鹿市方保田 128

印 刷 (株)秀巧社

◎印刷仕様

印	刷	オフセット
規	格	A 4 版
組	版	電 子 組 版 本文横組み 1 段、10pt 明朝体 (43 字 × 35 行)
製	版	カラー図版 200 線 4 色
		モノクロ図版 200 線 2 色 スミ・セピア
		本文中写真 150 線 1 色
製	本	無 線 綴 じ
用	紙	表 紙 アートポスト 220 kg
		見 返 し 色上質 特厚口
		カラー図版 アート 110kg
		本 文 マットアート 90 kg

◎この報告書は、一冊あたり 945 円で印刷した (人件費等の間接経費は除く)。

正誤表

『中皆本遺跡』 山鹿市文化財調査報告書 第3集 熊本県山鹿市教育委員会2007年
 中古閑地区県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

頁	行 図番	誤	正
挿図目次	第11 図	第11図 11トレンチ溝SD-4平・断面……20(頁)	第11図 11トレンチ溝SD-4平・断面……21
4	10 行	2月24日 報道に資料提供。現地説明会開催。	2月25日 報道に資料提供。現地説明会開催。
16	2 行	口剥げとする。	口禿げとする。
26	4 行	3.『小倉城二ノ丸家老屋敷跡Ⅱ』～と考えることができる。	4.『小倉城二ノ丸家老屋敷跡Ⅱ』～と考えることができる。
26	8 行	4.『山鹿市史』下巻、1985:577頁	3.『山鹿市史』下巻、1985:577頁
27	2 行	1.調査区の設定(第18図、巻頭図版3-1、PL8-I)	1.調査区の設定(第18図、巻頭図版3-1、PL8-I・PL10-3・4)
30	28 行	土師器の杯(第29図152)	土師器の杯(第23図152)
30	32 行	散在して土師器片(第29図153～156)	散在して土師器片(第23図153～156)
31・32	21・22図	(スケールの数値) 0 0.5m 1/10	(スケールの数値) 0 1.0m 1/20
33	2 行	土師器の杯(第29図161)など、	土師器の杯(第23図161)など、
33	5 行	甕(第29図158・159)などが少量出土した。	甕(第23図158・159)などが少量出土した。
33	9 行	深さは0.62mと、やや深い。	深さは0.53mと、やや深い。
33	13 行	土師器の杯(第29図162)など少量の遺物が	土師器の杯(第23図162)など少量の遺物が
33	18 行	須恵器の杯(第29図163)が出土した。	須恵器の杯(第23図163)が出土した。
33	21 行	土師器の杯(第29 図165) など、少量の遺物が	土師器の杯(第23 図165) など、少量の遺物が
35	8 行	(第24～26図、巻頭図版3-1、PL8～9)	(第24～26図、巻頭図版3-2、PL8～9)
35	23 行	実測図は41頁に掲載。	実測図は42頁に掲載。
40	12 行	(4)土坑(第28・29図、巻頭図版4-2、PL15・16)	(4)土坑(第28・29図、巻頭図版4、PL15・16)
42	4 行	③土坑群(第30図、PL13)	③土坑群(第30図、巻頭図版4、PL13)
50	表4 SK-127	遺物:土師器・須恵器 甕体部 小片 備考:図化できず	遺物:土師器(第23図164)・須恵器 甕体部 小片 備考:空欄に
51	表5 SK-13	遺物:…、鉄器(第30図182)	遺物:…、鉄器(第30図189)
51	表5 SK-15	遺物:…、鉄器(第30図183)	遺物:…、鉄器(第30図190)
51	表5 Pit-20	遺物:…、鉄器(第30図193・194)	遺物:…、鉄器(第30図194・195)
51	表5 Pit-25	遺物:肥前系磁器 碗(第32図195)、	遺物:肥前系磁器 碗(第32図193)
51	表5 Pit-33	遺物:肥前陶器 皿(第36図196)	遺物:肥前陶器 皿(第32図196)

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市文化財調査報告第3集 中皆本遺跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成17年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：山鹿市文化財調査報告第3集 中皆本遺跡

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL：<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025 年 7 月 8 日